

Ⅲ章 尖閣諸島の学術調査と体験記

1、講演

尖閣諸島の学術調査の思い出と島の自然	新納 義馬
--------------------	-------

2、学術調査体験記及び対談

尖閣列島調査同行記 雑役(主として食事)	上運天賢盛
----------------------	-------

高良先生との尖閣列島野外実習 アハウドリ調査回想記	新納 義馬
------------------------------	-------

対談 新納義馬 VS 上運天賢盛

— 65,6年前の尖閣諸島調査、おもい出ずるまま 語る —

平成 28 年石垣市「尖閣諸島開拓の日」式典

記念講演 尖閣諸島学術調査の思い出と島の自然

尖閣諸島文献資料編纂会 会長 新納 義馬

日 時：平成 28 年 1 月 14 日

会 場：石垣市市民ホール

講演会

「尖閣諸島学術調査の思い出と島の自然」



絶海の孤島である尖閣諸島は、センカクモグ
ラやセンカクツツジなど固有の動植物が生息す
るほか、海鳥の繁殖地としても貴重な島です。
その尖閣諸島において、これまで6回にわた
る渡島調査を行った新納義馬先生によりまず講
演を行います。

尖閣諸島文献資料編纂会
会長 新納 義馬

【講師プロフィール】
1925年鹿児島県鹿児島市に生まれる。1954年琉球大学卒業後、同人講師、助教授、教授を経て、琉球大学名誉
教授となる。植物社会学専門に、沖縄県文化庁保護課長、自然環境保全審議会委員等を歴任。琉球列島に對
ける植物社会学の第一人者であり、2005年琉球大学定年退職後定年退職後定年退職された。



写真：新納義馬
（1971年撮影）

平成 28 年石垣市「尖閣諸島開拓の日」式典 新納義馬会長の講演について

第 1 回「開拓の日」式典 講演依頼される

日本政府は、明治 28 年（1895 年）1 月 14 日、尖閣諸島の編入を閣議決定しました。

平成 22 年 12 月、石垣市議会において、「先人古賀辰四郎氏の開拓の功績をたたえ、尖閣諸島は歴史的にも国際法上もわが国固有の領土、石垣市の行政区域であることを全世界に発信する」ことを目的に「尖閣諸島開拓の日（1 月 14 日）を定める条例」が制定された。

石垣市はこれを受け、平成 23 年 1 月 14 日、第 1 回「尖閣諸島開拓の日」の記念式典を執り行いました。第 1 回式典には、「尖閣諸島学術調査に見る尖閣諸島の自然」をテーマに新納義馬会長が講演されました。以来、毎年「開拓の日」には講演会が行われています。

5 年節目の記念講演 何とスライド写真 70 枚を準備

平成 28 年の式典に、新納会長は再び講演依頼を受けた。5 年目の節目に当たる記念すべき式典で、会長 90 歳の講演でありました。第 1 回目はスライド写真 15 枚ほど使いました。今回の「尖閣諸島学術調査の思い出と島の自然」をテーマとした講演は 70 枚を準備しました。講演時間は 40 分間で、1 枚当たり 0.5 分の説明ですが、尖閣諸島をより知ってもらうには、1 枚でも多く写真を見せるべし、百聞は一見に如かずとの決意で、講演に臨みました。

本講演 3 分の 2 で終了 残り割愛分 「講演続編」で採録

新納会長は、当初 1 枚 0.5 分の説明に徹していましたが、如何せん、講演が進むにつれ段々熱がこもり、結局 3 分の 2 の 46 枚、学術調査の項と尖閣の自然「魚釣島」で時間満了となり、残り後半 24 枚の尖閣の自然「南・北小島」と「久場島」は断念せざるを得ませんでした。

後日、会長には、割愛した後半部分を説明して頂き、全講演内容をとりまとめました。

新納会長の本講演は、尖閣諸島を知る上で何かと役に立つのではないかと考え、今回、「講演資料レジメ（要旨）」、「本講演内容」、及び後半追加部分「講演続編」を掲載、紹介いたします。

参考になれば幸甚です。

平成 28 年度「尖閣諸島開拓の日」式典パンフ。表紙と講演会の案内には、新納会長のスライド写真が掲載され、往時の調査の様子が一目瞭然である。



講演レジメ 演題：尖閣諸島学術調査の思い出と島の自然

尖閣諸島文献資料編纂会 会長 新納義馬

1. 戦時前と戦後における主な尖閣諸島学術調査

	実施年月	調査団名及び調査内容	員数
※	1939.5	正木任による尖閣諸島生物調査(農林省南西諸島資源調査団に同行)	10?
1	1950.4	高良鉄夫による魚釣島単独調査 (高良学術調査団一次調査)	1
2	1952.4	琉球大学・琉球政府資源局による尖閣列島合同調査 (同上二次調査)	8
3	1953.8	琉球大学による尖閣列島野外実習兼生物調査 (同上三次調査)	13
4	1963.5	琉球政府文化財保護委員会委嘱による尖閣列島アホウドリ調査 (同上四次調査)	8
5	1968.7	日本政府総理府・琉球政府通産局による尖閣列島資源予備調査 (同上五次調査)	14
6	1969.6 ~1971.6	第一回総理府東海大学丸Ⅱ世号による海底地質調査(1969.6) 第二回総理府東海大学丸Ⅱ世号による海底地質調査(1970.6) 第三回総理府東海大学丸Ⅱ世号による海底地質調査(1971.6)	
7	1970.12	九州大学・長崎大学合同調査隊による総合学術調査	9
8	1971.4	琉球大学による尖閣列島総合学術調査	15
9	1974.	池原貞雄ら沖縄生物研究グループによる南小島の動物調査	—
10	1975.	天野鉄夫ら沖縄植物研究グループによる魚釣島植物調査	6
11	1979	琉球大学生物研究グループによる魚釣島生物調査 (NHK報道取材班に同行)	—
12	1979.5	日本政府総理府沖縄開発庁による尖閣諸島総合学術調査 // // 尖閣諸島利用開発可能性調査	30余
13	1980.3	琉球大学生物研究グループによる久場島生物調査 (NHK報道取材班に同行)	10
14	1981.7	沖縄県による尖閣諸島近海漁業調査	20余
15	1991.5	池原貞雄ら沖縄生物研究グループによる尖閣諸島生物調査 (NHK報道取材班に同行)	5
16	1995.6	池原貞雄ら沖縄生物研究グループと沖縄写真連盟による北小島海鳥調査と海鳥撮影	80余
17	2012.8	東京都による洋上から尖閣諸島現地調査	25

※網掛けは新納が参加した調査。1953年琉大による野外実習兼生物調査、1963年アホウドリ・植物調査、1971年琉大総合学術調査、1978年総理府総合学術調査、及び1975年天野鉄夫らとの植物調査、1980年NHK取材同行して久場島調査、計6回調査した。

2、主な調査の概要 (網掛け：新納参加)

○1939年(昭和14)年5月 正木任氏の生物調査

正木任(石垣島測候所)は、農林省南西諸島鉱物資源調査団に同行し、尖閣5島の動物相を調査した。魚釣島から野鼠、鳥類10種、は虫類1種、昆虫類4種、陸産貝類2種を記録した。北小島ではジュゴンの死体と鳥類4種を確認、南小島から鳥類1種、久場島では鳥類9種、は虫類1種、蝶類2種、ムカデ1種、陸産貝類1種、さらには大正島から鳥類6種をそれぞれ報告している。また魚釣島の山頂部にイリオモテラン、リュウキュウセッコクの多いことを報告、久場島にはサトウキビ、サツマイモ、バナナ、ミカン、文旦が栽培されていると報告している。



魚釣島で与那国からクバの葉採取一行と記念写真
後列右が正木任氏、左は多田武一氏(古賀商店支配人)

○1950年(昭和25)4月 高良鉄夫氏による戦後初、生物調査

高良は発田重春の鰹仮工場が魚釣島にあり、同島へ渡島、2週間滞在して調査した。戦後初の調査で、魚釣島の昆虫類の分布並びに生態調査と併せて資源調査を行った。この時魚釣島ではアホウドリの生息は確認できなかった。調査の様子は「無人島探訪記(南タイムス 1950年4月)、また子供向けに「海岸で鰹の釣れる島」「卵と鳥で島は一ぱい」(うるま新報)と報告され、尖閣諸島は「漁業資源の宝庫」「海鳥の楽園」として、戦後再び注目されるようになった。

○1952(昭和27)年4月 琉球大学と琉球農林省資源局との合同調査

団長高良鉄夫(琉球大学)、多和田真淳・知念正男・棚原清一(琉球農林省資源局)、他琉大学生3名(上運天賢盛、松元昭男、新垣秀雄)。南小島と魚釣島に上陸、海鳥や有用植物など生物相及び地質・土性、海鳥糞(グアノ)、水産資源などの富源調査をした。尖閣海域を“冬期漁場に最適”と報告している。また多和田真淳は所産植物として234種を発表、高良鉄夫は哺乳類5種、鳥類19種、爬虫類5種、昆虫類22種、陸産貝類9種を報告している。

学生で参加した上運天賢盛は、当時の体験をもとに教育副読本「魚が鳥を食った話」を著した。



旧古賀村の工場の石積み門前で
前列左は多和田真淳、後列右は高良鉄夫氏

○1953(昭和28)年 8 月 琉球大学による
尖閣列島野外実習兼生物調査

琉球大学の生物調査・野外実習。高良鉄夫・宮城元助(琉球大学)、他学生11名、魚釣島・南小島・北小島を生物調査及び学生は生物採集、野外実習した。なお開洋高校(水産高校前身)の実習船・海洋丸に便乗して尖閣に行った。開洋高校生は航海実習の帰路、尖閣諸島に上陸。カツオドリを捕らえて食べるなど貴重な体験をした。



ベースキャンプは納屋がある旧鯉工場の石積囲いの中

○1963年(昭和38)5月、琉球文化財保護委員会の委嘱のアホウドリ調査

団長高良鉄夫・新納義馬(琉球大学)、伊志嶺安信(琉球気象庁)、マスコミ関係者が同行。アホウドリ、他の海鳥、植物を調査、海洋観測も実施。高良はアホウドリの生息を確認するに至らなかった。新納は主として魚釣島の植生を調査、イヌマキ・ユウコクラン群落、ビロウ・クログツグ群落、等々の9群落を識別し報告した。伊志嶺は、水温、栄養塩、海流を調査し、「尖閣列島海洋調査報告」に発表した。沖縄TV局、科学教材会社の2者により、島や海鳥のようすが撮影され、各々16 ミリフィルム映像に記録された。

○1968年(昭和43)7月、総理府委嘱の尖閣諸島地下資源予備調査

国連のエッカフエの東シナ海低石油資源報告で、尖閣海域が脚光を浴び、これが契機となって実施された。団長高岡大輔(沖経懇専門委員)、高良鉄夫・兼島清(琉球大学)、新城鐵太郎・大城盛俊(琉球政府)、伊志嶺安進・正木譲(琉球気象庁)、田代浩(八重山地方庁)、田盛恒武(石垣市)、平良繁治・伊良波幸男(八重山警察署)ら。高良は海鳥調査を行い、63、68年の両調査を踏まえ海鳥の生息・分布、乱獲状況、保護策を報告している。兼島は魚釣島、南北小島で地下水を採水分析し、水質を発表、また伊志嶺・正木は両泊地で潮流・潮波を観測報告している。また、高岡は尖閣諸島の重要性をとりまとめ、政府に更なる調査を進言、内容は地下資源、漁業資源、海洋・海象、植物、海鳥等々と全般に及んでいる。



石垣港から尖閣に出発前の記念写真撮影
前列帽子手にしているのが高良鉄夫氏。右隣高岡大輔団長

○1971年(昭和46)3月30～4月8日、琉球大学尖閣列島学術調査

尖閣諸島の魚釣島、南・北小島及び久場島の4島の生物、水質、地質及び海洋の6分野の総合調査(調査団長池原貞雄)である。

動物班(4人):池原貞雄・長浜克重・仲宗根幸男、下謝名松栄。植物班(4人):新納義馬・玉城松栄、新城和治・宮城康一。化学・地質班(5人):平良初男・渡久山章・野原朝秀・吉田一晴、和宇慶勉。海洋班(2人):兼浜安信・金城武光(琉球水産研)。

尖閣4島の陸上動物、植物、水質、地質、沿岸動物及び海洋の6分野を総合調査した。陸上動物調査では、哺乳類2種、鳥類27種、爬虫類5種、節足動物194種、陸産貝類10種を確認報告した。南小島では71年ぶりに12羽のアホウドリを発見、北

小島では6羽のクロアシアホウドリの生息を確認した。植物調査で所産植物として魚釣島298種・久場島87種・南小島51種・北小島26種を確認した。地質や水質調査、海岸無脊椎動物調査も行なわれ、琉球水産研究所員による同諸島近海漁場調査もなされた。



図南丸での調査団一行、前列左2番目が池原貞雄団長

○1979年(昭和54)5月28日～6月7日、沖縄開発庁の尖閣諸島総合調査

尖閣諸島の魚釣島、南・北小島3島の陸上動物、海岸・陸水動物及び植物、地質の総合学術調査。学術調査と並行して海象、土質、水質、水深などの自然条件を調査し、灯台、避難港等の施設設置の利用可能性を検討した。なお、学術調査は主に九州大学と琉球大学が担当し、琉球大学から池原貞雄・安部琢哉(陸上動物)、新納義馬、新城和治(植物)、西島信昇、吉野哲夫(水中動物)らが参加した。

開発庁調査だけに尖閣諸島調査史上で最大規模のものである。海保巡視船やヘリコプターが輸送に使われた。学術調査は多くの成果が得られた。学術的に貴重なセンカクモグラ、セスジネズミが捕獲された。また植物については3島の現存植生図を作製、魚釣島の南・北両斜面の高度別植物の分布を示し、ヤギ食害を受けている植物24種を確認した。



上空や海上からも人物が確認できるように
各人ナンバーをつけての行動

尖閣諸島の自然 (※大正島、ヤギ食害は割愛した)

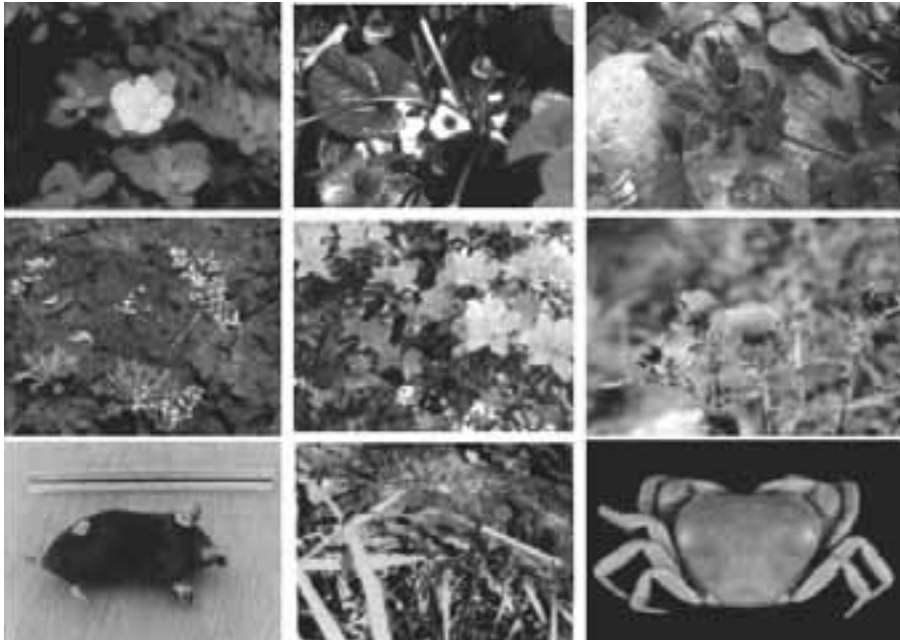
1、魚釣島

○緑豊かな最大の島、北斜面なだらかで奇形な岩山が突出、南斜面は急激な絶壁。



上段左:魚釣島遠景、左側最高 363m、右側 327m。同右:北側海岸光景、ピロウ樹林が繁茂。
下段左:中央の山間部、樹木が鬱蒼。同右:南斜面は急激な断崖、崩落した岩塊が続いている。

○固有種・貴重種が多く、生物地理学的にも貴重な島である。



上段左:センカクオトキリ。中央:センカクアオイ。同右:センカクカンアオイ、いずれも尖閣諸島の固有種。
中央左:センカクハマサジ。中央:センカクツツジ。同右:タカサゴアザミ、国内では魚釣島だけに生育。
下段左:センカクモグラ。中央:セスジネズミ。同右:センカクサワガニ。いずれも尖閣諸島の固有種。

2、南小島

○北側に岩山(138m)、南側に尖塔が屹立し特異な景観を見せ、海鳥が群棲する島。



上段左:南小島遠景、右端に北小島の一部が見える。同右:南側の岩山尖塔、高さ89m。
下段左:北小島から見た南小島。同右:海浜の草本群落。ハマダイコン、ギシギシが占める。

○カツオドリは斜面全域に生息、アホウドリは1971年に中腹岩棚で発見、現在数百羽超も繁殖？



上段左:斜面で営巣しているカツオドリ。中央:カツオドリの親子。同右:カツオドリのヒナ、全身白い羽毛に包まれ愛らしい。
下段左:中腹の岩棚で生息するアホウドリ。中央:海岸の斜面にたむろするアホウドリ。同右:周りの海でもアホウドリが遊泳。

3、北小島

○南小島と同一岩石の岩山、台地上の地形と周り絶壁をなし、全域に海鳥が生息。



上段左：北小島遠景、左端は南小島、上方は魚釣島。同右：岩山と北側の岩塔、奥に魚釣島が。
下段左：島の斜面の台地部、所々母岩が裸出。同右：斜面は高茎草地で、アジサシ類が営巣。

○海鳥は尖閣諸島中最も多い。台地斜面はアジサシ類が棲分け。アホウドリも繁殖・生息している。



上段左：海岸段丘の縁にたむろするクロアジサシ。中央：草地のセグロアジサシ。同右：台地中央部のオオアジサシの群れ。
下段左：山頂部岩場のクロアシアホウドリ。中央：アホウドリのヒナ。同右：操業中の漁船見て、魚食べに寄って来るアホウドリ。

4、久場島

○数個の噴火口を持つ火山島、流水湧水はないが古賀氏開拓の集落跡が残っている。



上段左: 周囲 3.5 キロの円形のなだらかな島、同右: コマルバガジュマルの風衝荒原が広がる。
下段左: 耕作跡地にはサトウキビ畑が。同右: 生活物資を運搬した道路、見事な石積みである。

○溶岩やコマルバカジュマル根元にはオオミズナギトリの巣穴、島周辺はカツオドリが営巣。



上段左: 溶岩に営巣しているオオミズナギドリ。中央: 巣穴は林地内の溶岩に多い。同右: 隙間で営巣している。
下段左: 岩礁で一休みしているカツオドリ。中央: 抱卵中のカツオドリ。同右: 北西側洋上のカツオドリの群舞。

「尖閣諸島開拓の日」式典 記念講演会

尖閣諸島学術調査の思い出と島の自然

尖閣諸島文献資料編纂会

会長 新納 義馬

(本講演内容)

ご紹介頂いた新納です。今日は尖閣列島について紹介していきたいと思います。

前半は沖縄が尖閣列島にどう関わってきたのか、後半は尖閣列島を調査した、調査の内容について、これからスライドを通して紹介いたします。



第1部 尖閣諸島の学術調査

1-1、昭和14年5月農林省資源調査団に同行した正木任の調査

スライドNo.1 これは石垣の気象台と所長の岩崎卓爾さんと正木任さんです。その正木さんの息子さん、正木譲さんは気象台に勤めていて、尖閣列島の調査にも行ってます。この譲さんのお父さんが正木任さんです。この方が一番最初、沖縄の方で、尖閣列島の魚釣島、南北小島ですね。それと久場島（黄尾嶼）、その4つの島を調査して、そこにアジサシ、クロアシアホウドリとか海鳥、あと陸産貝のタダマイマイ、アツマイマイとか、こういったもの、また久場島には、いわゆるサトウキビだとか、サツマイモ、植えたものですね。そういったものが栽培されていたということが一番最初に報告されています。

スライドNo.2 これは久場島でのキャンプの様子で



す。これは昭和 14 年の農林省の南西諸島資源調査団です。正木任さんはここ（右から 2 番目）にいます。

スライドNo.3 これは北小島ですね。正木さんが行った頃の海鳥の様子です。主にアジサシ類、クロアジサシ、それからオオアジサシ、セグロアジサシ、そういった海鳥です。もう数えることのできないですね、ほんとうに、そういう格好で、飛び立つと空が曇る位、いっぱいいました。



スライドNo.4 これは尖閣列島の魚釣島はビロウがそうとう生えているわけですよ。

これを船の綱、そういったものに利用するために、ビロウの葉を採集に与那国から、魚釣島を 3 つに分轄しまして、これこそ 1 回で採るとなくなるので、それを 3 つに分割して、計画的に採集しておられたというこれ与那国島の人です。これ（後列右）が正木さんですね。これ（前列左 2 人目）は与那嶺さんという方らしいですが、この方



（前列左端）のお父さんですね。で、これは、沖縄の人にとって、かなり以前から利用していたという証拠にもなるわけです。

1-2、昭和 25 年 4 月戦後初の高良鉄夫先生の調査

スライドNo.5 これはご存知の高良先鉄夫先生です、尖閣列島の学術調査に沖縄の人として最初に関わられた。これは八重山農林高校の校長先生をなさっていた時の写真です。

スライドNo.6 これは発田重春さんなんですけど、この納屋を使って、魚釣島でカツオ節工場をやっておられました。その時に高良先生が、単独で調査に行かれまして、2 週間ほど魚釣島に滞在されて、尖閣列島の調査を初めて報告なさっています。その時いわゆる野ネズミだとか、シュウダも多いと報告されています。



スライドNo.7 これは高良先生、これは尖閣列島で調査されて、採集してきたシュウダです。非常に大きなヘビで、無蛇です。これが海岸に上陸して、海岸で一番最初に出くわす、クサトベラとかモンパノキとか、そういった群落の所に必ず見けることができますね。

私も何回か行っているわけです。行く度に上陸して一番最初にお目にかかるのはこれで

す。シュウダで、無毒蛇ですね。



1-3、昭和27年4月琉球大学・琉球政府資源局合同調査

スライドNo.8 これはその時の新聞です。私が琉大の学生の時、私は行ってません。高良先生と林業試験場の場長なされていた多和田真淳先生、琉大の3年生の生物の学生上運天賢盛君と新垣秀雄君、松元昭男さんです。この時は一番最初戦後、琉球大学に高良先生が来られて、最初に尖閣列島に調査に行かれたものです。これは石垣島に来て、石垣島の漁船を借りて、尖閣列島に行ってます。



スライドNo.9 これがその時に漁船の甲板で、漁師さんたちと一緒に撮った写真です。これが高良先生（前列中央）、隣が多和田先生、上運天君（後方）、水産研究所の知念正男さん。資源局の棚原清一さん。あとは漁師の皆さんたちです。

スライドNo.10 これは南小島の洞窟の中で、食事光景で(笑)、これが高良先生(真ん中)、これが多和田先生(右隣)ですねえ。これは誰かな、ああ琉大の学生ですね(笑)。



スライドNo.11 南小島で、嵐に遭い、1週間ほど閉じ込められて、天気が回復したので、船が迎えに来て、やっと魚釣島に向かったわけです。魚釣島では古賀さんの工場跡の納屋に宿営予定をしてました。そしたら、その掘割（船着場）は波が荒く、船を着けることができない。それで少し離れた南側かな？ そこに船を着けさせて上陸して、そこから宿営地に向かったわけです。これ見て下さい。これもう冒険ですよ（笑）。斜面に1人、2人、・・・、4名かなあ、落ちたら危ない。魚釣島は、こういう風に地形は急峻な岩が剥き出しにしたような状態が多いです。時間がないので次に行きますが、お配りしたレジメにこの調査の成果などを記しますので、あとでゆっくりご覧下さい。



1-4、昭和28年8月琉球大学学生の尖閣諸島野外実習

スライドNo.12 これは高良先生が学生実習とあって、生物学科の学生、それから農学部の学生を連れて、一番最初に学生として尖閣列島に調査に行った写真です、鳩間島の灯台前で。これ（最前列）は宮城先生です、高良先生はいませんが、これ分かります？ 県会議員した瑞慶覧長方君、これ八重山出身で琉大教授していた大屋一弘君と東清二君、2人は農学部の2年だったんじゃないか、この時私も尖閣列島行きました。



スライドNo.13 これはその時の北小島の写真です。とにかく一番最初、北小島に渡った時は、船から下りる足場にもうアジサシがたむろしているわけですよ。足で払わないと上陸できない。それ位海鳥が多かった。島に上がると、上の方の草原は、殆ど赤茶けて枯れて、糞で、で、臭くて島の上まで上がって行けない。私は途中まで上がって行きましたけど、真面目でなかったんですね（笑）。あんまり臭くて、もう調査どころでなかった。それで下りてきて、海岸の所で皆が帰って来るまで待ちました（笑）。当時はそれ位、北小島の方は海鳥が多かった。というのは、尖閣列島の海というのは、ものすごく資源が豊富で、魚類が多いという話になるわけです。



スライドNo.14 これはその時の農学部の泉川寛君、これは田中一郎君で、これは瑞慶覧長方君ですね。海岸にビロウの葉っぱで小屋を作って、それに寝泊まりしながら、魚釣島で調査した（笑）。これ、そういう懐かしい写真です。

スライドNo.15 これは古賀さんの石垣です。古賀さんの石垣は城壁みたいな恰好で、ものすごく頑丈ですね。それが残っていたから、石垣の中で、生活されていて、これはカツオ節工場の跡ですね。中の平地で、学生の何人かは小屋掛けして、そこをベースに調査していたわけですね（笑）。これ学生実習の様子です。



1-5、昭和47年4月琉球大学尖閣列島合同学術調査

スライドNo.16 これは琉大が戦後初めて、尖閣列島の合同調査をした時のメンバーです。これは学長していた池原貞雄先生、これは長浜克重先生、下謝名松栄君、動物ですね、これは植物の玉城松栄、これは宮城康一、で、こっちは地質の野原朝秀先生、化学の渡久山章君、植物の新城和治です。これは動物の仲宗根幸男君で、これ学生で、これは化学の吉田一晴君、で、総合的に琉大が尖閣列島の調査に、一番最初に関わった時の写真です。



スライドNo.17 これはその時のキャンプ場で、古賀さんの工場跡の平地に張るんですが、しかし、長い間放置されているので、こういったススキが茂ってます。ここでキャンプ張っているのは、ここに飲料水が確保されているコーナーがあるんですよ。それで魚釣島の調査に行く時には、大体ここでキャンプを張って調査するというのが普通ですね。



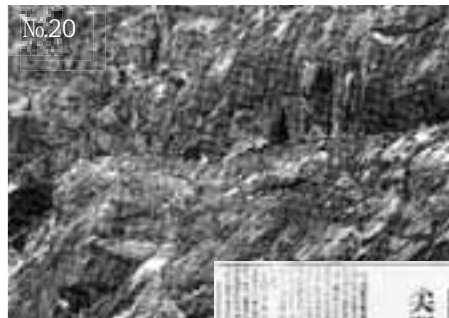
スライドNo.18 これは石垣市が魚釣島に建てた領有権を表示するため領有標柱、がこれ貴重な実績ですね。いわゆる尖閣列島は、日本の、沖縄県の石垣島のものだよという、これは証拠です。



スライドNo.19 これはあそこの水場です。ここが、私感心するのは、古賀さんが、いわゆる、魚釣島、尖閣列島の開拓やっているわけですよ。その時に魚釣島で、小屋掛けして、そういうカツオ節工場なんか造った時に、水は合同調査で化学班の連中が魚釣島の何カ所かで、いろいろ水を採って化学分析しましたけど、この水が一番ですね。尖閣列島で飲料水に使える水としては、ここが一番いいと、で、尖閣列島の水は、いわゆる海水を薄めたような水がいわゆる魚釣島の水です。魚釣島には、ここに貯めた、こういうように流れている湧水があるわけです。そういう風な湧水も、非常に潮風の影響を受けて、水そのものに塩分が非常に多い、ですから、一番最適なのがここなんです。結局、古賀さんがそんな所も考えて、ここに開拓の拠点を置いてやっているわけですよ。そういう点では非常に古賀さんの視点は優れたものがあります（笑）。



スライドNo.20 これは南小島でアホウドリを撮ったものです。琉大の調査団がこれは行った時ですけど、動物の池原先生が、かつてアホウドリがいたんだと、ひょっとしたらアホウドリが見えるんじゃないかと、で、高良先生が一番最初に政府の委託で調査した時（1963年度）には、アホウドリが見えなかったんですね、そのあと行って、南小島で、主体部岩山の断崖の中腹に、岩棚があるんですよ、そこで何か白い鳥が動いて、それが何か分からないんですね、だけど、鳴き声をもう一生懸命聞いていて、どうもそれアホウドリじゃないかと、それで南側に廻って、確認して、いわゆる戦後初めて南小島にアホウドリが生息しているんだとそういうことが分った（笑）。



それで結局アホウドリが 14 羽いたことが確認されています。

それが新聞で発表された時のものです。



スライドNo.21 これはその時に北小島に行った時にクロアシアホウドリを撮ってる所です。私は下の方で調査していましたので、化学班の連中が、先に登って行って、北小島の少し平坦な所に、鳥が巣を作っている所があるわけですね。そこに行ったら、大きな鳥がいる！大きな鳥がいる！と叫んでいたから、私も慌てて行って見たら、クロアシアホウドリが3羽いました。で、まあ2羽が仲良くしたもんですから、で、1羽は、何か、もう逃げて行って（笑）、2羽がもう仲睦まじやっているわけですよ（笑）。で、人を見たことがないわけですよ。



それで私たちが取り囲んで、そうしても全然逃げないですね（笑）。これは非常に貴重な写真です。北小島はそういう風に人にあまり荒らされてない。いわゆる鳥が人を見ても怖気つかないですよ。そういう点は1つの証拠になるんですね。



スライドNo.22 これが2羽のアホウドリです。で、私は、このあとにこの付近を調査して反対側の斜面に下りて行ったら、2つの大きな鳥が岩棚の方にいたので、写真を撮ったんですよ。あの時は北小島にアホウドリがいないと思っていたんですけど、あとで写真を調べて見たら、これはアホウドリの若鳥だったですね、北小島にもアホウドリはいたわけです。

スライドNo.23 これは尖閣列島を調査する時に、県の水産試験場の試験船南丸で行きました。それで非常に船長さんが好意的に魚釣島に上陸する前に一周して下さしまして、魚釣島の全体像を掴むということで、これ南側の西の端っこのなるんです。ここ通り越して行った所に古賀さんの村があるわけです。



船長さんの心遣いに感謝し、皆一生懸命に洋上から島を観察している所です（笑）。

スライドNo.24 これは久場島ですね。久場島を調査している所で、あの島は元々火山でできた島で、山頂の火口（跡）にかけて調査している所です。これ（右端）は池原貞雄先生ですね。池原先生は動物班で、ギシギシの群落の昆虫を調べているようです（笑）。残り3名

は植物班です。これ（左より）新城和治君、私、宮城康一君です。

スライドNo.24 これはこの時の調査メンバーで調査を終えた夜のひと時です。

びっくりしましたけど（笑）、動物班の長浜克重先生が三味線もって弾き唄っているわけです。でも見て下さい、皆唄ってますか？（笑）。唄ってるのは三味線弾いている長浜先生だけです、あとは唄ってませんよね。情けないですね（笑）。普通なら自分の生まれた島の島唄（民謡）を、これ1つ位は唄えればいいのに、私も唄いませんでしたけど（笑）。可哀そうですね。わざわざ魚釣島まで三味線持って来て、弾いてくれているのに、誰も唱和してくれないですから（笑）。でも長浜先生がうらやましいですねえ。私もこうありたいですねえ。三味線弾いて。（笑）。



1-6、昭和54年5月沖縄開発庁による総合調査

スライドNo.26 これは海上保安庁の巡視船です。これに乗せてもらって調査に行きました。これ魚釣島です。ここ（左端斜面禿部）が古賀さんがやった跡です。今は殆どハゲ（禿）ですが昔はここに色んなもの植えていたと思いますね。普通調査する時には大体ここをキャンプにするもんですから。この斜面をどんどん登って行って、ずっと頂上につながるわけです。ここは南側にも行く所です。で、ここを登って行って調査するというのが普通のやり方ですね。

スライドNo.27 これはいわゆる古賀さんの工場跡の平地です。で、ここに大体キャンプするわけですね。これ（海岸の掘割）は古賀さんが、石灰岩珊瑚礁を掘って、掘割にしてここを船着き場にしているわけです。ここは今ハゲてますでしょう。私が一番最初に尖閣列島に、高良先生に連れて行かれた時には、ここは砂浜、ずーと砂がいっぱいありました。ここら付近まで、で、そのあと砂が全部剥ぎ取られているわけです。尖閣列島周辺は、非常に波が荒い、しかも流れが速い、そういうようなことがあって、また非常に調査には、大変苦労する。



で、行ったら最後、いつまた帰れるか分からないし、またその日に帰らなきゃいけないこともあります。日程言われても、その日程通りにできるということはありません。私は一晩で泊まって、翌日連れに来てもらったという経験あります(笑)。そういうことで、尖閣列島の調査と云ったようなものは目的見て、2週間、あるいは10日という計画で行っても、必ずしもその日程で調査で居れる、そういう安定して調査できる場所ではありませんね、強風とか高波来たら、いつ帰れるか分からない。そういうことを予想しながら調査する、そういうのが尖閣列島の調査の実情です。



スライドNo.28 これは開発庁調査の時のメンバーです。琉球大学と九州大学、山口大学から参加しました。この時には魚釣島、北小島、南小島の3つの島を調査しました。私は参加した合同調査では琉大調査と開発庁調査で2回、あとの調査入れて、全部で6回尖閣列島に調査に行ってますけど、この開発庁の調査が一番長期間調査することができました。この調査の時には



は開発庁から炊事専門にやっていた方がお見えになられて、いろんな食べ物、もう非常に贅沢な調査でしたね。もう食事は心配しなくてもいい(笑)。調査して帰ってくれば、いわゆる食べ物が用意されていると、こういうような調査を初めてやりました(笑)。

スライドNo.29 これは北小島の調査です。これはそれぞれ番号を付けてましてね。これは上からでも誰かと確認できるという格好で調査しました。これはセグロアジサシです、全部、で、前は、足の踏み場もない位、セグロアジサシ、クロアジサシが北小島の全部にいました。高良先生と行った時(1963年アホウドリ調査)とは非常に鳥の数が減っているわけですね。それは台湾の漁船が乱獲したからです。台湾の漁船が何回か島の周辺にいましたよ。



聞いたら魚獲りに来ているというんですけど、魚は獲っていない。北小島に上がって、鳥の卵をかき集めて山盛りになっているわけですよ(笑)。それを孟宗竹のイカダに、その卵を全部収獲して持ち帰る。そういう格好で行く度に海鳥の数が減っている。これは事実です。

一番最初、私が高良先生に連れて行かれた時(1953年尖閣列島野外実習)には、とにかくボートから下りることすらできない。足でヒナを蹴るか、親鳥を蹴るか、こう言う格好で

上陸しましたよ。もうもう数えきれない位アジサシだから、島全体一面鳥の糞でハゲ山になって、それが開発庁で行った時はこういうような状態、鳥も減って、草も生えて、一面ヌビアですよ。そこに幾つかのアジサシのコロニーがある。そういう格好です。

スライドNo.30 これは行く時は開発庁の船で、これはヘリコプター、ヘリポート造って置いて、そこに来て、島から島に移動する時は乗せてもらいました。お陰様で、効率のいい調査ができました。非常に有難い調査でした。

スライドNo.31 これはベースキャンプでの夕食のひと時ですね。日中の調査の苦勞も癒され、明日の調査の活力源にもなります。全員の食事を賄ってくれたコックさんに感謝です。



第2部 尖閣諸島の自然

これから尖閣列島の各島の自然について、お話をしていきたいと思います。

2-1 魚釣島

スライドNo.32 これは魚釣島です。ここ(右端海岸部)が古賀さんの所です。ここを回って南の方(右側斜面部)に行くと、こういう風な絶壁です。これ(南側斜面中央部)は確かヤギが入ってあとの写真です。

ヤギが入る前は崖ですけど、もう少しは植物が生えていました。ここ(南側斜面の海域)は北風が吹き荒れた時の漁船の溜まり場、避難場になります。

スライドNo.33 これはヤギが入る前の海岸、海岸は大きな砂岩ですね、それと変成岩があるわけですけど、それが上から転がってきて。それに植物は非常にビロウが多い。魚釣島は北斜面は、沖縄みたいにこういう緑じ



やなくて、少し黄ばんで見えます。全体のピロウが北斜面は殆どいわゆる森林の上層を覆っているような恰好で、それ位ピロウが多い。

スライドNo.34 これは北斜面ですけど、平坦な所（右下端）、これは川です。で、これがピロウで、この黄色い中のものはこれ全部ピロウ。

で、この平坦な所は少し流れが流水としてあるわけですねえ。尖閣列島の水は、先ほども申しましたように潮水とこういう植物の腐食したもの、地下の岩盤が溶けた成分、この3つの掻き混ぜたような恰好のもので、それが尖閣列島の水で、そして一番いいものは古賀さんが所に流れているものが一番いい、それでも酸性が非常に高い、そういう風に言われています。



ですから、飲み水がいいのは、魚釣島だけで、他の所は、飲料水に適する所はありません。他の島は、北小島も、南小島もいわゆる洞穴なんです。で、洞穴があって、この洞穴に上から点々と落ちて来るんですね、それを下のドラム缶に溜めて、その溜る水を使う、ですから、台湾船は魚じゃなくて、海鳥を採りに来た時も（笑）、魚釣島に水を採りに行くんですよ。魚釣島から水を採って、北小島とか、南小島に上陸して、卵採取してました（笑）。そんなわけで、そういう点では、魚釣島にこのように木が生えて、水が流れていると言うことが、尖閣列島を考える時に、非常に助かるわけです。尖閣列島で生きていくには、魚釣島の水を頼る以外にはない。

スライドNo.35 これは南斜面、これはヤギが入る前の写真、これ急峻で、非常に危ない。今はここもヤギにやられて殆んど崖になっていますね。頂上付近、こういう所に、センカクツツジとか、センカクオトギリだとか、こういう崖の岩にへばり付いている。

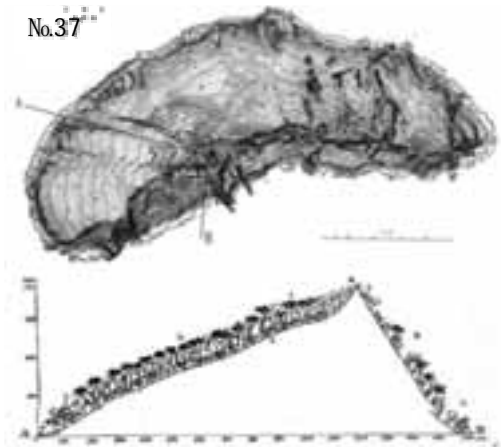
スライドNo.36 はい、これもヤギが入る前の南斜面、で、ヤギが入る前はこんな状態だったですよ。これ（海岸部）は隆起サンゴ礁です。で、私は開発庁の調査の時にここに下ろしてもらって、初めて南斜面の調査することができたんです。ここは崖崩れがありまして、で、ここから上に上って行きました、調査しながら北斜面に下りたんですけど、一番最初、ヤギ



が入る前は、南斜面の崖でもこういう自然が残っていた。そういう意味でも、これは非常に貴重なスライドということです（笑）。

スライドNo.37 これはその時に調査した結果です。ここです、開発庁のボートに乗って、ここ（B）に渡って、ここを調査して、こうやって北斜面（A）に下りて来た。模式図はこういう風な格好で、上にあるのはピロウです。

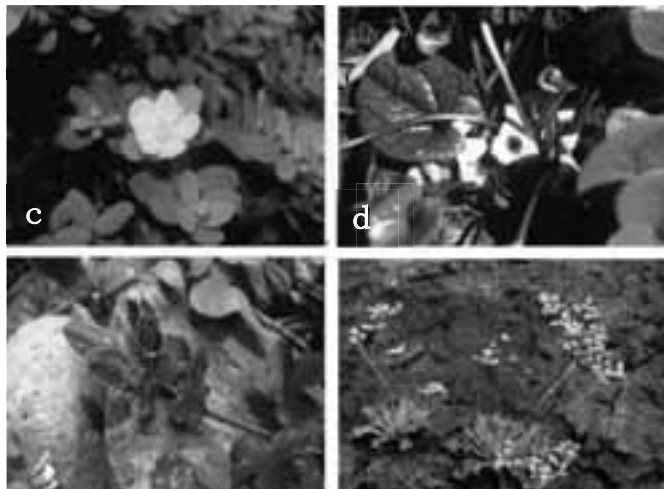
で、私は6回尖閣列島に行ってますけど、南斜面を調査したのは、この時が初めてですよ。非常に助かった。開発庁の時にです。



スライドNo.38 はい、これは魚釣島のセンカクオトギリ (a)、センカクトロロアオイ (b)、センカクカンアオイ (c)、それからセンカクハマサジ (d)、これは尖閣の固有種です。センカクトロロアオイは南斜面に初めて行って、崖に上る前に、見つけた（笑）。で、センカクハマサジ、これは偶然見つけたわけですよ（笑）。いつも1人、2人で調査に行きますけどね、海岸やる時には、とにかく波に近い所にはあんまり植物ありませんので、陸に近い所を歩きながら、調査するわけですよ。ところがこの時には、北斜面ですけど、2人で、分れて、新城君は波打ち際、私は斜面に近い所、その時に斜面の所を歩いていたら、初めてこれを見つけました。その前に何回か行ってますけど、あるだろうことは分ってました。それは多和田先生が行って見つけているわけです。その時の報告があるので、何回も行って、目つけきれなかったんですけど、2人で二手に分かれて、同じ場所を歩いて、その時に見つけた（笑）。

で、非常に貴重なものですけども。これはセンカクオトギリ、ふつうオトギリの仲間と言うのは草です。ところがこのセンカクオトギリは木本です。そういう点では面白く、持って来て植えれば、非常に園芸化して廻るわけですよ。インターネットで販売されていると聞

No.38



いています。これは誰が持って来たか分かりませんが。私たちが採ると、植物の先生が乱獲するわけにいけませんので、生ものは採らないで、標本としては持ち帰りますけど。どなたかが持って来て、栽培しているわけですよ（笑）。これは非常に貴重なものですね。

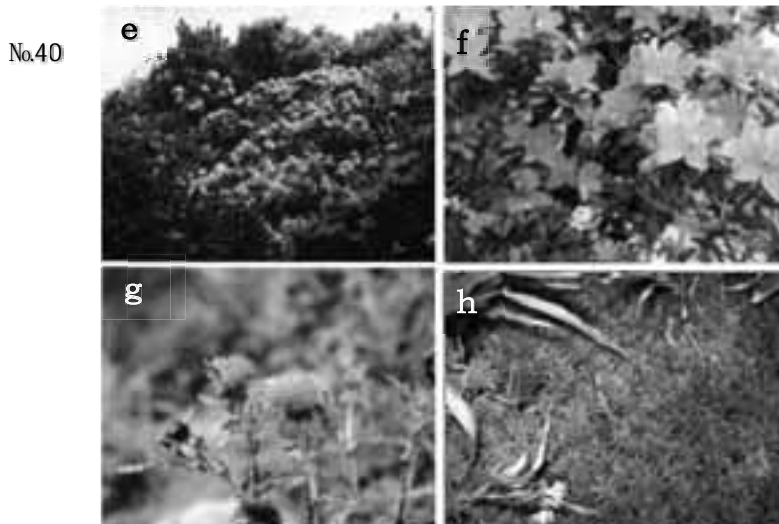
スライドNo.39 はい、これはイリオモテラン（左）、これは石垣、西表にもあります。これ（右）はクスクスヨウラクラン、これも魚釣島にあります。琉球列島でも、魚釣島は非常に自然が残っている。そういう代表的な島ですね、で、島は人為的に攪乱されているか、どうかを評価する時に帰化率といったもので測る。



いわゆる魚釣島に生えている植物の中に外来種がどの位生えているかどうかを、そのようなことを帰化率というわけですよ。石垣島だと 30%から 40%位、那覇市なんかは 50%位。そうすると魚釣島は 1%位です。いわゆる全植物の中に、それ位自然が残っている。かつて古賀さんが野畑もしたが、山の中はあまり荒らされていない。それほど尖閣列島の魚釣島は帰化率が非常に低い、それとついでですけど、久場島は魚釣島よりは、少し高くて 1.7%位、帰化率はありますね、で、尖閣列島は非常に帰化率が低くて自然が残っている。

スライドNo.40 これ⑨はセンカクツツジ（e、f）、これタカサゴアザミ（g）、これ台湾にもあります。とてもきれいな花です。

これオオミズゴケ（h）、ミズゴケって植物を移動させる時に根元にやるでしょう。



内地では普通です。沖縄県ではミズゴケはここだけにしかありません。これは沖で通ったら、海岸にピカピカに、鮮やかに光っているのが見えるわけですよ。で、何んか不思議だなあと思って、魚釣島に下りて、その場所を探したら、これでした。それでミズゴケを見つけることができたんですね。非常にこれは貴重なあれですね。ここには波打ち際だから、ちょっと奥に入ったら、水が流れていてその湿地の傍にこれが生えている。そこだけです。こんなの、めずらしいんです、ミズゴケがあるということは。

スライドNo.41 これはシユウダ、これは無毒です。これは安部さん、京都大学に行かれて、事故で亡くなった。合同調査で行かれた時に琉大の動物班と一緒にきました。



(この時、講演の残り時間 10 分ですと合図あり)

スライドNo.42 はい、これはセンカクモグラ (左) です。これも開発庁の調査で行った時に、古賀さんのカツオ節工場跡の平地で、九州大学の動物班を見つけました。1 個体 1 固有種で、非常に貴重なものです。これはセスジネズミ (右) です。

これは背中の方に筋が入っているんですよ。これも、この時初めてセスジネズミを採取しました。

No.42



スライドNo.43 これはセンカクサワガニ (右) です。これも固有種です。これは陸産貝でタカラノミギセル (F)、タカラホソマイマイ (G) です。これも固有種で高良先生が見つけたものです。

No.43



スライドNo.44 これは最近出て来たヤギさんですね。ヤギは4つ足ですから、急峻な崖でも平気で登るわけですよ。しかも自分なんか食べるのを邪魔するのはないわけですよ。ですから、たらふく食べて、何というんですか、世代の交代が非常に早いわけですよ。ですから非常に数が殖えるのが早い、開発庁の合同調査（1978年）で、私達が行った時、古賀さんの周囲だけに、このヤギがいました。その時に、ヤギを、合同調査で行ったメンバーが捕って、食べるか、何かすればよかった。今は非常に後悔していますね。これ人が持っているので、これを調査班がむやみに殺生するわけにはいけないのでと。その時すでに子供が2匹いました。しかも私たちが調査した時には、まだ古賀さんの近くだけ食べていました。

No.44



それから日を増すごとに、殖えていって、全部北側に、東の方にも移動しながら、自分の背丈が届く所まで食い尽くして、だから、今はもう南斜面は殆んどハゲ山という状態になっているわけですよ。で、今考えたら、非常に後悔していますね。なぜあの時皆で相談してヤギを処分しなかったのかと、大学の先生ってそういった常識なかったんですね。1つもこの話は出なかったですね。

スライドNo.45 今はもう魚釣島はこうでしょう。これ全部剥げているでしょう。これ全部ヤギの被害ですよ。そして今この中（北斜面の森林帯）もあれですよ。食べられる所を全部食べ尽くして、南斜面に行っているわけですよ。最初の頃はここは全部木で覆われていましたよ。

No.45



それが全部剥げています。これを食べ、今度は中に、奥に入って行って、これ全部ビロウですよ。

スライドNo.46 これは魚釣島の同じ所です。南斜面の西側ですね。南斜面はずっとこう続くわけです。こっちは北に行くわけです。上はヤギ被害前、下はヤギ被害あとです。見て下さい、もうハゲ山ですよ。もうヤギの被害については、ぜひ考える必要がある。これは県としてじゃなくて、国として絶対に考える必要があると思いますね。その時に、私も魚釣島に連れて行って下さい（笑）。もう一度、ぜひ現地を見に行きたいと思ってます。今もうハゲ山でしょう。

テレビで魚釣島が放映される度に、あれ見ると悲しくなりますね。泣きたくありません。ですから、私はすぐスイッチを切って、もう見ないことにしてますよ。それに何か自分たちが責められているような気がしますね。なぜあの時に、全部大学の調査団でしょう。なぜそれに気が付いて、提案して、ヤギを処分しなかったのか、今頃言っても始まりませんが・・・。

（時間満了との合図あり） 何もう時間！？ そうですか。もう時間が来ているようですからと、スライドNo.45（南小島の遠景）だけを概略説明し、講演を終える。



急いで、大雑把な説明になりましたが、どうも申し訳ありません。
ご清聴ありがとうございました。（拍手）

No.46



(講演続編)

第2部 尖閣諸島の自然

これから南小島、北小島、久場島の自然について、簡単に説明いたします。
講演続編ということで、久場島の古賀村跡のスライド写真を3枚追加しました。

2-2 南小島

スライドNo.47 これが南小島です。右に北小島の西端、その後方に少し見えるのが魚釣島です。この南小島と北小島の海峡、幅は約200メートル位あって、潮の流れはとても速いと言われてます。南小島は楕円形の島で、東西に2つの岩山があります。西側には、高さ138メートルの大きな岩山があって、東側には小さな岩塔があります。その間は平坦な隆起サンゴ礁からできた広い礁原となっています。



スライドNo.48 これが東側にある岩塔です。高さは89メートルあり、南小島は礫質砂岩と安山岩が基盤となっています。この岩塔の頂部付近は礫質砂岩の岩膚が裸出し、僅かにコウライシバなどの草本群落が見られます。南小島でカツオドリやアホウドリが生巢しているのは西側の岩山ですが、この岩塔の頂上付近にもカツオドリが営巣しています。



スライドNo.49 東西2つの岩山の間に平坦地の礁原が広がっていますが、満潮時に潮を被るため、低い所は無植生です。少し盛り上がった所に草本類の生育が見られます。赤褐色の突き出たのがギシギシで、一面に咲き誇っているのがハマダイコンです。ハマアカゼ、ハマボスも見られます。このハマダイコンは北小島、魚釣島などにも生えています。漁師さんたちは時折島に上陸しては、野菜代わりに、このハマダイコンを採って食べていたようです(笑)。この礁原は平坦地で広く、沖縄開発庁の調査で行った時、ここにヘリコプターは離発着しました。ヘリポートとして使える十分に広さがあります。



スライドNo.50 南小島にはカツオドリ、クロアジサシ、セグロアジサシ、アホウドリの4種が生息しています。一番多いのはカツオドリで、岩山の全斜面を営巣地にして利用しています。写真は、西側岩山の北斜面で撮影されたカツオドリです。上は幼鳥、下は親鳥とヒナです。ヒナは真っ白の羽毛に包まれて可愛いく、成長するにつれ、黒に生え変わります。上の幼鳥は巣立ちの日も近く、人間が近づくと、つばさを広げ、バタつかせて、飛べずに逃げ回っています（笑）。下はカツオドリの親子です。

鋭い嘴で威嚇して、我が子をしっかり守っています。まさに人智を超えた親子の情ですね（笑）。

スライドNo.51 これは南小島の断崖の岩棚で繁殖が確認されたアホウドリの写真です。沖縄テレビの水島さんが、2002年に東邦大学の長谷川博先生と尖閣諸島にアホウドリ調査に行った時撮った写真です。1971年琉球大学調査団が行った時、池原先生がこの岩棚にアホウドリが14羽いることを最初確認して、31年後には、見事にこんなに殖えています。この岩棚は高さ138メートルの断崖の中腹にありますから、人間が登って行けないからアホウドリが安心して繁殖できる場所なんです。

スライドNo.52 これは、この岩山海崖の緩い斜面にたむろしたアホウドリ。手前にうづくまっているのはヒナ、その隣は幼鳥です。皆仲良く戯れているのどかな光景ですね。長谷川さんが、この時に上陸して調査したら、24羽のヒナと若鳥と成鳥を含む77羽が確認されたようです。確認されたのは77羽ですが、200羽位はいるんじゃないかと推測されています。

スライドNo.53 これは尖閣諸島で操業している漁船が撮影したものです。操業中の漁船を見つけると、魚を食べに飛んで来るわけです。2000年頃から尖閣諸島のどこでも見られたといえますから、アホウドリは相当殖えていることが分ります。



2-3 北小島

スライドNo.54 これが北小島です。左端は南小島。中央後方に見えるのが魚釣島です。北小島は第三紀砂岩からできており、高さ125メートルの岩塔、118メートルの岩山を成して、これら岩棚、海崖、肩状部は、アジサシ類、アホウドリ、クロアシアホウドリの営巣地に利用されています。北小島には巨大な洞窟があります。このスライドのここ（中央岩山に開口している洞窟を指す）に写っています。



スライドNo.55 これがその海蝕洞です。口開いている大きな洞窟、その右隣に小さな洞窟入口もあるつがいの洞窟です。これは1995年に沖縄写真連盟の人たちが、北小島に撮影会に行き行って撮った写真です。洞窟の前に点々と見えるのは人間です。これ見ると大変大きな洞窟であることが分ります。高さが優に40,50メートル超えると思います。尖閣諸島には、海蝕洞が多いですが、北小島のこれが一番大きなものかも知れません。



スライドNo.56 南小島はカツオドリが多く、北小島はアジサシ類が多いと南北2つの島で海鳥は棲み分けした状態です。

また、アジサシ類はセグロアジサシ、クロアジサシ、オオアジサシとかあって、北小島でも種類ごとに棲み分けしています。これはクロアジサシで、個体数が少ない種類で、島の海岸の肩状部や絶壁の岩場、段丘上の縁を営巣地として利用し、繁殖しています。



スライドNo.57 これはオオアジサシです。斜面中央部のキヌゲメヒシバの優占する草地で、放卵中の大アジサシのコロニーです。

北小島の斜面台地は全域草地によって占められ、オオアジサシの外、セグロアジサシの繁殖地にもなっています。



スライドNo.58 これがセグロアジサシです。これが量的には一番多いです。点々と見えるのがオオアジサシのコロニーで、これを囲むようにセグロアジサシが営巣しています。下側が抱卵中のセグロアジサシです。排泄物で草は枯れ、赤茶けた裸地状に変化していることがわかります。またセグロアジサシは、斜面草地ばかりでなく、海岸に続く斜面肩状部、岩塊の突出した岩場の地形にも、草地があれば、そこを営巣地にしています。



スライドNo.59 これは人間が近寄ってきたのに驚き、飛び立ったセグロアジサシの群です。

周囲を飛び回り、侵入者に対する警戒怠りなく、上空から突入し、鋭い羽根音を発して、近寄るなど威嚇します。子育ての最中だと、攻撃はすさまじいです(笑)。上空から一気に耳元を攻撃して飛び去ったり、真正面から、鋭い嘴で攻撃をしかけたり、また糞弾の雨を降らせたりしますよ(笑)。



スライドNo.60 アホウドリのヒナです。長谷川先生は南小島を調査し、77羽のアホウドリを確認しました。それが北小島にも移動して繁殖しているか調査してみたわけです。そしたら見事ヒナが見つかりました。その時に撮ったのがこの写真です。これによって、尖閣諸島では、アホウドリは南小島と北小島で、しっかりと繁殖していることが分りました。



スライドNo.61 これも先に南小島でも紹介した漁師さんが撮った写真で、このように漁船が漁しているのを見つくと、またたく間に10羽近くも集まるそうですから、今ではもう相当殖えているわけです(笑)。

アホウドリは地球上では、尖閣諸島と東京都の小笠原諸島、この2つの地域にしか繁殖していません。このことから尖閣諸島は、日本の宝であり、世界の宝の島です。また学術的にも大変貴重な島であることが分るかと思います。



2-4 久場島

スライドNo.62 上空から見た久場島です。3個ほど噴火口を持つ火山の島で、ほぼ円形をなし、魚釣島、南小島、北小島のような突き出た岩山、断崖などはありません、全体が緩やかな丘状の地形になっています。火山島ですから、地質は輝石安山岩、溶岩、火山弾、軽石からできていて、島には河川など流水、湧水は見られません。また、島の周囲は全域海崖をなしています。



スライドNo.63 これがその海崖です。これ高さは 7.8 メーター以上あったか？よく憶えていません。島の周囲全部こんな海崖ですから、ボートが着ける砂浜、海岸とかはありません。上陸するにも一苦勞です。海崖が崩れ落ちた所には岩塊がゴロゴロしてますから、そこに船着けて、そこからよじ登って島には上陸します（笑）。岩塊に張り付くように生えているのがコマルバガジュマルです。この山が火山で、頂上付近に行くと火口跡が見られます。



スライドNo.64 火口跡は赤茶けた火山弾が堆積し、すり鉢状になってます。それに火口壁の向きによって植物の生育、種類、草丈、樹高が変わります。北向きだとシママンネングサやホソバワダンなど草本が多く、次第に南向きになるとピロウなどの木本群落が生育し、しかも樹高も高くなっています。これは火口壁の南側斜面の写真ですから、火口跡近くはホソバワダンが密生し、下側にはピロウも生育しています。



スライドNo.65 久場島の植生を特長付けるものはコマルバガジュマルとピロウです。この写真



に刈り込んだように樹冠を揃えて見えるのはコマルバガジュマルです。その遠方上方にあるのがピロウです。コマルバガジュマルは風が強いため根元や風下側に僅かに葉を残したまま、島の厳しい環境に耐えて生きています。

これが風衝矮生林の特長です。このコマルバガジュマルは、枯木状態に見えますが、樹高を伸ばしピロウ林へ生活圏を広げているわけです。

スライドNo.66 これは北西海浜平地の耕作跡地です。真ん中に人が立っていますね。その手前はコマルバガジュマルの風衝荒原、耕作跡地の向こうにピロウが見えます。

近くには、古賀さんが事業をはじめた頃の石垣、住居跡が残ってます。この島では少し凹地になっている所など耕作地として利用し、サトウキビ、イモなどを作っていたようです。

スライド 67 これがそのサトウキビ畑です。サトウキビもノカラムシと混生していて、周囲はオオバキが多いですが、立派なサトウキビ畑でした。これが古賀さんの頃に栽培したものなら、長い歳月経て、今でも堂々として生育し、多年生草本としての根性を見せているのには驚きました。

試しにと、一本折って、齧ってみました。季節外れのためか、あんまり甘くなかった（笑）。周辺にはサツマイモの耕作跡もありました。

スライド 68 ここで見つけたのがこのイモです。つる性の植物が生い茂り、サツマイモの蔓を探すのに苦労しましたが、蔓をたどって、やっとこさ掘り出しました。食べないで埋め戻しましたが、見事なイモでした（笑）。

漁師さんはこの畑のことをよく知っていて、時たま、サトウキビ、サツマイモを採りに島に上陸すると聞きましたが、これ食べるためだったんでしょうね（笑）。

スライド 69 古賀さんが尖閣諸島で最初に開拓したのがこの久場島と言われてます。

島には当時の事業場の石積み跡、生活跡などが残っていて、これは石積みの道路跡です。

実に見事な石積みですね。前方の海に通じてますから船着き場から事業所、集落へ生活物資など



を運搬した道路でしょう。海の方には、きっと船着き場があるだろうと行って見たら、そこもストーンと落ちた海崖でそれらしいものはなかったです。

海崖下に船を横付けして、上から荷物の揚げ下ろしをしたんでしょう（笑）。

スライド70 これが住居跡の石積みです。

もう放棄されて何十年も経っていますから、植物に覆われて外部から気付くことは難しいです。この附近に住居跡は点々とあります。実に頑強にできてます。尖閣諸島は絶海の孤島ですから、夏に襲う台風、冬の季節風などの厳しい環境を考えて頑丈にしたわけです。それにして、先人たちの凄まじい生活力には驚きました。



スライド71 久場島は湧泉や河川がなく、飲料水に事欠いたため、レンガ囲いの水溜が最優先に造られたのでしよう。左がその水溜のタンク跡です。

また右の写真は、住居の屋敷跡に残された甕です。飲料水や味噌、穀物貯蔵などに使ったのでしようか。往時の生活が偲べれますね。

No.71



スライドNo.72 最後に久場島の海鳥を簡単に紹介して終わります。

これがオオミズナギドリです。久場島ではオオミズナギドリとカツオドリが明瞭な棲み分けをしています。オオミズナギドリは溶岩や火山弾の堆積した林地内に、カツオドリは草地や海崖の岩場付近に営巣しています。

この写真はオオミズナギドリが火山岩や溶岩流の隙間に巣ごもりしている様子です。

また海崖から中央部斜面にかけて広がるコマルバガジュマルの風衝林内、ピロウ林床の岩場などに巣穴を作って営巣しています。



オオミズナギドリは朝早く巣近くの木に登り、そこから滑空するように、海に向かって、採餌するため飛び立ち、夕方には巣に帰って来ます。これを捕獲するには巣穴に手を入れると、鋭い嘴で噛み付きますから、分厚い皮の手袋して、巣穴に手を入れ、手袋を噛み付かせたまま穴から引っ張り出して、生け捕りにします（笑）。

スライドNo.73 カツオドリは中央部斜面の草地や島の周りの海崖、溶岩の岩場付近を営巣地として利用しています。この写真は岩礁で一休み、採餌中のカツオドリの群れです。

南小島と並んで久場島にも夥しい数のカツオドリがいます。人間が近づくと一斉に飛び立って、島の周囲を群をなして飛び続けます。



スライドNo.74 これは島の北西側で撮ったものです。次から次へと天空を飛翔するカツオドリの群れです。これ実に壮観です。

このカツオドリの群舞を見ていると、尖閣諸島の海は、実に豊饒の海であることが分かります。南小島、北小島、久場島に、あれだけ沢山の海鳥、アホウドリ、カツオドリとか、オオミズナギドリ、アジサシなどがおり、彼らを養い育てている食物、餌となる魚は莫大な数になり、これを島の周りの海から毎日採餌しているわけですから。そう考えると、尖閣の海は実に豊かな海であることに驚かされます。海鳥の楽園であることがその証拠になるわけです。この海が荒らされて、魚がいなくなると、海鳥の楽園は減んでしまいます。

このためにも、私たちは尖閣諸島の海を荒らさないようにしっかりと守って行かねばなりませんね。いつまでも。

このためにも、私たちは尖閣諸島の海を荒らさないようにしっかりと守って行かねばなりませんね。いつまでも。

以上で、私の説明を終わります。ありがとうございました。（拍手）



スライド写真・図版の所有者一覧

第1部 尖閣諸島の学術調査

1-1、昭和14年5月農林省資源調査団に同行した正木任の調査 No.1、No.2、No.3、No.4：正木讓
1-2、昭和25年4月戦後初の高良鉄夫先生の調査 No.5：高良鉄夫 No.6右：多和田真淳（1952）同左：発田俊彦 No.7：尖閣諸島文献資料編纂会（2006）
1-3、昭和27年4月琉球大学・琉球政府資源局合同調査 No.8：沖縄タイムス〈1952.3.20〉 No.9、No.10、No.11：新垣秀雄（1952）
1-4、昭和28年8月琉球大学学生の尖閣諸島野外実習 No.12、No.14、No.15：田中一郎（1953） No.13：岡田潤治（1953）
1-5、昭和46年4月琉球大学尖閣列島合同学術調査 No.16、No.17、No.18、No.19、No.21、No.22、No.23、No.24、No.25：新納義馬（1971） No.20上：琉球新報（1971.4.2）同上：池原貞雄（1971）
1-6、昭和54年5月沖縄開発庁による総合調査 No.26、No.28、No.29、No.31：新納義馬（1979） No.27、No.30：荒井秋晴（1979）

()：撮影年

第2部 尖閣諸島の自然

2-1 魚釣島 No.32：尖閣諸島文献資料編纂会 No.33、No.34、No.35、No.36、No.37、No.38、No.39、No.41：新納義馬（1979） No.40：右上 - 新城和治（1979）他 - 新納義馬（1979） No.42：荒井秋晴（1979） No.43：左 - 琉大風樹館 右 - 下謝名松栄（1971） No.44：東京都（2012） No.45：石垣市（2012） No.46：上 - 新納義馬（1979）下 - 石垣市（2012）
2-2 南小島 No.47、No.51、No.52：水島邦夫（2002） No.48、No.49、No.50：新納義馬（1979） No.53：宮崎卓己（2014）
2-3 北小島 No.54、No.60：水島邦夫（2002） No.55：金城棟永（1995） No.56、No.57、No.58、No.59：新納義馬（1979） No.61：宮崎卓己（2014）
2-4 久場島 No.62：尖閣諸島文献資料編纂会 No.63：新島義龍（1991） No.64、No.65、No.66、No.67、No.68、No.69、No.72、No.74：新納義馬（1980） No.70、No.71左：仲間均（2001） No.71右：新納義馬（1971） No.73：下謝名松栄（1971）

()：撮影年

尖閣列島調査同行記 雑役(主として食事)



第二次調査団助手兼雑役 ^{かみうんてん} 上運天 ^{けんせい} 賢盛

1931年(昭和6年) 旧南洋群島サイパン島に生まれる。87歳(2018年時)。
 1958年(昭和33年) 琉球大学文理学部生物学科卒業
 1952年(昭和27年)~65年(同40年) 前原高校教官補、沖縄高等学校教諭
 1966年(昭和41年) 沖縄女子短期大学付属高校教頭を経、校長
 1979年(昭和54年)~93年(平成3年) 沖縄県警察学校教育指導官
 退職後、沖縄野山を愛する会会長、沖縄サイパン会&南洋群島帰還者会会長
 那覇市跡案内摂政、日本風の会会員、日々おもちゃ作りを楽しむ。

尖閣列島調査 雑役で応募

1952年2月琉球大学2年の後期末試験も終え、ホッとしているとき、新納義馬さんから耳寄りの話しがもたらされた。尖閣列島調査員の助手兼雑役係(炊事)、内々の募集。

高良先生は、2年前に1人で尖閣列島を調査されていた。今回は共同調査を呼びかけ、調査の目的は経済的資源となるもの(鉱物、林業、漁業その他)の有るや無しやと云う。

それで、林業試験場の多和田真淳先生、資源局の棚原清一技官、水産研究所の知念正男技官の偉い先生方も参加される。多和田先生は植物学の大家でもあり琉大でも講義されていて僕ら学生的身では滅多に口のきけない偉い先生だった。このような大先生方の雑役係で行くのは緊張もするが、沢山のお話が身近に聞けるし、嬉しくもあった。それに無邪気な少年のように、無人島での生活に興味を引かれた。同学年であるが尊敬する先輩、松元昭男氏に誘われたから直ぐ飛びついた。新垣秀雄さんも応募した。

尖閣列島は八重山の遥か南の絶海の孤島、フィリピンに近い島かなと思ひ、サイパン生まれ、サイパン育ちの僕は、ピクニックに行くようなルンルン気分になった。経費は15ドル、(軍票B円1800円ぐらい)だったかな? 早速兄妹縁者から借り集めて、高良先生に収めた。

第2次調査団として、いよいよ行くことになったが、尖閣列島の位置がよく分からない。当時、発行されていた沖縄の地図にはなかった。新納さんに聞いたが彼もよく知らない、只漠然と八重山の南らしいかな、と云うくらい。尖閣列島が石垣島の北北西方向に位置することを知ったのは、八重山に着いてからのことだった。



「鳥の群せいする無人島に、科学のメス揮う」と出発報じる新聞。(沖縄タイムズ1952.3.30)

「3月下旬だから寒いよ、ジャンパー持てよ、懐中電灯持てよ、カメラ持てよ、炊事係だからナイフ持てよ、アメリカライター持てよ」と色々と指示されたが、カメラは借りることは出来なかった。フィルムも10本以上準備しないといけないから無理だった。しかし、新垣秀雄氏はちゃんと準備していた、偉いと思った。帽子はどうするかで迷ったが、松元氏の提案で角帽に決めた。

先生方4人、学生3人、計7人は、那覇漁港から午後船出した。

サイバン引き揚げ船以来の、初めての船旅だったが船に弱いと云うことも初めて知った。



多和田真淳(45)
琉球林業試験場技官



高良鉄夫(39)
琉球大学助教授



知念正男(31)
琉球水産研究所技官



棚原清一(29)
琉球政府資源局技官

ハブ 宮古に棲めるか 否か

一晩かけて宮古の沖に停泊。横付け出来る棧橋はないから舢舨で上陸した。何と平坦な島だろうと思った。山手の遠くの民家を見ると、何となくサイバンの移民農家の家に似ていたの
で懐かしさを覚えた。

高良先生は、いつ、どのようにして、準備していたかは知らないが、1メートル50センチほどの大きなハブを、小さなカゴに、風呂敷で覆うて持っていた。宮古には毒蛇は居ない、持ってきて宮古の土地に触れると間もなく死ぬと言い伝えがあった。高良先生はそれを確認したくて、宮古農林高校の農地に放してみた。学生3人は万一に備えて、近くから長い棒を拾い、監視した。20分程経っても異常はみられなかったので農林高校の校長、教頭に1ヵ月間のハブの飼育を頼んでいたが、ハブと聞いただけで顔面硬直、万一カゴから逃がしたら、宮古全体の大事だ、責任問題どころじゃない。我々の首が飛ぶと、必死になり最後まで首を縦に振らなかった。高良先生、大変がっかりしながらも、宮古にはホントにハブが棲めないのかと学生たちに漏らしていた。

今度は、ハブをカゴに収めながら海に向かって歩き出した。学生は棒を持って後ろから



ハブは上手に泳ぐ、浜に上ってきたら、また海中に投げた。ヘトヘトのハブ公。(新垣秀雄 1952)

付いて行くだけ。誰も見て居ない広い畑で、先生は再びカゴからハブを捕りだし、畑に放した。

ハブは蔭を求めて草の蔭に隠れた。先生は直ぐ草蔭から日向に出し、長いこと、小1時間は様子を観察していた。納得したのか、してないのか、ハブをカゴに収め、また、海に向かって歩きだした。間もなく砂浜に着くと、先生はカゴからハブを捕り出し、海中に放り投げた。ハブはびっくりする程上手に泳ぐんだ。本能的に陸地を知るのか、身体をクネクネさせながら岸に向かって泳ぐ。砂浜に上がったところで先生は、上手に棒でひっかけ、岸から5メートルぐらいのところに、ポーンと掘り投げる。これを5、6回ぐらい繰り返してハブをカゴに収めた。こうなるとハブ公は気毒だと思った。

暫くすると先生は近くの岩の上に居たキシノウエトカゲを捕まえ、学生にもよく見せて説明し、よく観察してから元の岩に放した。



松元昭男(25)
琉球大学生物科 4年



新垣秀雄(22)
琉球大学生物科 4年



上運天賢盛(21)
琉球大学生物科 2年

八重山 山探検に キニーネ飲まされる

宮古には1泊もせず、その日の夕刻には八重山行きの船に乗り宮古を後にした。

翌朝石垣の沖に着いた。ここも横付け出来る栈橋はなく、艇で上陸した。

宿泊は高良先生の実家だ。ここで一休みし、先生方は船の交渉。尖閣行きの船の交渉は可成り難渋した様子。そんなことは、露知らず、学生3人は近くの山を探検することにした。ハチに刺されて死亡した例があるから、ハチには気をつけよ、と高良先生の忠告。どうやらスズメバチのことらしい。

里を離れて山に入ったら、監視人が居て、マラリアの薬、キニーネを飲めと言う。3人も素直に飲んだ、別の山に入ったら、またも監視人が居てキニーネを飲めと言う。先程飲んだよと答えても聞き入れない。強制的だ。米軍による行政指導らしく、八重山地方はマラリアが残っており、マラリアで絶滅した集落もあることから、徹底した指導で撲滅を図っているんだそうだ。とんだとばっちりを食ったので山林の探検は諦め、農林高校のある集落を散策することにした。サイパンと異なり、牛は見かけず、馬を飼っている農家が多かった。馬は軍馬と異なり、わりと小形で温和しかった。

角帽をかぶった本物の大学生だと云うことで数人の高校生に囲まれた。大学のこと、首里

のこと、米軍のこと、色んなことを質問されたが覚えていない。

その日の夕食、小魚の天ぷらが出されたが、高良先生の悪戯で、ヤモリの天ぷらが僕の皿に盛られた。そんな事露知らず、ヤモリの天ぷらを口にした。変な味だなあと思ったがそのまま食べた。先生は「どうだ、旨かったか、軍隊ではなんでも食ったんだ」と笑いながら話してくれた。食ってしまったものを吐き出すわけにもいかず、今更どうにもならない。ヤモリも食えるだと初めて知った。

突き船で尖閣向かう フグの刺身振舞われる

尖閣行きの船の交渉は可成り難渋しているみたい。丸 2 日を費やした。高良先生も随分と苦労されたことだろうと思う。石垣漁港には宮古や、糸満の漁船が多く停泊していた。季節が 4 月であり、海は三角波の立つ時化が多く、よほどの好天に恵まれない限り、漁船は出港しないんだそうだ。高良先生は粘り強く交渉され、カジキの突き船に交渉が成立したみたい。船名は“基本丸”、出港の朝、水上警察 2 人が来て、人員を確認。船員(漁師)は 11 人、探検隊は 7 人、高良先生が警察から借りた日本軍九九式鉄砲、弾も確認。寝室は船底、



尖閣沖に航行する突き船・基本丸。(新垣秀雄 1952)

4 月 10 日いよいよ出港。海は穏やか、滑らかに水面を走る。気持ちよかった。

遅い昼食に漁師さんが作った食事が出た、新鮮な刺身が大皿 2 枚に、山盛りに盛られ、見るからに食欲をそそられ、全員遠慮なく頂いた。旨かった。とても旨かったので高良先生がサシミの魚名を聞いたがにっこり笑って「あとのお楽しみ」と言った。しばらくして、料理長が「皆さんにさっき食べてもらった刺身はフグです。内臓に毒を持つけど」と説明していた。何の種類のフグかは聞き漏らしたが、漁師さんはフグの料理は慣れているらしい。



基本丸乗組員の面々と、調査団前列向かって左より多和田、高良先生、2 列目、知念技官、上運天、棚原技官。

(新垣秀雄 1952)

魚が 鳥を食うを見る

夕刻になると海は次第に荒れてきて、船は前後左右に激しく揺れてきた。身体もおかしくなって来た。甲板に上がり、何度もゲロ。船の針路右方向に、海鳥が舞っている。2度目のゲロのとき、多分イワシの群れがいるのだろう。

そこに目をやると、幾つものカツオドリが急降下して海中に飛び込んでいく。いきなり、カジキが海面から跳ね上がったかと思うと、カツオドリに食らいつき、海中に消えた。びっくりした。聞いた事もない。見た事もない光景を目にしたものだから、船酔いはさめ、呆気にとらわれていると、船員さんが寄ってきた。「珍しいかね、よく見かける光景だよ、集団の魚が鳥を食うこともあるんだよ」と、こともなげに話してくれた。

このカジキ船には船長、機関長、突き手などが居て、普段は5、6月頃から漁に出る。黒潮の流れの境目辺りが漁場らしい。マストの高いところから交代で見張り、カジキの姿を発見すると緊張する戦いが始まる。船の舳先から、更に海へ突き出た突き棚に、鉈を持った 突き手が陣取り、全速力でカジキを追う。カジキに追い付くと、突き棚の突き手が一気に鉈を投げ、カジキを仕留めるらしい。でも今日のこの船は、尖閣行きなので劇的勇壮な姿を見ることはできない。



カジキが海鳥を食う。
(魚が鳥を食った話)より

南小島に上陸 野面積みの石垣

天気はよくない。少々しけている。上陸予定地に近づけない、島の南側に回る。波が荒いので漁師さんが少し開けた荒磯まで泳いでいった。岸からロープと船を繋ぎ、それをたぐり寄せてやっとこさ、彼らの手を借りて上陸した。命がけの上陸。

荷物を宿泊予定に運ぶ。古賀氏の工場の跡地だ、屋根は殆ど無いが、石垣が頑丈に残っている。高さ1.5~2.0メートル、奥行(幅)60~70センチぐらい。珊瑚まじりの山肌の岩石、厚さ15~25センチ、面積A3版~その2倍程の偏平石を積み上げた、見事な野面積みである。伊是名村の民家の石垣や、南城市の垣花城の野面積みに似て



南小島の工場跡の石積みにて。前列中央多和田先生。
後列左右は高良先生、知念技官。(新垣秀雄 1952)

いると思った。この石垣に囲まれた住居跡らしき部屋が15 磯城（いそぐしく）ぐらいあった。鍋、釜、カゴらしき物はなかったが、ここで古賀氏は鯉節工場を営んでいたのだろうかと思った。初日の炊事当番（夕食）は新垣秀雄氏で、僕と松元氏は薪集めと食材探し、ルンルン気分で楽しかった。先生方は早々と調査開始、何を調べているのか分からないが、外は未だ明るい、6 畳敷きの大きな蚊帳を吊って、蚊帳の中でメモを記している。

その夜はそこで寝た。夜中に知念技官が急に素っ頓狂な声を上げ、一同、目を覚ました。大きなシュウダ(臭蛇)が技官のふくらはぎ辺りを横切ったのだ。臭いから捕まえることはせず蚊帳の外に追い出した。

カツオドリ卵と肉 魚臭くて飽きる シュウダ食べる

南小島の岩山の急斜面を登って驚いた。無数のカツオドリが後生大事に卵を抱いている。

ちっとやそっとでは巣を離れない。産卵期なのだ。高良先生が石垣で借りた旧日本陸軍の鉄砲を空に向けて撃つ。カツオドリは驚いて、一斉に飛び立つ光景、さぞや壮観であろう。

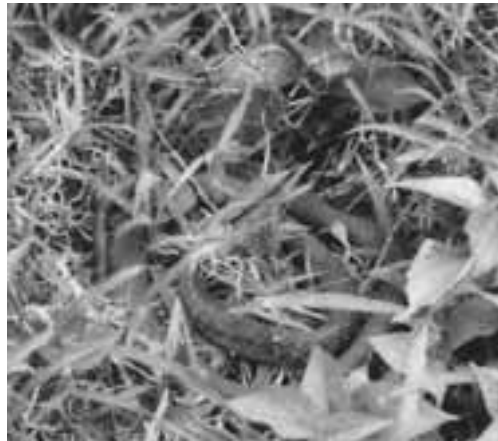
だが、予想に反して拍子抜け。数回発砲したが一向に空を埋め尽くすような気配なし。

カメラを胸に揚げた高良先生はがっかり、僕らもがっかり。

食料は3食分しか準備されてない。2日目になると米は無し、味噌と醤油はあるけど、他は何も無し、食事係の活躍の場だ、必死になって食材探し、松元氏は野草、新垣氏は薪。野草は沢山あった。松元氏は、多和田先生にべったりで、片っ端から植物の名を教わっていた。ハマダイコン、ニガナバー（ホソバワダン）など苦いのが多かった。その中で、美味しかったのがアザミ、モンパノキの若葉だった。特にモンパノキの花は湯がいて、サラダにしても美味しかった。

僕はカツオドリの卵などの肉類探した。

カツオドリの卵は、鶏卵の1.5倍ぐらいの大きさで白身が多く、黄色身は小さい。茹で卵にして食べた。初めの頃は美味しく感じられたが、3食目辺りから誰も手を付けない。それではと云うことで夜更けに岩を上り、カツオドリを生け捕り、朝食の食材にした。美味しいだろうと思ったが、刺身と違う生臭い魚の匂いと、変な味がして美味しくない。これも諦めた。



尖閣列島はシュウダが多い。名の通り臭い とぐる巻く草むらのシュウダ（多和田真淳 1952）無毒蛇だ。素手で捕らえると臭いがいつまでも残る。2メートルぐらいのを捕らえたので、高良先生の指導の下、頭を潰し、首回りの皮を輪切り、頭を抑えて皮を尾の方向に引っ張ると簡単に皮が剥けた。内臓を取り出し、アメリカサバイバルナイフで適當の大きさにぶった切っ

て料理した。これは何の臭いもなく、美味しかった。少々骨が多いのには参った。

山に登りて イワシを捕る

無人島だから美味しい食材は滅多にない。炊事班の学生3人はそれぞれの分担で大奮闘。僕は山には登ったが卵は飽きた。鳥の肉は臭い、また、シュウダでも捕らえて食べようかと考えながら、カツオドリが海（漁）から巣に帰ってきたのをぼんやりと眺めていた。

“鳥はいいな、どこにでも飛んで行って好きなものを食べている”と言いながら、傍らにあった棒切れを近くのカツオドリ目掛けて投げつけた。当たりもしないのにカツオドリは驚いて、呑み込んでいたイワシを2,3匹吐き出して逃げていった。

これには僕もびっくり。「お一神様、天の助け」と、魚を拾いながら鳥に感謝した。これを2,3回繰り返して、10匹ぐらい手に入れた。魚をバケツに入れて意気揚々と山を下りた。早速昼飯はご飯無しでイワシ焼きで腹を満たした。

これがまた格別美味かった。

多和田先生に「この魚どこで捕まえてきたのか？」と訊かれた、僕

は山でと言わないで、磯の窪みでと言った。そしたら「まだ、いたか？」と訊くから、でまかせに「はい」と答えた。「道具はないかな」と言いながら先生たちは出ていった。あとでそこにいってびっくり、畳1枚位のタイドプールに、30センチほどのアジが何匹もいた。多和田先生と知念技官が裸になって一生懸命に潮をくみ出し、魚を捕まえていた。



海から戻ってきたカツオドリに棒切れを投げて驚すと、獲ってきたイワシを吐き出して逃げた。（魚が鳥を食った話）より

夜中、地穴に 手袋突っ込んで オオミズナギドリ捕獲

南小島では、カツオドリとオオミズナギドリが棲み分けしている。オオミズナギドリはアヒルぐらいの大きさで、傾斜した地中に穴を掘って巣くっている。早朝、傾斜を駆け下るように滑走して空中に舞う。まるで飛行機だ。日中は終日空を舞い、日が暮れると巣に戻る。カツオドリは山頂周辺の岩の上に巣くいて、岩の上から飛び降りる格好で海に飛んでいく。

高良先生にオオミズナギドリを生け捕りにせよと命じられた。その方法を教わり、昼のうちに目星の巣に目印の棒を立て、夜の10時頃懐中電灯を持って、巣に向かう。電灯で中を照らす。居



オオミズナギドリ

る居る、2羽も居る、番（つがい）だ。

革の手袋をはめて手を突っ込む。鋭い嘴で指を噛まれた。手袋がなければ指が食い千切られたはず。やっとのことで2羽を捕らえた。

嵐に遭い、天の岩屋に避難 即席の剥製づくり

翌日は、ニンガチカジマーイ(二月風回り)の名残か、悪天候の小嵐になった。この日は北小島へ移動の予定だったが、天気が急変して、迎えの船は来ない。雨が強いので高良先生の案内で、急斜面の草原を上り、洞窟のような、大きな岩蔭に避難した。まさに「天の岩屋」だ。優に10畳ぐらいの広さはある。アマツバメか、イワツバメか、分からぬが、雛がよく飛んできた。

嵐はととも止みそうもない。高良先生は、嵐が去るまで時間があるからと剥製づくりを始めた。僕は先生につきっきり、鳥、臭蛇などの剥製作りの手伝いをした。といっても、材料はホルマリンしか無い。

カツオドリとオオミズナギドリは、包丁で腹を割き、内蔵を取り出し、その辺の草を蒸し燃やし炭化したものを詰め、枝を骨格支えにし、ホルマリンをあちこちにかけて、どうにか剥製にした。これらはシュウダの標本と一緒に長い間、農学部の方樹館に保管されていた。オオミズナギドリは“採集者上運天賢盛”の名前になっていた。

先生は、とにかく島に上陸したら、動物はどんなものでも採集しなさいと言っていたが、そんなにできなかった。アジサシ、オオミズナギドリ、カツオドリ、シュウダなどしかできなかった。もう少し勉強しておれば、もっと採集できたと思う。あのときは遊び半分で来た、子供の無人島探険のような積りで来たから。

松元氏は多和田先生に相変わらずつきっきり、植物の名前を懸命にメモしていた。知念技官、棚原技官、新垣氏は何をしていたか覚えてない。あの時に棚原技官からは、木灰使って、海鳥の糞の中を浸透した水を浄化する方法を教わった。我慢すれば飲める程度になった。

この岩屋で暮らしたのは2晩だったのか3晩だったのか、よく覚えていないが、雨が晴れ、風も穏やかになった頃迎えの基本丸が来た。



小嵐で逃げ込んだ天の岩屋での避難生活、
上：(多和田真淳 1952)、下：(新垣秀雄 1952)

魚釣島へ 崖よじ登って 宿营地へ

次に予定していた北小島を諦め、船は魚釣島に向かった。海は荒れている。古賀氏が造った北側の磯の堀割栈橋には近寄れない。比較的穏やかな、と云っても波は荒れているので、南側の磯に上陸。目の前は高さ 10 数メートルもあるうか、立ちはだかる岩崖、これを越さねばならぬ。すると多和田先生がロープを肩に、ましら（猿）の如く、崖を簡単に攀じ登っていた。そのロープを頼りに、まず、学生 3 人が登った。荷物を引き上げるのである。

夕刻が迫り、明るい内に食事の準備も必要なので、大半の荷物を残し、全員で荷を担いで崖を北側に下り、宿营地に運ぶ。可成りの距離だ。新垣氏と僕は早速食事の煮炊き、基本丸から分けてもらったお米で、久し振りのギンめしだ、他の隊員は荷物運びで 3 回ぐらい通ったような気がする。



10 数メートル高さの岩崖をよじ登り、ロープで荷物を宿营地に運ぶ。
(新垣秀雄 1952)

宿営地は鯉工場跡の納屋 水豊富 蚊虻多し

魚釣島も南小島同様、古賀氏の鯉節工場跡があり、立派な石垣の囲い、井戸（流水）には水も豊富にあり、薪も十分にある、またちょっとした野菜畑（だと思ふ）が残されていた。宿営地は、その工場跡にある“あばら家”の納屋だ。びっくりするくらいの蚊か、虻なのか飛び交っている。うっかりすると、露出している手や顔に遠慮なく、鋭い針を刺して血を吸う。それがすごく痛いのだ。そこで、蚊帳を吊り、蚊帳の中で、食事を済ませた。



宿営地になった古賀氏の工場跡、(新垣秀雄 1952)

僕は横になって寝てしまったが先生方は遅くまでこれからの予定を話し合っていたらしい。大きな蚊帳は、調査終了し引き揚げるまでの3日間吊りっぱなし、記録や整理は蚊帳の中でした。

沖合に浮かぶ5～6隻の船は台湾漁船だそうだ。

毎日が強行軍 今日西の山 明日東の山

翌日、蚊虻に刺されながら急いで飯を炊く。今日は西側の斜面から山に登る。大きな樹木や高い樹木はない。小さなシュウダが時折姿を見せる。でもその数は南小島に比べると少ない。空を飛ぶ海鳥は見かけるが、地上に降りてくる気配は無い。

魚釣島はジャングルの島で、多和田先生本領発揮の活躍舞台だ。イリオモテランやリュウキュウセッコク、センカクツツジを発見されたときの先生は大変な喜びようだった。

それにしても多和田先生をはじめ4名の先生方のスタミナはすごい。僅か3日だけの調査だから毎日が強行軍、学生は後からついて行くのが精一杯。今日は西の山、明日は東の山・和平山（この島の最高峰）、険阻な崖も何のその、獣の如くよじ登る。流石軍隊上がりだと思った。



今日西の山 明日東の山 獣の如くよじ登る。
(多和田真淳 1952)

はぐれて、大慌て 一瞬白いもの見て 恐怖感に襲わる

ある時、僕は食事の後片付けをし、夕食の準備をしている間に、皆の姿が見えなくなった。皆東に向かったのに、追いつこうと急いで西へ向かってはぐれてしまった。ジャングルに道はない。行けども行けども一行の姿は見えず。諦めて引き返そうとしたそのとき、視界ぎり

ぎりの左横を、一瞬白い物が走ったように見えた。

目を凝らして見るが何も見えない。幻覚か？ もしや靈魂か？ 戦時中、この島には米軍機に攻撃された疎開船が漂着し、多くの邦人が亡くなったと聞く。日本の飛行機や難破船の残骸だって未だ残っている。急に背筋が冷たくなった。恐怖感に襲われ、一目散に引き返して下山した。宿営地にはやはり誰も居ない。

クバの髓を料理 狼煙を焚き 風呂も沸かす

海岸伝いに東側に急いで行って見た。誰の姿も見えぬ。山を見るとクバの樹が御嶽を思わせるくらいに生い茂っていた。4.5メートルぐらいの高さのクバがある。陽は未だ高い（貧乏学生だから腕時計は持っていない）。夕暮れまでには3時間以上はあるだろう。

サイパンの戦時中を思い出した。砲弾で倒れた椰子の木の髓を、砲弾の止んだ夜、静かに取り出し、20人余の難民全員で食べたことだ。早速鉦でクバを切り倒し、髓を取り出して食した。少し甘味があつて美味しかった。実に美味しかった。まるで戦時中の食事だ。皆の夕食に備え、髓を調理した。然し、陽はなかなか落ちてくれない。設営地の見える範囲で高良先生の真似をして蜘蛛やら昆虫やらを探索した。見つけることは見つけたが、悲しいかな浅学非才なるが故に、見れども見えず、価値がある物かどうか何も発見できなかった。



魚釣島はクバが生い茂るジャングル。1本切り倒して髓を食べたら旨かった。(多和田真淳 1952)

ようやく陽が傾いたと思うや釣瓶落としのように暗くなるのが早い。暗くなったら大変だと思い、枯木を集めて松明代わりに火を起こした。狼煙である。

疲れているだろうからと、ドラム缶で風呂を焚いた。ドラム缶は工場跡にあった。傷んではいないところを見ると最近誰かが打ち捨てた物だろう。適当な石ころを転がし、カマドを作り、少し凹みを掘ってドラム缶を据えた。米軍の布製の簡易バケツで、古賀氏時代の井戸（溜め池）から水を汲み。風呂を沸かした。

白く横切ったもの ヤギか？ 高良先生 鉄砲の威力 発揮できず

日が暮れてI時間も過ぎただろうに誰も来ない。蚊に刺されないようにしながら夜空を見上げた。実に奇麗、美しい。さらに時間が過ぎ、9時頃になっただろうか。もう完全に暗闇だ。山手の方から「おーい」「おーい」と声が聞こえた。松元氏の声だ。15分程してようやく皆の元気な姿に安堵した。

遅い夕食を取りながら一行の話に耳を傾ける。道なき道をかき分け、傾斜70度以上もあ

るかと思われる崖を死ぬ思いで1時間以上もかけてよじ登った話、その他いろいろと。

食事が済んだら風呂に入るかと思いきや、さにあらず、今日の出来事を熱心にノートに書き留めている。流石偉い先生方だと感動した。一行にはぐれたことを聞かれたので僕の行動を説明した。皆大笑い。白い物が横切ったことを話すとヤギだろうとの答え、安心した。

古賀時代に逃げたヤギが相当数居るらしい。高良先生はこの島でヤギ料理を食べるつもりで居たらしいが、ヤギは野生的勘で察知したのかとうとう現れず、鉄砲の威力を見ることはできなかった。

一番風呂はなんとやら 蚊、虻の総攻撃に遭う

準備した夕食を一気に平らげ、用意した風呂に探検隊は大喜び。

早速風呂だ。露天のドラム缶風呂入缶第1号は大先輩の多和田先生からということで先生裸になった途端、名も知らぬ数百匹の尖閣蚊が血を求めて一斉に先生を攻撃、蚊だけでなく虻もまじっている。「痛い！痛い！」の悲鳴の連発。慌てて周囲を枯れ草やら青草を燻して、煙で蚊を追い払うが、全く効き目がない。今度は「煙いよ！煙い！」と多和田先生はわめく、手の打ちようがない。私たち学生はどうしたらよいか分からぬ。

多和田先生の次は高良先生 矢張りわめいた。知念技官の頃から悲鳴は薄らいだ。煙が効を奏したのか、続いて棚原技官。学生が入る頃には虻も蚊も少なくなって、皆いい気持ちで湯に浸かった。時間がたつにつれて少なくなったのか、煙で退散したのか、分からない。

やはり、「I 一番風呂はなんとやら」で、最後に入るのが良さそうだ。

それにしても、この島の蚊や虻はすごい。真昼間の磯の潮飛沫地帯でも攻撃してくる。恐ろしい吸血虫だ。蚊帳は貴重な必需品だったことは推測できよう。

木登り競争 多和田先生に完敗

帰る日になって船との連絡がつかなくて、時間持て余していたら、多和田先生が「木登り競争しよう」と学生に水を向けた。周囲の樹木はだいたい同じ高さだ。木登りだったら僕だって負けはしない、即座に応えた。他の2人は尻込みした。

この時、多和田先生は45才位、僕は21才、壮年と若者の勝負だし、木登りも自信あった。こんな年寄りに負けるはずがないと半ば呑んでかかったのがいけなかった。

先生は、「君から先に登りやすい木を選べ」と言われたから、私は「じゃ、これがいい」と選んだら、「よし、僕はこれだ」と先生も選んだ。

高良先生が身を乗りだし審判を務めた。どこまで登るかゴールを決めて、「ヨーイドン」で登った。もう僕は一生懸命よ。どこも見ないで登った。このタンメー(老大人)に負けるかという気持ちもあったから、どんどん登った。僕が登りきらないうちに、ゴール直前に、「多和田先生のカチー！！」と審判の声。先生は猿の如くスルスルと登り、規定の高さに達したと思うや、天狗のようにもう地上に降りていた。先生は木登りの大家でもあったのだ。恐れ入った。見事、僕の自惚れ鼻はへし折られた。

最後に 先生方に いろいろ教わった

僕たちは、尖閣列島調査の雑役、食事係の学生で行き、先生方からいろんなことを学ばせてもらった。事前情報・知識習得の学習が重要だとか、野外で生活（調査を含めて）に必要な知識と用具、食料、菓等々、いろんなことを教えてもらった。

多和田先生は、星の見える山道では、懐中電灯を使わない。使えば足下を選び方向を誤るからと。また、雨の日の野外での焚き火、竹は油脂を含むから貴重な燃料。雨の日のキャンプでの炊事は大変だが、竹があれば焚き始めは苦勞するが一旦着火すると後は助かる。

多和田先生は、流石植物の専門家。ホソバワダン（にがな）、ハマダイコン、モンパノキ、ウスベニニガナ、アダン、アザミなどの野草が食べられると。

後日、先生が漢方薬の大家だったと知った時、紅顔の美少年は大変恥ずかしい思いをした。そのことを話すと先生は微笑み返していた。

高良先生には、海鳥のこと、オオミズナギドリの捕まえ方、シュウダの食べ方、動物の剥製の作り方、いろんなことを教わった。右も左も判らぬ無知な僕を、尖閣調査団に加えて下さったことに感謝しています。 (了)



「尖閣列島學術調査團帰る 新種や珍種発見 “冬期漁場には最適”と調査成果を報じる新聞。(琉球新報 1952.4.29)

調査異聞

学術調査団出発、数日後、琉球政府創立
尖閣調査は、沖縄の学問、行政の黎明期に行われる

1952年3月29日の紙面（琉球新報）は2つのできごとを小さく報じている。

「尖閣列島学術調査団 きよう出発」「政府創立式典 琉大生も出席を」がそれである。

後者には、「琉球政府創立式典は4月1日あさ9時より琉大校庭で行われるが、特に琉大当局では首里在住学生の参列を要望している」とある。さらに「琉球政府発足の記念切手 臨時局も設ける」と報じ、「琉球政府創立記念切手は…平和のハトと新発足をあらわす双葉をあしらった図案で、原画は琉大生安次富長昭君の作（額面）…創立式典当日はとくに式典会場の琉大構内に臨時郵便局を設け…一般郵便物の引き受けをする」とある。

1951年2月、旧首里城跡に琉球大学が開学した。その1年後の1952年3月、第二次高良調査団が、尖閣へ向け出発した。

沖縄の自然科学研究の振興に寄与するとして志喜屋孝信学長や島袋俊一農学部長らのあと押しをうけ、全学挙げての大きな期待を担った尖閣学術調査であった。

出発数日後の4月1日には念願の琉球政府が発足した。

琉球政府は創立当初は、建築中のため庁舎がなく、53年に政府ビル（註：下段切手に表示）が完成するまで焼け残った戦前の勸業銀行官舎跡（那覇在）を利用していった。

創立式典が大学構内で行われたのは異例であり、終戦直後の沖縄の政治的混沌・模索を象徴していたと云えようが、戦禍の瓦礫の中から沖縄の復興・再建を担う学問の殿堂は構築され、宿願の行政の府は漸く産声をあげ、新生沖縄づくりのスタートだった。

地元沖縄が誇り記念とすべき尖閣合同調査（第二次調査）は、奇しくも新生沖縄の学問、行政の黎明期に行われたことがわかる。



設立式典で就任あいさつを行う比嘉秀平行政主席
「戦後50年の歩み—激動の写真記録—沖縄県」より



琉球大学開校記念切手（軍票B円）
（1951.2.12 発行）安次富長昭氏原画



琉球政府創立記念切手（左同）
（1952.4.1 発行）左同



（同創立十周年記念切手（米ドル）
（1962.4.1 発行）玉那覇正吉氏原画

※本コラムは「尖閣研究 高良学術調査団資料集 2007年刊」より転載しました。

調査余滴

尖閣列島に対する二大啓蒙書 「自然との対話」と「魚が鳥を食った話」

1971年、「尖閣調査のパイオニア」高良博士はこれまで五次にわたる調査を新聞連載した。

この中で、無人の尖閣列島に棲む生き物や島の自然を興味深く書き綴っている。

(西表島や慶良間諸島にある無人の島仲御神島や屋嘉比島に棲む生物にも二、三触れている。)

この尖閣列島探訪と島の生き物の紹介記事は、大変な好評を得た。

執筆中に、多くの質問をうけ、中には高校生の読者からグループで探検旅行をしたいので、尖閣列島へ行く手順を教えて欲しいとの注文もあり、尖閣の旅は海の危険を伴い、経験豊富な指導者がいなければ安全とはいえないと論じたという。

(なお、この連載記事は本書の下巻集大成篇7～68頁に収録している)

この尖閣調査に、他の連載記事—八重山・西表調査を加えて著したのが「自然との対話」である。高良博士の野生生物に対する温かい眼差しと鋭い観察眼、そして独特の感性とユーモア溢れる筆致で、活写したこの本は幅広く愛読された。のち「琉球の秘境」の題名を変えて再刊された。

「魚が鳥を食った話」は低学年向けに書かれた教育用副読本、児童向け絵本である。

共著の上運天賢盛(研成)氏が第二次調査で体験したことを著したものである。

この絵本は、沖縄の自然シリーズ1、「南小島の自然」との副題が付けられ、「魚が鳥を食った、カツオドリとシュウダ、山の上でイワシをとる」など面白いできごとが分かりやすく紹介されており、科学副読本として広く愛読された。

「自然との対話」が中高校生・大人向けとすれば、「魚が鳥を食った話」は児童・小学生に対して「海鳥の楽園」に対する憧れと冒険心をかきたて、無人の島への大きな夢とロマンを育むのに役だった。この2つの本が、尖閣列島に対する興味をそそり、認識を深める啓蒙書として果たした役割は大きい。



自然との対話

(高良鉄夫著 琉球新報社 1977.2)



魚が鳥を食った話

(とくだきよ・上運天研成共著 那覇出版社 1980.10)

※本コラムは「尖閣研究 高良学術調査団資料集 2007年刊」より転載しました。

高良先生との尖閣列島野外実習

アホウドリ調査回想記



尖閣諸島文献資料編纂会長 にいろ よしま
新納 義馬

- ・1925年(大正14年) 鹿児島県奄美大島に生まれる。93歳(2018年時)
- ・1954年琉球大学卒業後、同大講師、助教授、教授を経て、琉大名誉教授
- ・専攻は植物社会学、琉球列島・尖閣諸島植物論文多数著わす
- ・沖縄県文化財保護審議会委員、自然環境保全審議会委員等を歴任
- ・1971「琉球大学尖閣学術調査」、1979「沖縄開発庁総合調査」の植物班長として調査主導。これまで尖閣諸島に6回渡島調査

はじめに

編集部から1950年代と60年代の初期調査について、原稿依頼された。

恩師高良鉄夫先生と私は、尖閣列島に2回に出向いている。1953年の琉球大学学生野外実習調査と1963年の琉球政府委嘱によるアホウドリ調査である。1回目は65年前、2回目は55年前、いずれも半世紀以上も前のことで、往昔の記憶は忘却の彼方にある。

これまで折々の機会に触れていることから、今更と固辞したが、強い要請に負け、筆を執った次第である。記憶が不鮮明で、読みづらき所も多々あり、読者諸賢の容赦を乞う。

夏季休暇利用し、野外実習調査 教官2名 学生11名参加

戦後初となる高良鉄夫先生の尖閣列島への渡島は、1950年3月27日～4月10日の日程で、当時八重山農林高校長の時、魚釣島にある発田重春氏の鯉節工場に通う漁船に便乗し、魚釣島に2週間滞在し、生物相や資源調査をされ、「無人島探訪記」の表題で南琉タイムスに10回連載し、更に「自然との対話 無人島は生きている」(琉球新報社 1977)との表題で単行本を出版され、尖閣諸島の経済面での有効性について世論を喚起されている。

其の後、1952年4月琉球大学と琉球農林省資源局との合同調査を実施し、多和田真淳先生らを引き連れ、南小島と魚釣島に上陸し、海、鳥や有用植物などの生物相や地質、土性、グアノ、水資源など富源調査などを成し、尖閣海域が冬期漁場として最適と報告されている。

この調査に琉球大学から、上運天賢盛君ら学生3人が参加し、後年夫々参加記録を報告している。

私が最初に出向いたのは、高良先生の3回目となる調査で、1953年8月1日～4日、高良先生に加えて宮城元助先生と、琉大生物科、畜産科、農学科、教育科の学生11名で、夏期休暇を利用し、尖閣列島での学生野外実習の名目での渡島である。

それで、今回私共が参加する実習について参考にすべき事柄など、特に心構えなどについて高良先生に問い尋ねてみると、無人島での実習は、これまでの本島内での実習とは本質的に異なり、無人島である事を認識し、各々が各自の責任で自活し、実習が如何なるものかを実態として感じる以外、生きて帰る術はない。生死に懸わる事態が生ずる事もあり得るので、一人一人が物見遊山でなく、学習の本質と自然の諸々の実相を実体験し得る最高の適地であるという認識で参加して欲しい。



高良鉄夫先生

一番年長になる私にとって責任のある事態であるが、大学生活 4 年間で締めくくるにふさわしい最後の野外実習であり、喜んで参加することにした。

参加者は下記の通り ()は当時の年齢

高良鉄夫(40) 琉球大学助教授 宮城元助(41) 琉球大学助教授
 新納義馬(29)生物科 4 年 新島義龍(22)同 4 年 田中一郎(21)同 4 年
 瑞慶覧長方(21)同 4 年
 泉川寛(23)畜産科 4 年 比嘉清幸(22)同 3 年 岡田潤治(20)同 3 年
 有川廣良(22)農学科 3 年 東清二(19)同 2 年 大屋一弘(19)同 2 年
 森田忠義(22)教育科 4 年



宮城元助先生



尖閣諸島へ出発前、八重山で全員揃って記念写真 鳩間島 (田中一郎 1953)

経済界からの お金も、油も、米も、缶詰も

尖閣諸島までの船は、先生の計らいで開洋高校(沖縄水産高校の前身)の練習船に便乗し、渡島するとの事、その代わりに、琉大側が必要な物資の便利を計る事との事、これ等の事については先生の計らいで、燃料は琉石(株)(稲嶺一郎社長)、米は沖縄食糧(株)(竹内和三郎社長)、

缶詰等食糧品はリウボウ(株) (宮里辰彦社長) が提供して頂き、私共学生は取りあえず寄付金をお願いする事に奔走した。当然私共の行く先はこれら映画館が対象で、其処で実習への理解と何がしかの寄附をお願いする為の言上を申し上げるのは一番年上の私の役目であった。

学生アルバイトでお世話になった沖映の宮城嗣吉社長、国際劇場の高良一社長にお願いし、過分の心付けを頂いたと憶えている。このことについては忘れ難い思い出がある。国際劇場へお願いに行ったら、高良一社長の奥様が、無造作に置かれた軍票の札束を取りだして、「いくら欲しい？」と訊いたのに驚いた。如何せん学生の身では、分厚い札束を見るのは初めて、狼狽して大きな額が言えない。寄付を頂いた後で、もっと沢山言えばよかったと後悔した。当時幾らでも金が儲かる時代だったせいか。経済界の人たちは社会的事業に理解があって、率先して協力してくれた。

当時本土で 8 ミリ大学と揶揄されていた琉大に対し地元の経済界の皆様がどれ程期待されておられたかの証拠の実態であろう。夢々琉大に在籍した事のある学生は今に生き、生ある限り肝に銘じ忘れ去るべからざる事として心にすべきであろう。

開洋高校実習船に便乗 石垣・尖閣迄、船酔いで苦しむ

扱て、渡島、多分本部港から乗船し、出航したと思うが、その事は余り記憶が定かではない。泉川氏によると、開洋高校練習船開洋丸 (30 ト)には、船の船員の外、高校側から生徒 40 余名と琉大側から 13 名、計 60 名余も乗り、スシ詰め状態の定員オーバーだった。小さな船に人間と船荷を一杯積み込んだせいか、船縁は海水すれすれ。腰掛けると足が海水につかり、甲板から手を伸ばせば海水がくめるほどだったという。今思えば、無謀だが、終戦直後の物不足、混沌した時代だったからできたのだろう。

其の後は船酔いで苦しみ、夜も日もなく、虚ろな身体を甲板に晒した以外殊更記すべきこともない。その様な態たらく、途中石垣に着くまで船からの島影などの思い出は更々ない。



資金集めで廻った国際劇場映画館と高良一社
(「ゼロからの時代」より)



開洋丸で航海・漁業実習に向かう開洋高校生。渡島のため迎えに来た時は南小島と一緒に上陸した。(岡田潤治 1953)

石垣に着き、高良先生の前任校の八重山農林高校の寄宿舎に宿泊し、石垣市の市場で、尖閣での食料の買い出しと、船からの申し出の薪などの調達の為、新島君と残り、他の学生とは別行動であった以外記憶にない。然し他の学生は琉球大学の学生が始めて八重山を訪れて来たとして大いに歓待されたという話を聞かされたが、この事は実習の一齣として記しておくべきか否か私一人の判べき外の事態であろうか。

石垣に何日滞在し出発したか定かではないが、乗船した私は、船に弱い衰れた身体を再び横たえた儘だったが、海鳥の飛来を知り、遠くに島影が見えると聞くと俄然目が輝き甲板に手摺を求めて身を乗り出した。船酔いも何のその、生気が蘇り島影を目の奥に刻み、一物も見逃すまいと心が弾む、遠くに浮かぶ島影が次第に実態として目に這入る。

近づくにつれて海から飛び出した断崖に囲まれた二つの隣合わせた島が目に入ります。

これまで目にしてきた緑に被われた島とは全く異相をなす岩を剥き出し、あるか無いかの僅かばかりの緑が島のへりにへばり付いた島、近づくにつれ

て海鳥が舞い出し次第に其の数が多くなる。船が二つの島の瀬戸に近づく、北小島と南小島、憧れの尖閣諸島を目前にして感無量である。



開洋丸の船上から南北小島の島影を遠望。
(泉川寛 1953)

北小島 島覆い尽くすアジサシ 親鳥の襲撃、糞の異臭と嵐に 辟易

早速船長の計らいで北小島に向かう。上陸から島を離れるまで、これまで経験した事のない驚きの連続。無人島に対する余りも無知の己に恥じ入るばかり、自然の実相の深さに驚き、この機会に巡り合えた自分に感謝すると共に、高良先生のこの列島での自習の意図を計り、心ゆくまでこの機会を学ぶべき運命と知らされる事になる。

ボートから島の一つ北小島に上陸する。しかし、船付き場の水際からアジサシの雛が足下にまとい付き、上空からは親鳥の襲撃、糞の嵐、耳をつんざく海鳥の雷鳴、どうしてボートを降りたか定かではないが、どうにかボートの縁にしがみ、上空から



北小島に上陸すると岩肌の斜面無数のアジサシ、人間が近くと鋭いくちばしで激しく攻撃を仕掛ける。(岡田潤治 1953)

襲撃する海鳥たちの羽ばたきに抗しながら、陸地に足を下ろすことになる。

下りれば目の前は海鳥たちの世界、何処に足を下すかその踏み場もない。

島を覆い尽くす海鳥達の実態、足下の海鳥を追い散らしどうにか斜面を上り中腹までたどり付く、一面鳥、鳥、鳥、時は真夏、鳥糞から発する異様な臭いと鳥糞が堆積した枯れかけた草地、耳元に絡む羽音の襲撃、調査も何のその、ここは人間の立ち入る島に非らず鳥類の楽園である。この島の現実を体感した事が私にとって唯一実習の実態だった。

中腹に居たたまらず、海鳥の種類やコロニーの有態など意識することなく船着場に急ぎ退散した。しかし、これからが又大変、島の主たるアジサシ類とテリトリーの奪い合い、どうにか船着場の斜面に居場所を獲得しホットする。

一息して向かいの南小島を見る、斜面の一部の段差の縁に緑があり、アジサシ類の飛翔は見られない。島により棲息する海鳥の種類が違うのか興味をそそる。

南小島 岩山斜面全域 カツオドリ生息地 可愛い雛に 心なごむ

一応、北小島の様子もほぼ理解することができ、対岸の南小島に渡る。

北小島と異なり海鳥に襲撃される事もなく島に渡る事ができた。

北小島に面した海岸にかつて島での生活跡(古賀村跡の石積み)が望見できる。

まずは島の実態の把握とばかりに岩山の付け根に寄り添いながら低地部を進むが、アジサシ類の襲撃もなく鳴き声も皆無、一部にモンパノキ、ギシギシ、コウライシバ、ソナレムグラなどの生育が見られるが、まずは島の主体部をなす岩山を登る。

アジサシ類の姿はなく、岩山を登ると段差の所々に真白な産毛に被われた雛がいる。高良先生によればカツオドリの雛という。この斜面全域のカツオドリの営巣地として利用されている感じである。所々に食用に供された食い残しらしき魚の残りも見られる。実に可愛らしい雛に近づくと、臆する事もなく対面できる。

実に美しい可愛い、愛らしい、どう表現してよいか、私にはその言葉の持ち合わせがない。これまでこんな美しい感激した自然に巡り合った事がない。

余りの美しさに見とれる。心がなごみ、感激する。

然し時間との競合いの実習、其の場を離れるや否や、親鳥の帰りに出くわす。驚いて、一瞬大きく口を開け、飲み込んできたばかりの獲物を吐き出す、釣に行かず陸上での海からの贈り物。

この贈り物の実体験は、実験せず、其の場を離れる。

斜面を上り周囲を観察してもカツオドリ以外は確認出来ず、要するにこの斜面全域カツオドリの営巣地らしい事が解り、斜面を降りる。



親鳥の帰り待つ雛、白い綿毛に包まれ可愛い。(新納義馬 1979)

島の東の端に約 60m 近い岩塔が突出しているが、この岩塔と先程調査した島の本体なす岩山の間は、礁面海拔約 2m 程の礁原が広がり連なっている。礁原の中央部付近にはコウライシバ、ソナレムグラなどを主構成種とする植分も見られるが、全域無植生の感じで台風時などに風衝被害や潮害を受ける事も考えられる。又先に登った島の本体をなす岩山の南側は 50~100m の絶壁をなし、後年 1971 年琉球大学調査団がその岩棚でアホウドリの生息を確認している。



南小島で海鳥の臭さに息止めて記念撮影。
左 2 人目は宮城先生。(泉川寛 1953)



開洋丸の甲板いっぱい積まれたカツオドリの肉
食べてみたら美味しくなかった。(岡田潤治 1953)

魚釣島 古賀村跡にキャンプ 古城の如き石垣囲い 掘割も

南北小島での実習を終え、隣同志の島の実相の余りにも差があるのに驚き、それぞれの島の実態を如何に表現してよいやら全く理解することもなく、次の魚釣島に渡る事になる。

魚釣島に近づくと意外と大きな島である。しかもその外観が緑に被われた島というより黄色の強い黄緑色に被われた島である。想像と異なる島である。島に近づき、やがてその黄緑色の相観が全島ビロウ（別名クバ）が優占した相観である事を知る事になる。

今までかつてこれ程ビロウが全島を被い尽くす島に巡り会った事を実態として経験した事はない。

驚いたまま上陸する。

上陸地点はかつて古賀さんが拠点として活躍された場所である。船から見た外見はまるで古城の石垣に囲まれた様相である。而も船着場には堀割が有り、島での事業の大きさを想像し当時の人々の活躍振りに驚嘆しながら上陸する。



古賀村跡の石垣囲いの中に、カツオ納屋もあり、思い思いにテント張り、格好のベースキャンプとなる。(田中一郎 1953)

上陸して更に驚いた、目の前の石垣の余りにも堅固さとその異様さ、これ程堅固な石垣は今だかつて見た事がない。この石垣の実態を見てこれが魚釣島の自然の実相である事が次第に理解されてくるのだが、この初めての渡島ではまだ理解するまで至らなかった。

島での拠点の拠点は当然この古賀さんの事業所跡の地である。キャンプするに十分な広さもあり、而も十分な水流も見られる。島での実習期間の拠点を此処に決め初日は終わることになる。

さて宿泊地も当然この事業所跡の広場にキャンプを張るのだが、ここは余りにも蚊が多かった。私はこの事業所前の浜辺で米軍払い下げの一人用のテントを張り、帰るまで過ごすことにした。近くにまた別の学生仲間もテントを張ったりしていた。この浜辺でも毎晩蚊の襲撃に往生した事は云うまでもない。

然し、楽しい、苦勞の多い実習の日々であった。



瑞慶覧、田中、泉川君らは難破船の残骸とビロウの葉で浜辺に仮小屋建てて、宿泊している。(田中一郎 1953)

全城 ビロウによって林冠部形成

扨て、一夜明けは魚釣島での実習の有り態だが、先生の計らいで、各自の専攻の違いで、夫々別行動で島を体験したのだと思うが、誰と誰が一諸に行動したかも記憶にない。

私は一人で島の山頂へ登ることにした。幸い魚釣島には毒蛇がいない、無毒のシュウダがいるが、先ず気にする事もない。これは私の出身地が毒蛇の多い奄美で、小さい時から夏場は、毎年ハブに悩まされ、生活をした経験からである。

さて島の山頂へ、キャンプ地へ流れる溪流に沿って谷ぞいに登る。宿泊地の回りに僅かばかりの草地もあるが、かつての畑地の跡らしい、山腹に迫る。谷ぞいの僅か斜面の一部にビロウの欠如する林分が川ぞいに沿って成林しているが、他の斜面は一面林床にコミノクロツグを優占させたビロウを林冠に持つ植生に被われている。

所々山腹は段差があり、しかも林内は足場が悪く、これまでに経験したこ



魚釣島は見渡す限りビロウが林立するジャングル。(田中一郎 1953)

とのない地形が続き難渋な行程である。しかし、初めての尖閣での実習、二度と有り得えな

いかも知れぬ実習、黙々として山頂めがけて登る。周囲の林分の実相などは何処へやら、構成種にもお構いなく只黙々として山頂めがけて登る。初めての尖閣列島での学生実習、今後二度と有り得るとは考えられない離島である。山頂までの斜面で1回も植生調査する事なく、ただ山頂めがけて登る。周辺の林分など何処へやら、構成種が如何なる種類によって構成されているか頓と気にする事なく山頂へまで辿り着くのが実習の本分とばかりに登る。

しかし、待てよ、よく観察すると林内の階層は本島内の林相と異なり、林冠はピロウだけが飛び抜けて、只一種で形成されている、今登るこの斜面は北向きであろうか、先程船上から望見した島の様子、黄色に感じた林冠部は即ち島全域がピロウによって林冠部は形成されている証しである。これ程島の方位に関係なくピロウの優占する島は、これまで経験した事がない、風が強い事の証しであろうか、大洋の中に浮かぶ島、年から年中強い海風に晒されている実態を知る事が出来、又一つの収穫を得た感じを深くする。

山頂 樹高は低く密生 蘭類の多さに 驚く

山頂に近づく、次第に樹高は低く密生し、灌木状にからみ、着生植物が多くなる。地上から飛び出した岩盤上にも着生している。特に蘭類の出現個体数の多いのに驚く。イリオモテラン、リュウキュウセツコクなどこれ程個体数が多いのは初めての経験である。その他イヌマキ、アマミアラカシ、リュウキュウチク、クチナシ、ヤブツバキなど灌木状の樹形で密生している。この山頂の林分が全く特異的な林相を示しているのに何となく気になるが、調査をする事なく、只物珍しく検分する事すら忘却、只通り過ぎるだけである。

後日この山頂一帯に尖閣列島の固有種を始め多くの貴重種の生育を知らされるが、如何せん学生の身、準備学習の不足、只通り過ぎるだけ、今回の実習は黙々と林内(島内)を歩き、身体を通して島の実態を知る事に盡きる。

又何時この島に来る機会がある事やら知らぬ身なれば、何ともあれ島の多くの地点を観察する、体験する事に盡きる。

山頂部といえ、今自分の居る地点は島の西側の尾根であり、更にこの尾根伝いに進むと島の最高所に行ける筈だが今の己には思考外である。かれこれこの尾根部で時間を過ごしたと思うが全く記憶にない。多分尾根から反対側の斜面を覗き、その斜面が余り急なのに驚き足が竦み、直ちに宿泊地への斜面を折り返したと思う。

扱て、宿泊地への帰り、登って来た所を引き返した積りだが、さに非ず、全く別の離れた斜面を下りてる仕舞、帰る道は段差が多く、全く遠回りする態たらく、自然の観察も何処へやら宿泊地に帰る事だけに頭は一杯、其の他の事象は思考の外、所が自然は意の如くならずとか、所により急崖が多く、登って来た道より更に難渋する仕末、言葉もなく、唯無言、黙々と降りの道を模索しながら降りだけ、所により水滴が滴る急崖に出くわし、喉を潤し一息入



イリオモテラン。魚釣島の山頂域に見られる。(新納義馬 1979)

れる。やっと元気を取り戻し、どうにか宿泊地に辿り着く、一日の実習の終了である。

この後夕食の準備、実習の成果の整理、洗濯、野外実習は実に忙しい、しかし実に楽しく有意義である事は言うまでもない。

帰りは難渋 崖下から飛び降り ボートに乗る

さて実習の締めくくり、島からの帰島である。これが又一騒動、各自荷物をまとめ、採集品を保管して持ち帰るのに一苦労を重ねる、更に生かした儘持ち帰りたい採集品ら「ラン類」の仕末、悪天候の為、島の裏側に待機している練習船までの行程、出入りや凹凸の多い海岸線、時にすべり、ぶつかり、どうにかボートの待つ岩場に着く、母船は沖合で待機、上下に揺れている。台風接近を身近に感じる。しかしこの絶壁からボートに飛び降りる以外、帰る術はないと各自心に決め、上下に揺れるボートの動きに呼吸を合わせて一気にズドン。揺るボートに着船、生きた心地せず、神の加護に感謝、其の後どうして母船にたどり着き、帰島したか全く記憶にない。人間の性といえ、忘れ去ること、この性の良し悪し私の判断する能力の外のこと。



帰りは海が大荒れとなり、南側の岩山に移動、崖下に迎えるボートが待機、ロープを伝って影下に飛び降りる。(田中一郎 1953)

尖閣列島北小島に新資源

群れなす海鳥一千万羽

琉球大学術調査団の成果

尖閣列島北小島に新資源の発見は、調査団の調査結果から明らかになった。調査団は、北小島に約一千万羽の海鳥が群れなすことを確認した。これは、これまで知られていなかった重要な資源である。調査団は、この資源を保護し、持続可能な形で利用することを目指している。

調査団は、北小島に約一千万羽の海鳥が群れなすことを確認した。これは、これまで知られていなかった重要な資源である。調査団は、この資源を保護し、持続可能な形で利用することを目指している。

調査団は、北小島に約一千万羽の海鳥が群れなすことを確認した。これは、これまで知られていなかった重要な資源である。調査団は、この資源を保護し、持続可能な形で利用することを目指している。

調査団は、北小島に約一千万羽の海鳥が群れなすことを確認した。これは、これまで知られていなかった重要な資源である。調査団は、この資源を保護し、持続可能な形で利用することを目指している。

“尖閣列島北小島に新資源”
 “群れなす海鳥一千万羽”
 “琉球大学術調査団の成果”
 と新聞に報じられた。
 (琉球新報 1953.8.16)

1963年、高良先生に誘われ アホウドリ調査に 途中転覆危機に

第2回目の尖閣列島調査は、琉球政府文化材保護委員会の委嘱によるアホウドリ調査である。参加者は高良鉄夫先生を団長に、生物地理学的観点からの尖閣列島の海洋学的アプローチを重視、琉球気象庁海洋係長伊志嶺安進氏を参加させ、私も委員の一人として参加させて頂き、更に、当時アホウドリの生存が確認できれば世論を震撼させるニュースバリューが予想される事態、琉球新報社田積友吉郎記者、同社森口豁記者、沖縄タイムス社栗国安夫記者、琉球放送テレビ社赤嶺得信記者、沖縄科学教材社照屋林松氏も同行することになる。

しかし、赤尾礁、黄尾礁をはじめ、南、北小島、魚釣島など各島々を回航し観察したが何れの島でもアホウドリの生息を確認するに至らなかった。

当時この地域赤尾礁近海は米軍の演習区域に指定されている事もあり、初鼻から米軍の警告照明弾を浴び、更に赤尾礁を真近に三角波に逢い、正に転覆寸前、調査団一同肝をつぶす。その瞬間、私はこれも宿命かと脳裏を走る、しかし船長、船員の即座の機転で、船は元に戻るが、機関室が海水に浸りエンジン故障、その後船足が遅くなり調査日程も短縮せざるを得なくなった。

船上から魚釣島が見えても船足は依然として遅く予定の魚釣島には中々近づかない。このまま古賀村跡のキャンプ地に着いたとしても、其の後今日一日どれ程の時間に余裕があるか、調査が充分できるか不安になり、高良先生にお願いし、今船から最も近い魚釣島の海岸に降して貰うことにした。



「航海 2 つの恐怖 全く死ぬ思い 図南丸だ捕と赤尾礁の浸水」遭難を報じる新聞。
(琉球新報 1963.5.20)

魚釣島 単独調査 植物群落構造 6パターン判別

高良先生に承諾して頂き、船長の協力を得て、東北岸部の砂浜に降ろしてもらい感謝一杯、東側の山頂部一帯は全く調査されてなく、調査するには最適の場所だった。

私にとって初めての魚釣島での単独の植生調査、チャンスを与えて頂いた先生に感謝、一人切りの島で、米軍払い下げのテントを張り、島唄を口ずさみながら、島の自然を堪能した事は云うまでもない。

日暮れても現地の植物が判別出来る間、海浜から陸域へかけて植生調査を繰返した。

翌日、夜明けと共に、前日調査が終了した海浜植生との接続地点から山頂への調査を始める。山頂へかけての調査は、斜面の起伏が激しく地形の変化につれて出現植生も多様、しか

し時間に恵まれ予定通り山頂域まで無事調査することが出来、魚釣島の群落構造は 6 パターンから成ることが判明した。翌年「尖閣列島の植生」のタイトルで「琉大文理学部記要 理学篇第七号」（1964 年 5 月刊）に発表することができた。

昨今魚釣島はヤギ食害で、島の植生、生態系は破壊され、裸地が進行し、崩壊が進んでいるのは遺憾である。かつての魚釣島の自然、植物群落は被害を免れてどの程度残っているのだろうか。ヤギ食害で大半が絶滅していると考えられる。

魚釣島の本来の自然、群落構造は、往時の調査報告からしか知る術はない。

このようなことから、本調査で得られた魚釣島の群落構造を参考に供するため記す。

1、イヌマキユーウコ克蘭群落

此の群落は、島の山頂や尾根の風衝地に発達した群落である。斜面の鬱蒼とした森林地帯を通り抜け、一度尾根筋に出ると、眼前に展開する景観の相違に一驚、海岸から全斜面に成林していたビロウは急激に減少し、樹冠をそろえた密生叢の灌木林でシャリンバイ、ヒメシャシャンポ、ナタオレノキ、アデク、ハマヒサカキ、センカクツツジ、イリオモテラン、リュウキュウセキコクなどが多くの出現種によって群落が形成されている。



海拔 300m 付近の山頂部風衝植生 イヌマキユーウコ克蘭群落。その群落にあったセンカクツツジやイリオモテランなどは絶滅していると考えられる。（新納義馬 1963）

2、ビロウクロツグ群落

此の群落は魚釣島の森林の中で最も広い面積を占めている林分で、海岸の灌木林の後方から山頂にかけて全斜面蔽いつくしている。他の常緑樹林がなす樹冠から一際高くビロウが突出している景観は本群落の独特の相観といえる。林内はオオアマクサシダ、ナガミボチョウジ、ムサシアブミ、カクレミノ、ツゲモドキなど多くの樹種の出現が見られるがクロツグの出現が特に高く林床を特徴づけている。



魚釣島北側斜面の高林木、ビロウクロツグ群落。ヤギ食害で林内の植生破壊が更に進行すれば島の崩壊を引き起こすことになりかねない（新納義馬 1979）

3、シロガジュマルーアカテツ群落

隆起サンゴ礁に続いた砂浜の、海岸と山地斜面との境界を成すように発達した植生である。場所により隆起サンゴ礁に直接続いている山の斜面に発達している群落である。アダン

の混生している場合が多い。この群落に適合率の高い種としてオオバギ、ノアサガオ、クロミノオキナワスズメウリ、シロガジュマル、アカテツ、クワズイモ、トウズルモドキなどをあげる事ができる。

4、クサトベラーモンパノキ群落

この植生は前述のシロガジュマルーアカテツ群落に接して発達している群落であるが直接海水の浸入を受けることはない。出現種数は少なく単純な群落である。題名の種類により他の海浜植生とは全く違った相観を示すので容易に識別できる。



海浜の低木群落のクサトベラーモンパノキ群落。ヤギの食害で無惨な景観に変貌しているのでは？（新納義馬 1963）

5、シロバナミヤコグサークロイワザサ群落

クサトベラーモンパノキ群落の下位に発達している。特に共通種の生育も見られるが上記識別種の出現により相観を異にするので他の群落から容易に識別できる。

6、サンゴ石灰岩（隆起珊瑚礁）群落

魚釣島におけるサンゴ石灰岩は島の北東側から北西側にベンチ状に発達し、サンゴ礁原特有の景観を持つ海浜植生が飛沫帯から陸域にかけて、イソフサギ群落→ミズガンビ群落→ソナレムグラ→コウライシバ群落→ボタンニンジン群落と大体帯状に発達している。

これらの各群落は風の強い満潮時には海水の影響を受けるものと考えられるが以下飛沫帯から順に各群落について説明を加えたい。

A イソフサギ群落

飛沫帯に続いて発達している群落でイソフサギ一種類からなる単純群落である。典型的な団塊植物で礁原の岩肌に密生し、飛沫帯から一定の距離をおいて発達している。

B ミズガンビ群落

イソフサギ群落に続いて発達し、かなり広い面積を持つ群落でミズガンビにより相観を特徴付けられているが、この植物は一尺足らず小灌木であるが、岩の割れ目に根を張り、枝をからませて匍匐し、地形に応じて特異の景観をつくる。琉球列島に広く分布する。

C ソナレムグラ→コウライシバ群落

前記群落に続いて発達する群落で、サンゴ石灰岩群落として極く一般的群落である。見た目は殆んどコウライシバの単純群落に見えるが群集標兆種であるソナレムグラは勿論テッポウユリやハギカズラも見られる。



北西部海岸のサンゴ石灰岩のミズガンピ群落。
ヤギに採食され絶滅しているだろう（同上）



西部海岸のサンゴ石灰岩のソナレムグラークウラシバ群落。壊滅的な打撃を受けている。（同上）

D ボタンニンジン群落

隆起サンゴ礁がそれなりに広く発達している礁原で、海岸林(クサトベラーモンパノキ群落)の発達しない礁原の最後方に出現し、礁原植生から海岸林への推移帯植生を考じさせるがボタンニンジン、ハマササゲ、ヒメカモノハン、ツボクサ等も出現し、相観的にも他の群落と識別できる。

以上 高良鉄夫先生に、尖閣列島に2回連れていかれた調査の有態です。

高良先生有難う御座いました。大学生生活4年間の間、お世話になり、又其の後の調査にも同行させて頂き、人間として生きる態を学生としてではなく、一人の人間として指導して頂き、心から感謝を込めてお礼申し上げます。

又、この文を書く機会を与えてくれた編集部にお礼申し上げます。 (了)

“尖閣列島を総合調査”
“植物学上未開の宝庫”
“魚族の多い魚釣島近海”
と報じられた。
(琉球新報 1963.5.19)



補足：尖閣諸島・魚釣島 植物地理学上重要な島

ヤギ食害で 固有種・希少種 すでに絶滅していると考えられる

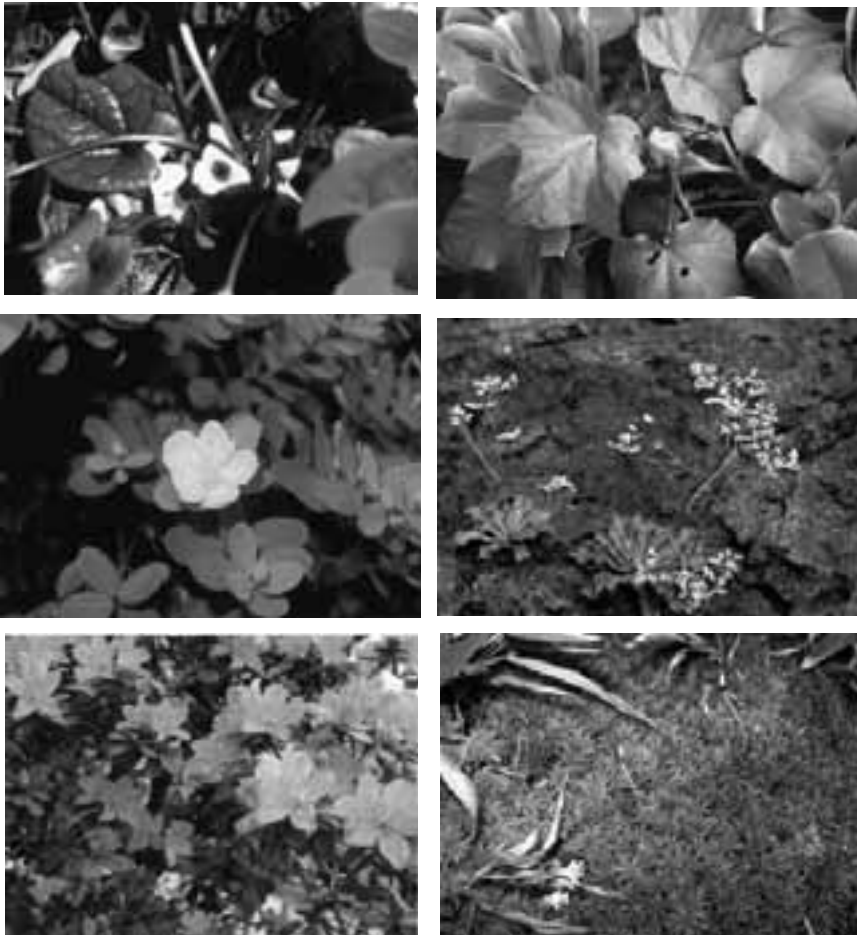
魚釣島での採集や現地で実見した植物は維管束植物103科339種である。

これら自生植物の中には魚釣島の固有種センカクカンアオイ、センカクトロロアオイ、センカクオトギリ、センカクハマサジ、固有変種センカクツツジ、ムラサキチヂミザサがある。

さらに日本では魚釣島だけに産する種にマルバコケシダ、マメヅタカズラ、タカサゴアザミ、コハナカモノハシなどがあり、琉球列島では魚釣島だけに産する種にオオミズゴケ、ノブドウ、ツタ、ヤブコウジ等がある。

魚釣島が分布の北限と考えられている種にボウカズラ、ヒメシシラン、ナンゴクキケマン、ケナシツルモウリンカ、テリハノギク、リュウキュウセッコク、イリオモテラン、オオキヌランなどがあり、魚釣島は植物地理学上重要な島である。

現在、魚釣島は、遺憾にことに、ヤギ食害で、島の自然、生態系は破壊され、これらの貴重な固有種、希少種などは、すでに絶滅していると考えられる。



右から 上:センカクカンアオイ、センカクトロロアオイ 中:センカクオトギリ、
センカクハマサジ 下:センカクツツジ、オオミズゴケ

閑話休題

開学時から地元大学の重大な使命、科学発展に寄与と
全学的なバックアップを受ける
—3大学長が尖閣調査に尽力—

「尖閣調査のパイオニア」高良鉄夫博士(第8代学長)の主導による 1950 ~ 60 年代の調査が成し遂げることができたのは、琉球大学は開学当初から尖閣列島調査に力を入れてきたからである。

その調査を後に押ししたのは当時農学部長島袋俊一博士(第5代学長)でもあった、島袋農学部長は、第三次調査の際、学生で参加した新納義馬氏に銹菌採集を依頼した。魚釣島で採取した銹菌3種が農家政学部学術報告書第二号(1955 年刊(註※))に記載されている。同論文が尖閣列島銹菌について記した唯一のものである。

(未だに尖閣列島の銹菌類研究は皆無であり、あとに続く銹菌の採取がないのが遺憾である。)

1970 年代以降は、池原貞雄博士(第 7 代学長)に引き継がれ、1971 年の琉球大学総合学術調査実施に進展した。このように見てくると3代学長が関わったことになる。



5 代学長 島袋俊一



7 代学長 池原貞雄



8 代学長 高良鉄夫

一つの大学で、3代学長が尖閣列島調査に主体的に関わったのは異例である。

だからこそ、琉球大学が一大プロジェクトとして尖閣列島調査に取り組み、大きな成果を上げることができた。それは3代学長の専門(島袋博士は植物病理学、高良博士は応用動物学、池原博士は動物学)が自然科学だったからなのか。新納氏は「魚釣島の村長さん」の異名をもち、尖閣の植物調査の中心的役割を果たしてきた。その3代学長にも師事し、当時大学の事情に精通していた氏は、それだけではないと強調する。「初代志喜屋孝信学長や胡屋朝賞学長(第2代)安里源秀博士(第3代、6代)(三人とも英文学や人文科学が専門)をとってみても、尖閣列島に対する理解は大きかった。調査は地元大学の使命・責務である。沖縄の自然科学研究の発展に寄与するとして、絶大な協力を惜しまなかった」。このような大きな視座に立ち、全学的なバックアップを受けて、50 年代~ 70 年代の琉球大学の尖閣調査は推進されたのである。



初代学長
志喜屋孝信



2代学長
胡屋朝賞



3,6代学長
安里源秀

註: Uredinales of the Southern Ryukyu Islands
By Naohide HIRATSUKA and Shun-ichi SHIMABUKURO

※本コラムは「尖閣研究 高良学術調査団資料集

2007 年刊」より転載しました。

閑話休題

一癖も二癖もあった戦後の沖縄経済人 尖閣初期調査は、経済人の支援で成し遂げられた

戦争が終わるや瓦礫の中から沖縄の経済復興・再建に向けて立ち上がった若者たちがいた。彼らは一癖も二癖もあり、強烈な個性とバイタリティ、抜群の行動力と情熱の持ち主だった。その一人の高良一氏は、米軍事施設に乗り込み、「民衆は娯楽に飢えている」と部隊長を説き伏せ、鉄条網を撤去させ、資材の無料提供をうけて、劇場を創設した。ここに奇跡の一マイルといわれた国際通りのものが築かれ、那覇市の発展をもたらした。アイディアマンの氏はいち早くホテル、観光事業に取り組み、43歳で銀行頭取、商工会会議所会頭、那覇市議会議長を歴任し、政財界に君臨した。40余年前にモノレール構想を提言し、ホラ吹きと嘲笑されたが、今日では氏の予言は実現している。

武人で鳴らした宮城嗣吉氏も映画興行で大当りした経済界の大物となった。沖映興業を設立し、沖縄芝居の復興発展に情熱を傾けた。氏の破天荒さを語る終戦時の秘話がある。

住民と日本兵が立てこもっている轟壕に投降を呼びかけても誰も応じなかった。「出ていく者は敵に通報するスパイとして射殺する」と、兵隊が脅していたからだ。米軍は救出を断念、ガソリンを流し火を放とうとした。あわてた氏は「それでは住民が殺されるだけだ」と説得、米軍からカービン銃と手榴弾を借り、仲間5人で決死隊を組織して壕に突入、天井に向けて銃を乱射、兵隊を下方に追いやり、住民に壕から出るように呼びかけた。住民に続いて兵隊も投降した。彼らも出て行きたかったがキッカケがなかった。宮城氏らの決死の救出作戦で約1000人の住民と兵士の命が救われたという。



高良 一氏
(国際劇場社長)



宮城嗣吉氏
(沖縄映画配給社長)



稲嶺一郎氏
(琉球石油社長)



竹内和三郎氏
(沖縄食糧社長)



宮里辰彦氏
(リウボウ社長)

元満鉄にいた稲嶺一郎氏は琉球石油を創設した。後藤新平総裁の満鉄中央研究所に倣い「琉石産業研究所」を設け、ハワイ、米国、東南アジア各地から生物資源を捜し求め、沖縄の産業発展に資するとした。(氏は尖閣の漁業・海底石油資源の開発に最後まで奔走した)。

戦後の沖縄経済を復興・再建した経済人はこのように一徹・変わり者で様々なエピソードに事欠かない。そんな豪放な彼らは、沖縄のためになるならばと、大学への研究援助は無論、尖閣調査を喜んで支援した。高良氏や宮城氏らは目の前で札束を取り出し、「で、いくら欲しい？」と、寄付金集めに来た学生だった新納氏や瑞慶覧氏らを驚かせた。

稲嶺氏が戦後沖縄のエネルギー業界の重鎮だとすれば、竹内和三郎氏が米穀業界、宮里辰彦氏が百貨店業界の重鎮であろう。いずれも一癖も二癖もある強烈な個性の持ち主たちであった。終戦後の沖縄経済界に、彼らが君臨していたのは幸いだった。

高良尖閣調査団の初期調査の偉業は、彼ら経済人の絶大な支援で成し遂げられたともいえよう。

※本コラムは「尖閣研究 高良学術調査団資料集 2007年刊」より転載しました。

対談 新納義馬 vs 上運天賢盛

— 65,6年前の尖閣諸島調査、おもい出ずるまま 語る —

1950年4月、終戦から僅か5年後、飲まず食わずの時代である。高良鉄夫は、魚釣島を単独調査し、尖閣諸島の大自然に魅せられた。その2年後の1952年、再び琉球政府資源局技官3名と開校間もない琉球大学の学生3名を率いて、南小島と魚釣島を調査した。

翌1953年には、高良は、11名学生を引き連れて、尖閣野外実習調査を行った。

上運天賢盛(87)は、1952年高良の第二次調査、新納義馬(93)は、1953年の第三次調査に学生で参加した。20代の若き生物学徒にとって、尖閣調査はビッグなできごとであり、青春の記念すべき貴重な体験の1つとなった。

新年のお屠蘇気分も抜けやらぬ1月末の昼下がり、新納が上運天の工房(作業場)を訪ねた。

尖閣諸島の写真や地図などを持ち込み、往時の調査の思い出をつれづれなるままに語り合った。65,6年前のできごとは、忘却の彼方にと思いきや、豈図らんや昨日のここのように鮮明に憶えていた。兩人ならではの話も飛び出し、興味深い貴重な内容となった。

なお、文中に幾つか注釈を付記したが、本文を理解するのに何ら支障はないので、飛ばして読まれても結構です。



「宿営地の掘割から遠くに上陸したよ」「それじゃ大変だったわ」

資源調査が目的 助手兼雑役係で 学生3名同行

— 1950年に高良先生が1人で調査されて、52年、53年には、先生は、矢継ぎはや、琉大の学生を連れて連続調査された。53年の新納先生らが行かれたのは尖閣諸島での学生野外実習兼調査が目的だったと分かりますが、52年はどんな目的だったんですか。

上運天：調査の目的は経済的な資源の目ぼしいものがあるかどうかというのが最大の目的だったらしいけれども、建築資材らしきものもなかったし、で、鉱物関係は、私はさっぱり分からないが、いいものそんなになかった。

多和田先生の説明では、マンガンとかその他銅とか、石炭になるような物とか、そういったようなものを期待していたみたいだが、それらしきものはなかったとは言うていた。

高良先生は、尖閣列島に経済的な資源があるかどうか、それを調査に行く。だから、木材にしる建築資材になるのがあるのか、あるいは鉱物が、石炭か銅かそういったものがあるのか、どうか、経済的な資源があるのか、どうか、そういう話はされていた。これは講義だったのか、授業外だったのか、そこら辺ははっきりしない。

尖閣列島調査の助手兼雑役係（炊事）を募集していると聞いたので、行きたいですと言ったら、林業試験場の多和田真淳先生、資源局の棚原清一技官、水産研究所の知念正男技官の偉い先生方が調査に行く。お前たちは操業の調査の助手であって、調査員そのものではない、で、主な任務は炊事当番だと言われた。それでもいいから、行った所でもない所だから、ぜひ行きたいと希望した。

尖閣列島と云ったら、八重山よりかもっと南の所の台湾越えてフィリピンに近い所かなと思った。カツオ工場があったと聞いたから、そしたらサイパン、トラック辺りにもカツオ工場があったから、南を連想したが、今度は、八重山の北の方にあるというから頭が混乱した。そんなこんながあって、松元昭男先輩、新垣秀雄と私の学生3名が、調査助手兼雑役係として、尖閣諸島に行ったわけです。

突き船基本丸で行く 夕食 美味しい刺身に 舌鼓打つ

—この時の船がこれです。突き船基本丸で、突き棚が長く突き出てますね。

上運天：これ、魚釣島から帰る時に迎えに来た時の写真だね。ああ懐かしい。

これ舳先がこんなに長く出ているカジキの突ん棒船だった。あの時はシーズンオフだから、尖閣列島行くのを皆嫌がっていた。それにサバニ持ってないからサバニも借りないといかんという。先生たちは相当苦労されていた。とにかく高良先生の家で2日足止めされて、用船した。で、この基本丸に乗って尖閣列島に向かったら、途中で、三角波に見舞われて2時間位相当揺れた。これを過ぎたら穏やかだったけどね、三角波には随分と悩まされて、この時船酔いもした、散々吐げた。夕食に美味しい夕食が出ていた。こんな大きなドンブリ(丼)に、刺身がいっぱい出てきたんですよ。どうぞと言うから皆で食べ



突き船基本丸、尖閣はカジキの好漁場であり、乗組員漁師は尖閣の海を知ったベテラン揃いだった。(新垣秀雄 1952)

て、美味しい、美味しいと言って、高良先生がこれ何と言う魚ですかと、聞くんだけど、漁師は「うーん、まあね」と濁していた。1時間ほど経ってから。さっき皆さんが食べたのはフグです（笑）。それでえっと思ってびっくりしたね。で、何とかフグと言いつつたけど、毒は骨にあるからそれを料理する時に、注意して骨を除いて、で、フグは種類によって、毒の部位が五臓六腑の場所が違う、胆のうにあったり、肝臓にあったりするから、だからそれはフグの料理を専門的にやっている人じゃないと迂闊にはできないと言っていた。

新納：初めて聞いた。いい勉強した（笑）。

上陸に一苦労 古賀村石積み工場跡 骨組み、カマド 残っていた

— 最初に上陸したのは南小島で、上陸には苦労したと聞きましたか？

上運天：そうです、波が荒くてね（笑）。（地図さして）、こっちに北小島あるから、この対岸だったから、この辺かな。ここに古賀さんの石垣があるから、船からポート（カツオ船の伝馬舟）に渡って、上陸したのはこの辺だったと思う。上陸には一苦労した。岩を、波を避ける様にして、まず漁師が、波に流されないように身体にロープを巻き付けて、海に飛び込んで、岸まで泳いで行って、岸からロープとこちら側と繋ぎ、ポートが波に流されないように両方に引っ張ってから、それから私達は荷物を渡しながら上陸した。殆ど腰まで海水に浸かったね。そして、殆ど着替えという着替え持ってなかったから濡れたままだよ。それも皆漁師たちの手を借りてから。



波が荒く流れが速い、漁師の手を借りて上陸した。（魚が鳥を食った話）より

新納：あんたなんかは、ここに上陸して、ここでキャンプしたんだ。ここは前の人（古賀村人）が生活した跡だ。

僕らは翌年、行った時は、ここには来てない。琉大調査（1971年）の時に初めて行った。

上運天：南小島には石垣があつて、古賀さんのカツオ工場跡が大分残っていたよ。骨組みはあつたけど、この屋根はなくなっていた。あとはあつた。要するに屋根の萱がなくなっただけで、その屋根を葺いていた骨組みは大分残っていた。

カツオ節造る道具は見えなかったけど、どうも石が置かれていたんじゃないか、多和田先生が話をしていた。レンガじゃなくて石を積み重ね



南小島の工場跡の石積み、古賀氏時代は海鳥剥製工場の根拠地で石積みがかきれいに残っている。（新垣秀雄 1952）

て、このテーブル位の鍋が置くことができるような状態の石が大体 30 センチ位の高さで、煮炊きするカマドが2か所あった〈注1〉。

2晩はそこで過ごした。少々の雨風は防げる程度で、そこで蚊取線香を何10本も点けたけど、大変だった。

※注1:古賀氏時代は鳥剥製工場として使用。終戦後1950年頃、宮古島の漁民が冬場上陸して石積み跡を利用してカツオ節製造を行った。柱、梁など骨組みは海岸に漂着している流木で、屋根は萱使わずに、米軍用天幕で覆い被せたという。上運天氏の話から上陸した1952年頃まで、流木で造った骨組みと石を積んで拵えたカマドが残っていたことが分る。

雨降って 中腹岩陰の洞窟に 天候悪く 逃げ込むが

上運天:計画では南小島は1日、翌日北小島に渡って、そこも1日調査して、魚釣島に行く予定だったけど、翌日から天気が荒れてしまい、迎えの船もこないから、結局南小島に1週間閉じ込められた。ニンガチカジマーイ(二月風回り、移動性高気圧)と云うの、台湾坊主に遭ったから。

新納:1週間もおったら全部調べられるわ。

上運天:いや、それが雨が降りだしたもんだから、石垣囲いの所から、上の方に上がって行って岩陰に洞窟を見つけたから、そこへ移動したよ。そしたら雨は降るし、風は強いし、天気悪いから、思うように調査もできん、洞窟に閉じ込められて(笑)。

新納:(写真指して)これが古賀村の跡だけど、後ろは崖になっていて、あんた方が登ったというのはこっちか。

上運天:いや、その雨が降っていたから、こちらからこう登ってこう行った。それでかなりの急勾配であるけど、ごつごつはしてなかったからね、色んな必要な道具だけを持って登っていったけど。これの上の方にずっと登って行って、まだ中腹の所、頂上でもない。大体真ん中辺りに洞窟あった。中は割と広い、12畳位の広さで、完全に平らな所と言えないけど、殆どが緩やかな傾斜、奥に向って緩やかに傾斜していた。イワツバメが入り口にずらっと並んでいて、あれ大変珍しかったから、新垣秀雄さんが写真撮っていたよ。



南小島の石積み裏手の岩山、斜面はカツオドリの営巣地となっている。

(仲間均 1995)

鳥糞の水 木灰で漉して 飲む 雨降らなければ 大変だった

上運天:この洞窟にどの位居たかな? 3日か4日位は居たかな。あとは水がなくなっ

て、飲み水は3日分は船から降ろして持っていた。米軍の水缶にいっぱい入れて、あとなくなったから、どこかで水を、松元昭男さんと新垣秀雄さん3名で、この辺をずっと探して、こちらにちょっとした岩の陰に水が溜まっていたんだ。澄んだきれいな水だから、ああ水があるじゃないかと、最初松元さんが飲んだら、すぐペェと吐き出した(笑)。

要するにグアノ(鳥糞)の下を通って来ているんだよね。大変だ、これ飲めないと言ったら、そしたら棚原清一技官が丁度木灰をやっていたから、これで中和したら幾らかは飲めるんじゃないかと、でもやっぱり飲めなかったね(笑)。もうしょうがない、喉カラカラだから飲んだけどね(笑)。

新納: 琉大調査(1971年)で行った時、僕らは、この辺かな、ここまで行けば、洞穴があって、ちゃんとドラム缶に水が溜まっていた。漁師か誰か知らんが、前の人が洞穴の上から、水がポトポトと落ちて、ここでドラム缶に水取っていたわけよ。ここで、僕もそれまたまた行ってから分ったんだけど、ここに行くとドラム缶が置いて水が溜まっていたよ。

上運天: いや、それ見なかった。このドラム缶、もしかしたら後から置いたかもしれない。

新納: あんたなんかは水はどこで取った?

上運天: 水には困ったね。雨が降り出したもんだから、これ幸いだということで、テントを広げて、食器から何から全部広げて、水を溜めて取った(笑)。もし雨が降らなかったら大変だった。もうグアノの水しかないから。戦時中を思い出したから、あんな飲めない水も飲んだじゃないかなと思うけど(笑)。



洞窟での避難生活、後方にレンガ造りの水タンクが見える。向かって右より棚原、知念氏、(多和田真淳 1952)

島から 両手に手拭い 手旗信号で 船に交信

— 南小島は1日、翌日北小島に渡って調査する予定が、突然嵐に遭って、洞窟に閉じ込められた。天気少しよくなると船は来るが、迎いのボートを島に着けられないわけですか。

上運天: そうです、島と船とは手旗信号で合図した。手旗信号は皆まともに受けているか知らんが、高良先生も、多和田先生も知っていた。知念さんも使っているようだった。私たちはこれ分からんでこんなして真似しはしたけどね。だからこれがイ、ロがこう、ハー、ニ、それからホはこうだったかな(笑)。両手に手拭か、ハンカチ持って。多分手旗信号は当時の人の必修だった、高良先生は軍隊上がりだから、知念さんは水産資源開発という名目で行かれたから、水産学校で習ったんじゃないか、私は戦争が始まったのは4年生の時な

んですよ、4年の時の担任が海軍中尉だった。現役の海軍中尉が私たちの4年生のクラスの担任だったけど、その時も簡単なイロハニの手旗信号は一応は教わった。5年生になったらモールス信号、イトーロジヨウハーモニカとって、こうやったけど、もう全然聞き取れない、一応習いはしたよ。4年生は手旗信号、5年生はモールス信号教わった。サイパンで。

新納：僕もみつちり仕込まれた。今でも覚えている。

山の上で 魚獲る カツオドリ びっくりして 魚吐き出す

上運天：私と松元さん、新垣さんの学生3名は炊事係だったから交代で魚取りにいった。私は薪と食料確保ということで、この辺から山の方に登って行って、そしたら急な勾配だから、そこにはカツオドリが一杯います。しかもエサを獲ってきて海から戻ってきている。こっちは食料も何も探せないもんだから、癪にさわって、カツオドリに棒切れを投げつけたよ（笑）。身体に当たらないけどびっくりしてね、お腹の中の魚、ゲエッと吐き出して飛んで逃げていった。見たらイワシだよ（笑）。この吐き出したイワシを拾って、これ今夜のおかずだ。これ面白いからと、どんどん戻って来たカツオドリ目掛けては、棒切を投げた。当たらなくても、びっくりして吐き出して飛んでいく。



上運天 賢盛

新納：そうそう、カツオドリ、びっくりさせると、魚吐きだして飛んでいく。トビウオとか、イカとか吐き出したのは、僕もよく見たね（笑）。

上運天：それで、もう10匹位イワシを拾って、これ持ち帰って料理した。そしたら、多和田真淳先生がこの魚はどこで獲ったんだ一と言うから、山で獲ったとは言えないから、新垣秀雄さんが海沿いに薪取りに行っているから、そのあと追いかけたら、窪みがあって、そしてそちらで見たら魚が沢山いたから、持って行った昆虫網で獲ったと言ったよ（笑）。それを聞いて、皆、じゃ俺たちも行ってみようと言うことで、皆出て行った。



したら、適当な、1坪畳2枚程度の窪みで、そして大きな魚がね、50センチ以上の大きな魚が、何か分からんけど、知念正男さんがアジだ一、アジだ一と言うていたけどね。アジってそんな大きいのかと思っていただけ。とにかくね、棒を探して突くんだが、獲りきれない。もう多和田先生と知念さんなんかはもうパンツ一枚になって、裸になって、潮汲み出して、もう大きい奴を捕まえると言って、もう一生懸命よ、もうそれ捕まえるまでが大変だった。

最後にはやっとかさ捕まえた（笑）。あの魚は大きかった。

シュウダ捕まえ 料理する 臭くない 骨多かったが 美味しかった

上運天：南小島はシュウダがいっぱいいたけど、あれも料理して食べた。シュウダは島中、どこにでもいる。山の天辺にも、それから海岸伝いの草の中にもいるしね。私のでっかい奴を捕まえた。焚き木拾いに新垣さんが先になって行って、私は後ろから来たんだが、そしたらこの岩テーブルの半分位の小さい岩の下から尻尾が見えるわけだ。ああシュウダだ。今日の夕飯のおかずだといって引っ張ったら、ずるずると出てくるわけだ（笑）。

2メートル位あったね。あれでっかかったよ。

新納：そう、尖閣列島のは大きい、全部大きい（笑）。

上運天：でっかいのでどうしようかなと思ったけどね。折角の夕食の食材だし、放すわけにもいかなくて、ずっとそのまま引きずったままやってね。時々向かって来よったけど、その時はずっと叩いたりしていたら、高良先生がいい食材だ。だけど臭くないかと言われて、初めて臭いと分った（笑）。そしたら、もう手の臭いがいつまでも取れない。

新納：もう、あれは大変、臭い付いたら。だからシュウダの臭はこれからきている。

上運天：結局高良先生に料理の仕方を教わってね、胴体がこうあって、首をちょん切って、あと皮、ずっと引き抜いて、丸裸にして、それでぶった切って料理して食べたんだよね。その時には、臭いなかった。臭いなかったというより前のような臭いはなかったよ（笑）。多分臭かっただろうけど、そんなこと言っておられないような生活だったからね。

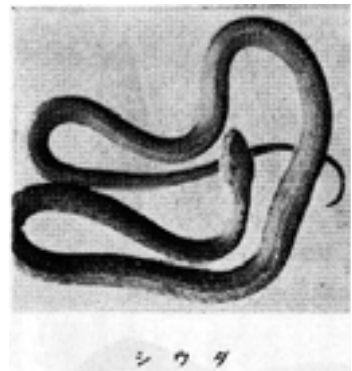
結局骨が多くてね、肉は少なくて食べたことは食べた。美味かったよ（笑）。

新納：僕はハブは何回か食べたけど、蛇の仲間は骨が多い。ハブでも、何でも、全部骨が多い。肋骨、脊椎があって、全部小さい骨がいっぱい付いていて、肉はダメ。あれはスープだ。薬、薬だから言って、皆スープにして、あれ食べている（笑）。

上運天：うん、味はあるよ、ハブなんかも、味はあるけど、骨が多過ぎて肉少ないね（笑）。

シュウダの食べ物？ あそこだと、ネズミなんか、それから海鳥、カツオドリとか、ミズナギドリとかの卵を食べているんじゃないかな。卵は幾らでもあるから。

そこから魚釣島行ったら、あそこでは鳥は見なかった。だけどシュウダはいっぱいいたね。魚釣島は大きいのがいた。あそこのは何食べているのかな？



高良先生 猟銃発射 カツオドリ 驚いて 一斉に飛び立たず

— 高良先生が猟銃を持っていて、南小島で撃ったら、鳥は驚かなかったと聞きましたが。

上運天：そうそう（笑）、高良先生はこっちに来る2年前に、魚釣島に1人で来ているんですね。その時に南小島を見たら、カツオドリがいっぱい飛んでいるのが見えた。それで南小島に来た時、猟銃を一発撃てば、鳥たち驚いて一斉に飛び上がって空に舞う。もう太陽を

覆い隠す位に空一面真っ黒になって、さぞや壮観だろうから、これを写真に撮ろうというのが先生の狙いだったわけ（笑）。確かにカツオドリはいっぱいいるんだ。

登ったのはこの辺かな、急な斜面を登って行って、途中で、中腹で、カメラも準備して、先生はカツオドリを前にして猟銃を撃った。ババーンと一発撃った。僕らも頭の中は、びっくりして一斉に飛び立ち、もう空一面真っ黒なるだろうと期待していた。だけど、カツオドリは僅かしか逃げなかった。びっくりしないんだから（笑）、僅かよ、飛び立ったのは。かえって僕らがびっくりした（笑）。

— 不思議ですね、ババーンとしても。やっぱり人馴れしてないと、猟銃の音にはびっくりしないんですかね。

新納：銃声をあまり聞いたことがなくて、自分達に害を加えるものとは思ってなかったんじゃないの（笑）。

上運天：まあ、それもあるかも知れんね。でも、あの時カツオドリは全部卵抱えていた。抱卵しているもんだから、あまり飛ばなかったのかな。高良先生はがっかりしていた。

翌日も猟銃を撃ったよ。撃ったけどね、やっぱりあんまり飛ばなかった。地上には沢山いるけど、やっぱり、飛ぶのは僅かしかいなかったね（笑）。

新納：確かに、子育て最中とか、抱卵している時のカツオドリは、人が近づいても飛び去らないね。飛ばないで、あの鋭い嘴で、人間に攻撃してくるから危険だ。繁殖の時期だったから、猟銃の音でも、飛び去っていかなかったわけだ（笑）。

ミズナギドリ 捕まえる エサないから 剥製にして 持ち帰る

— 琉大首里キャンパス時代の風樹館には、上運天先生のオオミズナギドリの剥製が展示されていたのですが、あれは南小島で捕獲したものです。

上運天：そう、この時に南小島で僕が生け捕りにしたけど、高良先生が、生きたまま持ち帰れんからと、即席に剥製にしたが、これがまた愉快的な話です。

南小島で、ミズナギドリというのは土の中に穴掘って棲んでいた。丁度緩やかな斜面で40度位かな、岩石ではなく、土壌かグアノ（鳥糞）か、何か知らんけど、土の中に穴が所々開いているんだ。これネズミの巣かと思ったら、高良先生が鳥の巣と言うから驚いた。

鳥の巣は地面の上とか、木の上にあるから、

いったいどんな鳥の巣かと興味を持った。中覗いて見たら、何も見えない。

高良先生が「夜来たらいるよ」と言うから、私は懐中電灯を借りて、夜捕まえに行くことにした。多和田先生が素手で捕まえたら危ないからとアメリカ製の皮の手袋を貸してくれ



久場島にも生息しているオオミズナギドリ
(新納義馬 1980)

た。巣穴には昼間目印の棒立てているから、行ったら、穴の中に何か見えた。懐中電灯照らして見たら、白いのがグジュグジュしているから、手を突っ込んだ。突っ込んだら噛み付かれた(笑)。皮の手袋していたからよかった。ものすごい噛み付きようだった。噛み付いた1羽引きずり出して紐で足を縛って、嘴も噛み付かれないように巻いた。

また見たら、まだいるようだったから、また手を突っ込んで、2羽捕まえた。番(つがい)だよ。それ持ってキャンプに戻ったら、高良先生がオオミズナギドリだと言うんだ。

初めてそれを見たけど、それを先生は生きたまま持って帰ると言うわけ(笑)。私は食べる積もりでいたけど、で、どんな方法がいいのか、考えているうちに雨にたたられて、それで洞窟に逃げ込んでいった。結局、エサもないから生きたまま持ち帰れんわけ。

それで剥製することになった。で、高良先生は、ちゃんとナイフ持って行って、喉元からスーツと腹割いて、腸全部取り出してホルマリンを塗ってね。その辺の草、草を突っ込んで、もうそのままよ。縫う針も糸も何もないもんだから、そのままにして持って帰った。

琉大の風樹館ね、あとで、そこをひょいと見たら私の名前になって展示されているわけ(笑)。確かに捕まえたのは私だが、作ったのは高良先生だし、へえと思ったけど、まあ私の名前のもがあると言って喜んだけど。

— それで、琉大西原キャンパスの風樹館に行って、「上運天賢成捕獲のオオミズナギドリ」剥製を見たいからと言ったら、2000年西原新キャンパス移転の際、剥製の傷みがひどくからと廃棄されてありませんでした。尖閣諸島から持ち帰ったので残っている生物標本はアルコール漬けされたシュウダだけです。高良先生が採取したシュウダの液浸標本だけでしたね。

新納： そうなんだ。持ち帰ったものが残っておれば、貴重な標本になったわ。

久場島には 沢山いる 溶岩穴で営巣 今南小島 いない

上運天： 何でミズナギドリと言うか名前の由来も分からなかった。結局水を撫でるように朝風、夕風に、静かな波を撫でるようにして飛ぶから、水を静かに撫でて飛ぶ、その大きい鳥だからオオミズナギドリと言うんだと初めて分かってね。水を撫でるように飛んでいる所を見たいと思ったけど、見ていない。ただ説明を聞いているだけ、スーと波を撫でるようにして、低空でスーと飛んで行くんだね。

新納： そうそう、そうして飛ぶ、黄尾嶼(久場島)に行くとな、巣がいっぱいあるわけ。朝なったら起きて来てガジュマルなんか、こう這って歩くようにしているわけ。這って登ってそこからスースーと飛んで行く。あれ大変よ、嘴ものすごい、強い。



久場島のオオミズナギドリの巣穴。(新納義馬 1980)

上運天: だから多和田先生が皮の手袋持って行けと言われて、それで噛み付かれたけど、革の手袋だから大した傷にもならないでよかったけどね。

新納: (写真を出して) これが黄尾嶼で撮ったミズナギドリの巣とオオミズナギドリ (前掲の写真) よ。向こうではこういう風な火山島で、溶岩の穴が開いている所を巣にしているわけ。こんな溶岩の穴に営巣して、沢山いる。もう自分ではすぐは飛ばないからね。飛び立てないから、人がいようが何しようが関係ない、とにかく朝なったら、近くのガジュマルなんか利用して、こう大きな幹があるから、その幹に這い登ってきて、そこから滑空するように飛び立って行って、夕方また、巣に帰ってくるわけだ。



新納 義馬

上運天: これが黄尾嶼のオオミズナギドリの巣、南小島はこんなじゃなかった。斜面になっていて、斜面に穴が開いていて、岩石ではない、あれ土かグアノかな。で、朝早くしたら、そこから飛び立つのは見たよ。傾斜 40 度位の傾斜しているから、その穴から出てきたら、パタパタして駆け足して、スーと飛んでいきよったね。

新納: 南小島は木がないから、地面の斜面に巣を作って、これ利用してわけね。今、南小島にはオオミズナギドリはいないよ。

僕らも翌年、野外実習ということで、南小島にも、北小島にも上ったけど、もう海鳥はいっぱいいいたね。だけど、今は南小島には、カツオドリは、あの時みたいにはいない。数は相当減っている。北小島のアジサシも減っている。

翌年 北小島に上がったら 一面 アジサシ営巣 鳥糞臭さに 引き返す

新納: 野外実習で、北小島に渡った時、上陸したら卵から孵ったばかりのヒナがピヨピヨしながら船着場までゴソゴソと近づいてきた。皆で斜面を上がっていったが、もう一面は垂れ流されて、白く変色した糞だよ。植物は岩の裂け目に辛うじて生えているだけで、あとは枯れた草の上に卵の抜け殻と堆積した糞といっぱいのヒナ。もうヒナは人間が来たから驚いてウロチョロしているわけ (笑)。それを空からは親鳥が我が子を気遣いながら鋭い嘴で攻撃しかけてくるさ。威嚇の鳴き声を発



北小島の岩肌を覆うように無数のアジサシ類が営巣、島を覆い尽くし足の踏み場もない。(岡田潤治 1953)

して、糞も撒き散らすよ。あの時夏の 8 月だから、堆積した糞は太陽の日照りで乾燥して、もう臭いが強烈でね (笑)。あんまり臭いもんだから、我慢できなくて、上まで登らなかつ

た。私1人だけ船着場に引き返してきた。調査にあんまり熱心でなかったわけだ(笑)。

向かいの南小島を見ると、アジサシが飛んでいる様子はない。カツオドリが舞い下りるだけ。そのあと南小島に上がったら、やっぱり、アジサシはいなくて、カツオドリがいた。北小島と南小島で海鳥の種類が違うわけだ。片方はアジサシ類で、片方はカツオドリ。島は200メートルしか離れていないのに何であんな棲み分けしているのかと思った。(注2)

上運天: そんなに離れてないのに不思議だね。北小島のアジサシがすごかったんだ。僕らもぜひ行って見たかった(笑)。もう、南小島で、台湾坊主に、小さい暴風に見舞われて、1週間も閉じ込められて、外にも出られない。それでムダな時間を費やしたとって、高良先生なんか頭抱えていたからね(笑)。

※注2:新聞は三段抜きの見出しで、「尖閣列島北小島に新資源 群れなす海鳥一千万羽、琉大 学術調査団の成果」と報じている。「尖閣列島を含む八重山群島の学術調査並びに現地指導のため」高良助教授、宮城助教授外学生12名から成る琉大 学術調査団一行は、「多大な成果を上げ」十一日元気一杯で帰着した。高良助教授の語る、今次調査の特記事項は次の通り。

△尖閣列島中、北小島には今回初めて上陸、アジサシ、クロアジサシ、セグロアジサシなどの海鳥が島一面三十糎置きに散在、また上空は所せまい程に飛んでおり、その数約一千万羽根と推定される。その糞は島内の雑草の腐敗したものや土に吸収されアンモニアの臭でめまいがする程である。…」(琉球新報 1952.8.16)

魚釣島 遠く離れて上陸 断崖絶壁よじ登り 宿営地に 辿り着く

— やっと天気が回復したから、基本丸が迎えにきて、北小島の調査は諦めて、南小島から、そのまま魚釣島に向かったわけですね。

上運天: 南小島から魚釣島に渡島した。天気悪く波も高いので、宿泊予定地(古賀村工場跡)から遠く離れた場所にボート着けた。ここにちょっとした砂浜があって、そこに上陸して、こちらから岩をよじ登ったり、越えたりして、キャンプ地まで歩いて行った。

新納: (地図を指しながら) ボートを着けた所は、この辺か、ここかな? 僕らも皆で行った時(1953年高良3次調査)、帰りは、古賀村の掘割には着けられなかったから、ここまで歩いて、ここから、岩を飛び降りて、迎えのボートに乗った。でも、こんなに岩は高かったかな。もしかしたらここじゃないね。でも、僕はこの近辺(南斜面)に一度は降りている、開発庁調査(1979年)で行った時に。新城君と2人ここに降りて、ここから登って行って、反対側にこう降りた。

上運天: ちょっとした砂浜があって、荷物を全部降ろしたけど、そこには砂浜はあったの?

新納: いや砂浜じゃないね。だけど、あそこは波が高いから、潮の関係で砂浜はなくなったりするよ。砂浜と言うより、海岸に砂があって石もゴロゴロしている。そういう所だ。

上運天：あの時はボートから砂浜に荷物を一旦全部降ろしてから、最初に高良先生と松元さん 2 人が選抜隊として宿営地に向かった。

もう日が暮れかかっていた。いや、海岸なんかは歩かなくて、そしたら、大きな高い山、崖が立ち塞がっている。これ越えないと宿営地には、掘割の所には行けない。

(写真を指して) こっちの崖を登って行った。

多和田先生がロープを肩にかけて、すぐよじ登って行った記憶がある。そのロープを頼りに、僕らも登ったのは登ったけど、こんなに高い崖だったんだ。もっと低かったような気がする。65 年前のことだからよく憶えてない。あの時新垣さんがこの写真を写しているんだから、こんなに高かったわけだ (笑)。

丁度、こんなして高い崖を、上からロープで荷物を上げて、皆も登って、で、そこから宿営地に行った。かなりの距離だった。もう向こう着いた時は真っ暗になってましたね。(注 3)



高い岩崖をよじ登り、ロープで荷物を上げて、岩山越え、宿営地に向かう。(新垣秀雄 1952)

注 3: この時のようすを多和田氏は次のように記している。(原文のまま)

「今日は西北風なので我々の宿泊地である西北岸に船を着けるのは困難である。我々は二千米近いしかも断崖から崩落した石の間を縫つたり越えたり、或は断崖をよじねばならない様な悪道を往復せねばならなかつた。海岸に下された荷物は屏風の様に突出た小さな半島状の断崖を越さねばならない、その時役立つたのは断崖上から吊した二本のロープだった。

私は断崖上で荷物を引上げる役目をしていたが百米位離れた崖下ではげしい大きな物音を立て、煙と共に物の飛散るのを目撃した。その近くには我々のボートがもやつてあつた。私はボートが割れたのだと思つてびつくりした、よく見ればボートはちやんと岩影にあつた。多分何かの原因で岩が崩れ落ちたに違いないと思つた。先発隊が荷物をかついで宿泊所へ急いだ。夕やみがせまつて来て我々を包み、あたりは真のやみとなつた。

やぶ蚊が所きらわず襲撃して我々は一刻もじつとすることが出来ない。生まれて初めて経験する猛烈な蚊群の襲撃、荷物をかつぎ手さぐりで崖を下りたがさつぱり方角が分からない。じつとすることは出来ない、動かねばならぬ、蚊に攻め立てられて無茶苦茶に歩き出した。

先発隊の一人松本君が松火をふりふり合図しながらやつて来た。救われた気になつた。

宿泊所近い海岸で高良氏が流木を赤々と燃やして我々を迎えてくれた。何でも御城のような石垣であつた。トンネル見たような石門をくぐつて家の土間に立つた。土間には直接クバの葉

が幾重にも敷かれ割竹で押えてあつた。これが魚釣島における我々のねぐらであつた。」

(「尖閣列島採集記 多和田真淳 1952年」 尖閣研究 2007収録)

古賀村の納屋 宿营地

上運天：宿営予定地には夜中に着いて、大変だった。

(写真見て)、懐かしい小屋だ、たしか何棟あったか。これ見ると4棟はある、よくこれ残っていたね。だけどこれは、ほんとに古賀時代のものかどうか分かんない。中には道具がだいぶありましたよ。シンメナービー(大きな鍋)まであったからね(笑)。割れてはいた。使い物にはならなかったけど。鍋、釜みたなものもあったような気がする。また薪にしたんだろうけど、天井には、こう差し込まれていたよね。多分あれ薪だと思うんだけど、

石垣の中は、草ぼうぼうだったけどね。今考えるとこういった石積みだけど、よくもこんなに積んだものだなと云って感心するね。

新納：そうだわ、城壁みたいにびっくりするぐらい石垣が積まれている。高さ3メートル、幅2メートルあるかな。とにかくすごいわ。風が強いもんだから、潮風を防ぐために、これだけのもの積むと云うのは大変だ。しかも頑丈に、古賀さんは偉いね。

— (写真出して) これからからの見ると石垣の高さは3メートル以上ありますか。

上運天：この位高さはあったかもね。高良先生が入り口でテッポウユリ持っている。

この写真は、私がシャッター切った。だからよく覚えている。この時4月だから、ユリが咲いていた。雑草が生えている中にポツポツとあった。先生が伸びているユリをひっこ抜いて、運天君 写真撮れ、だからこの場面は、私が写したから鮮明に憶えている。とにかく、これ根元から曲がっている。

2メートル位の丈のものだった。ずーと延びているユリで、花は5,6輪かな、いやもっとあったかもしれん。



上：宿营地になった古賀氏の工場跡の納屋。
下：石垣入口でテッポウユリ持ってたたずむ
高良鉄夫先生 (上下：多和田真淳 1952)

魚釣島のイモ、サトウキビのこと

— 魚釣島にサツマイモとサトウキビがあったと聞きましたが、どんなものでしたか？

上運天：野菜畑の跡があった。サツマイモが出ていたから、これを多和田先生がどこまで伸びているか、ずっと掘ってごらんと言うから、で、蔓をずっと辿っていったら 10メートル余り伸びていたよ（笑）。で、掘り起こしてごらんと言って、掘り起こしたら、イモがちょんちょんと残っていて、中はプーカー（空洞）で食べれない（笑）。スカスカしていてね。サトウキビらしいものもあったけれども、これも長さどれだけか分らないけど、多和田先生が興味半分で計っていったら 10メートル以上はあった（笑）。あれ何か年も放ったらかしているから。

新納：僕は長さは調べなかったけど、久場島では這った状態で立っていた。多分風の強い所は魚釣島みたいにずっと長いはず、久場島も北側の所のものは這っておってちょっとしか立ってないわ。僕は魚釣島ではサトウキビ見つけきれなかった。

上運天：ああそう、ずっと地面に這いつくばって、そんなに沢山はなかったけど、

新納：古賀村の石垣の横の、水飲み場の所から山に上がってゆく、大体この辺かな、昔は畑はこの辺にあったんじゃないか。この畑の所でなくて。

上運天：いや、そこではなかったような気がするんだが。

新納：じゃ、ちょっとした平地があるとそこに挿していたかも分らん。あっちこっちなんかさういう格好で、やっぱり島で生きる 1 つの知恵なんだ。あっちこっちそういう場所を見て、何でも植えられる物は植えていたかも分らん、魚釣なんかは。

しゃれこうべ 海に漂う 板切れで慰霊碑？ 建っていた

— 高良先生が新聞に書かれていた。しゃれこうべが海に漂っていたのを見た場所は古賀村の所ですか、伊良皆高吉さんが、新聞で見て、もしかすると自分の父親かも知れないと言うことで、1977年に魚釣島に渡って、一生懸命探した所はこの辺なんですか？

上運天：いや、あれは、古賀村の方じゃなかった、こっちの所。何でここに葬ったのか、よく分らないけれども、先生の説明では、戦時中八重山から台湾に疎開するためにと、米機にやられて、魚釣島に流れ着いて、島でも亡くなった人がいて、先生もそんなには詳しくは分らない、ただそういう言い伝えがあると話されていた。

あの時、こっちには慰霊塔じゃなくて、板切れか、木片かな、多分あれは船の残骸だと思うけど、そんなに大きくはないがきれいに建てられていた。卒塔婆みたいな感じで立っていた。新垣さんか、松元さんが頻りに質問はしていたけれども、先生もそれ以上は分らないと



魚釣島で亡くなった伊良皆さんらの遺骨ではないかと報じた記事。(琉球新報 1952.5.5)

言っていた。

新納：この人達はここで何日か滞在したわけだから、水がないと、水は目安としたら古賀村付近です、水を利用するんだったら、ここが一番いいでしょう、

上運天：あと湿地帯があった。しかし使用するほどの水はなかったね。

新納：ここに小さい流れ水があった。それとここにも流れがある。これが岩で、ここら付近に岩から落ちて来る水がある。ここから上に行ったら、昔の古賀さんの芋畑跡があったという所、僕はここから登って行ったから。で、この近くの高台の岩の上に、島で亡くなった人たちを祀っていた遭難者慰霊碑が建っている。

それと他に、北側斜面の東寄りかな。そこにも慰霊碑みたいなものが立っているのを見ました。アホウドリ調査（1963年）で行った時に、北側に一人下ろしてもらった。北側の海岸に下りて、そこから調査して行って、少し東へ行った所に砂浜がある。ここよ、ここに慰霊碑みたいなものが建っていた。高さ1.5メートル位あったかな？ よく憶えてない。板で作られて真新しい感じだったと思う。文字が書かれていたけど、ちゃんと読んでもない。あの時は調査に夢中になって、もう時間ないからと、そのまま先に進んで行ったわけ。だけど、こっちの古賀村から、あそこは相当遠いよ、島の反対側近くになるわけだから。(注4)



1969年石垣市が建立した「台湾疎開石垣町民遭難者慰霊碑」(下謝名松栄 1971)

上運天：遭難者があそこまで歩いていけない、慰霊碑とは違う、あれは何の碑だったのかな。

※注 4:1952年には上運天氏らが見た板づくりの慰霊塔は、遺族関係者が建てたものだろうか。1969年遭難者の遺族と石垣市が魚釣島に上陸し、上記写真の遭難慰霊碑を建て、石垣市長も参列して慰霊祭を執り行っているのは、その47年後である。

また、1963年新納氏が反対側の北斜面東寄りに立っているのを見た碑は、1941年台湾航路の阿蘇号が墜落遭難した場所に近い？ことから、(その時は全員生還した)、同関係者が戦後建てたものではなかろうか。

魚釣島では、ずっとヤーサ(飢餓) 磯 食べれる貝少ない

— 1969年遺族と石垣市が魚釣島に行って、遭難者慰霊碑を建てたわけですね。

食べ物が無くて、栄養失調になって亡くなった沢山の人たちが祀られているわけですよ。魚釣島は、そんなに食べる物が少なかったんですか。

上運天：魚釣島にいるとき、ずっとヤーサ(飢餓)した。あそこで食べられる物といったら精々、シュウダ、あとはクバの髓位でしょうね。シュウダもそんなに、南小島はちょっと歩けばシュウダにぶつかりよったけど、魚釣島ではなかなか1日に1匹見るかどうか。と言った具合で、非常に、極端に少なかったし、で、海鳥もいない。南小島はちょっと傾斜面

を登って行って、少し傾斜が緩やかな所になると、もう一面、ミズナギドリ、カツオドリがいて、とにかく沢山いた。魚釣島には、この海鳥も下りて来ない。まあずっと山の天辺に行ったら、いるかも知れんけど、私自身はそこ行ってもいないし、見てもいないから。

新垣さん一緒になって食糧探しで行ったけど、あっちは磯だから、砂浜がないんです。あることはあるけど、狭いし、ハマグリもない、ハマグリ類は、大体陸からの川があって、その辺りにが多いんです。ところがあそこは川はないし、あっても磯だし、だから、岩にペタンとくっ付いているウノアシとか、ベツコウ貝しかいなかった。あれは味噌汁にして旨かったけど、身は硬くて食えなかったね。普通イノー(環礁)でいろんなのが採れるけど、魚釣島はイノーがなくて、磯になっているから珊瑚礁は発達していない。だから食える物は何も採れない。南小島では僅かではあるけども、イノーが、でも小さいよね、10メートルもなかったよね。だから魚釣島は、南小島みたいに、食べるものないから、ずーとヤーサした。漁師たちが米沢山持っていたから、これ分けてもらって助かった。

クバの木倒して、髓食べた 先端若葉近くの芯、やわらかく甘味ある

新納: 食べれる野草といったら、何があるかな、ハマダイコン、ホソバワダン、・・・でもそんなにない。それに種類も、数も、限られている。

上運天: 多和田先生がこれ食えるよ、これ食えると教えてくれた。食えるというだけで、とても食えるもんじゃなかったよ(笑)。ハマダイコンも随分あったよ。葉っぱ相当茂っている。根っ子はこの程度かな、それも苦くて食えなかった。多和田先生は何でも食べよった。私たちが苦いというものも、旨い旨いと言って食べていたけど(笑)、私たちは苦い苦いと言って(笑)。でもその中で旨かったのが、アザミね、トゲを剪定ばさみでチョンチョンと切って、棘なしにして、またモンパノキ、あれは丁度花が咲くのは、7月8月夏に花咲くんだけど、あの時咲いてはいない、蕾だったけど、この蕾と若葉は旨かった。あと何だったか、だけど、野草は種類も数も限りがあるよね。

やっぱり食べるとしたら、クバの髓が一番だ。あっちはものすごいクバが、クバ林と言うか、10メートル位のクバがたくさん生えているよね。だけど、私が切り倒したのは4メートルか5メートル位、とにかく食べる物がないから、クバを、というのは私は戦時中は南洋サイバンで生まれて、向こうで育っているから、戦時中ココヤシを倒して、というか、爆風やら何やらで、倒れたヤシの木を、そこでマチャセとって現地の人が持っているナタがあるんだよ。このナタで切って、その芯を、大体皆ヤーサしているからね、5,6所帯位の家族で皆分けて食べて、旨かったことを憶えているわけ。で、クバも同じだろうと思って、もう道具は鋸もあつたし、ナタも持っていたからね。クバを倒して髓を採って食べた。

だけど、遭難者の人たちはクバの木を倒す鋸だとか、斧だとか、そんな道具何も持っていなかったから、食べる物がなくて餓死したと思う。

で、このクバの芯の髓ね、葉がこう生い茂っているでしょう。新芽が出る寸前のところ、先端の新葉のすぐ下に芯の髓があるから、こっちの所を食べる。この髓を嚙ってみると柔ら

かい筍のようで、ほんのりとした甘味もある。食べられる部分は長くて 30、40センチそこら、太さは直径 15センチ、太い所は 20センチはあった。これ美味しくてごちそうだったよ。皆に料理してあげたら、高良先生に、お前どうしてこれ知っていると言われて、戦時中サイパンで食べたからと言ったら、先生に褒められたよ（笑）。

新納：偉いわ、誰も知らないこと知っているから、高良先生に褒められたわけだ。

僕らも、食料携帯したのは、米、味噌、醤油、缶詰、こんなものかな、油はもってなかったね。で、大体おかずは水煮でやっているからね。

魚釣島 ネズミいた ヤギは一匹？ ネコ、ウサギ いない

— 高良先生が最初に行かれた時に、うんとネズミにも、ネコにも悩まされたと言いますけど、ネズミはどうでしたか。

上運天：ネズミはいたけどね、そんなに悩まされるような状況ではなかった。たぶんシユウダが食べたんじゃないかな（笑）。その辺よくは分らないが、ネズミに襲われたことはない。ネコは見てない。話として、ヤギ、ウサギがいると聞いたけども、ウサギは見なかった。ヤギは一匹だけ見たかな。というのは、私が山で皆からはぐれて迷った時、白いものが前を横切るのを見た。マジムン（魔物）かと思ってびっくりした（笑）。もう何が何だか分からないし、1人ぼっちで、気味悪かったから、急いで山から逃げて下りていったよ。

あとで、高良先生に話したら、あれヤギじゃないかと言っていた。魚釣島にヤギが放牧されている、今頃だったら相当な数に殖えているんじゃないかとも話されていた。それで先生は八重山警察から許可を得て、猟銃持っていた。猟銃を肩にしてね、ヤギ獲って食べる積りだったけど、一匹も獲れなかったけどね。

新納：僕ら翌年高良先生と行ったときもヤギには遇わなかった。ヤギは隆起サンゴ礁の植物なんかは、ンジャパナー（ホソバワダン）なんかを好んで食べる。こう千切って食べる。それと糞で分かる。あの時ンジャナバーなんか全部残っていたし、糞もなかったから、ヤギはいなかったんじゃないかな。

だけど古賀さんの頃はヤギは連れて行っている。山に放ち、殖やしておいて、時々捕って食べたりしているわ。ヤギの親子塚の話がある。あの話からだて海が荒れて漁できない時、漁師たちは、ヤギ狩りしていた。あの方法が面白い、大勢でヤギを取り囲み、茂みに追い込み、火を放って、焼き殺して、食べている。あれは昭和 10 年頃の話だから。漁師たちは、時々島に上って、ヤギ狩りして食べていたから、高良先生と行った頃には、もうヤギは人間に皆食べられてしまって、1匹もいなくなっていたかも分らん。

尖閣の蚊の大軍に 悩まされる

— 尖閣に行った人たちは、皆蚊に悩まされたと聞きましたが、やっぱりすごいですか？

上運天：あそこの蚊はすごい。大群で来るから。もうこういう所の水溜りは全部ボウフラがいて、これから蚊の大群になって、人間を襲う。だから、南小島でも、魚釣島でも、蚊

にはこっぴどく悩まされましたよ。

新納：海岸のサンゴ礁に穴が開いている。ここに水溜まるさ、もう皆蚊の棲み処、巢窟になる。だから陸に近い所でも全部蚊ですよ、波しぶきの当たる岸边までいるから、あその蚊は半端じゃない、もう大変だわ〈笑〉。

上運天：高良先生が蚊取り線香沢山持って来ていたんだけど、効き目なかったね。ほんと、全く効かなかった。もう周りに何十本とやるんだけど、やっぱり蚊はやって来よった。

新納：蚊取り線香では効かんよ。僕は1人キャンプした時、1人用天幕で、蚊取り線香やって寝たけど、全然効かん。とにかく燃えている所はあれだが、燃えてない所は、蚊はたかるから、全然効き目はない。もうとにかく次から次と襲ってくる。だから、上着の袖の所こうやって、鼻息しないといかんから、天幕で鼻だけ出して、あとは全部被って寝たけど、もうそれでも大変、その位あその蚊は特別だよ〈笑〉。

上運天：1回は、魚釣島でドラム缶があったから、水を溜めて焚いて、そして多和田先生が真っ先に風呂入るわけだ、そしたらいきなり先生は「ススキ燃やせ、ススキ燃やせ」、蚊に刺されるからと言ってね。もう周囲全部にススキを並べて、枯れたススキが沢山あったから、それを燃やしてやった。しかし煙やっても、やっぱり蚊が来るんだ。煙の中でもう人間はゴホンゴホンしながら煙に巻かれながら、結局風呂に入ったけど〈笑〉。

あその蚊は火を焚いても、煙で燻しても、あまり効果ない。だけど、しばらく経ったら、蚊は少なくなっていた。あれ時間の問題じゃないかね。

考古遺跡 出土するのは 古賀時代のものだけ

— 多和田先生は、尖閣で、考古遺跡の調査されたんですか。先生の報告書(注5)に、「昔人間が住んだ証拠を一つでも探そうとしましたが全くありません。つまり此处は昔から全くの無人島だったのです」と書かれていますね。

上運天：多和田先生は、考古遺跡を一所懸命調べておられた。とにかくあっちこっち掘って、浜行ってこうやってみたり、崖の下をチョコチョコチョコとやってみたり、人間が住みそうな所を、貝塚みたいなもの探していた。私は考古学には興味がなかったから、そんなに見もしなかったけど、まああっちこちに何かの欠片何かないかと、いろんな所を探していましたね。で、昔から人間が住んでいた証拠はない、古賀時代の生活の跡はこれなんだ、これなんだと言ってました。私に、これなんだ、なんだと言っても、あの時の私の頭では理解できなかった〈笑〉。古賀時代のものはあ



尖閣諸島は考古遺跡ない。あるのは古賀時代からのもの。全くの無人島だった。(多和田真淳 1952)

ったけど、それ以前のは、らしきものはないな。全くの無人島だったと言っておられた。

多和田先生が、植物だけじゃなく、考古学の大御所だというのは琉大を卒業してからあとで知って、私はとんでもないことしたなと思ったんだけど（笑）。先生とそういう思い出があるだけでも自分では幸せかなと思っている。

新納：多和田先生の文を読んでみて、はあー、本当に昔の人はよく勉強しておる。所々にちゃんと、こう注意すべきことが書かれている。先生は、尖閣列島のどこを探しても昔人が住んだ跡がないと書いておられる。ちゃんと、あちこち考古学調査をされて、昔人が住んだ跡がない、あそこは全くの無人島だったと、やっぱり先生じゃなきゃこういうことは、ちゃんと書けないですよ。

※注 5:「島々に上陸して貝塚とか、城とかの跡があるか、石器や土器があるか、何でもよい、とに角昔人間が住んだ証拠を一つでも探そうとしましたが全くありません。つまり此処は昔から全くの無人島だったのです。然し昔の人はこゝをユクン、クバ島ととなへ漁民や航海者はこれを知っていた様です」(前出「尖閣列島採集記 多和田真淳」)

皆にはぐれて 反対方向に 後追いかけて 怖い思いする

上運天：一度は、キャンプを張った所から、皆が出発して行っているのに、私一人ぼっちになっちゃってね、皆の説明も聞かないで自分勝手な行動していたから。そういうこともあったよ（笑）。それで慌てて皆の後追いかけた。皆は東に行ったんだけど、私は勘違いして反対に西に行ったんですよ。もうジャングルだからずっと先は見えないさ、一瞬、白いものが横切るの見て、マジムンだと思い驚いた。もう怖いから急いでキャンプに戻ってきた。

後で高良先生があればヤギだと言ったから、安心したけど、あの時は1人ぼっちだし、もう何が何だか分からなかった（笑）。で、帰ってきてから多和田先生の話では、(地図指して)、そちらからこう来て、多分こっちのことかな、ものすごい崖で、もう行けないから、こっちから崖をよじ登って行っただと、この辺までは歩けた、で、こちら来たらまた崖になってと。私は、皆がこんな大変な思いしていることも知らないで、待てど暮らせど、昼なっても誰も来ない（笑）。で、ご飯を作って待っておこう。夜になっても全然誰も来ないから、多分火を燃やしておけば、その火を目当てにして、下りて来るんじゃないかと、もう海の流れ木から、何から全部燃えやすい物どンドン燃やして、風呂も沸かして、待っていたんですよ。

そしたら、日が落ちて、真っ暗になってから、皆全員帰って来たので安心したけどね（笑）。

夜山道 往来 電灯点けてはダメ 星見て 方向やる

上運天：その時のこれまた新垣さんの話だけ。この辺に登ってこれから沢伝いにちょっと登って、この辺に来たのかな。段々日が暮れて北側から、もう下りようやということで、ここに戻ればよかったけれど、多和田先生はこの方向から帰ると言ったわけ。もう真っ暗よ、漆黒の闇、空に月もなく星があるだけ。こういう時の夜の山道、「懐中電灯点けたらダメ」

だから、懐中電灯なしで、多和田先生が先頭になった。次は新垣さんだったかな。もう何も見えない。星だけが頼り、星を絶対見逃すなって、北極星を右斜め見て、この方向に古賀村のあの掘割があるからということで、多和田先生は先頭になってずーと歩いて行くわけ。

その後を新垣さんが後ろから付いて行く。そしたら、ちょっとした傾斜面だけど深さ1メートル位の崖があって、先生はそこに落っこちたわけだ（笑）。

真っ暗だから、新垣さんも止まらんで、そのまま進んで行って、先生の頭の上にズドンと落っこちてね（笑）。先生はもうアガーアガー（痛い、痛い）して騒いだもんだから、皆驚いて、何事が起きたのか、電灯点けろ、点けろと、そこで初めて、懐中電灯点けた。点けて見たらもう皆大笑い（笑）。2人が落ちた崖は、下は草ぼうぼうだったからよかった。新垣さんは皆に、こっち崖だよ、危ない落ちるよ、止まれ、止まれ、と言って、たいした高さじゃなかったから、皆飛び降りたわけ（笑）。

そんなことあったが、あの時、懐中電灯点けなかったから無事、真っ暗闇のジャングルの中から宿营地まで帰れたと。何でも北極星を右斜め見て、掘割がある宿营地にすぐこっちに降りて来れたと言うていた。宿营地近くまで来たら、私がここで目印に釜の所に火を焚いて置いた。要するにウチリピワと言うのかな、それがチラチラチラして風に煽られて火の粉が飛んだりしていたもんだから、それを目当てにして無事降りて来れたからよかった。

あの時の、多和田先生が仰った懐中電灯は使うな、あれも非常にいい経験でしたね。

新納：山では色んな経験するよな。本当に色んな経験するから。

— 夜、山道を歩く時は、何で、懐中電灯は使わないんですか？

新納：懐中電灯使わなければ、余計な物が見えんでしょ。電灯でこうやると色んな物が見えますね。木が生い茂っていると大きな影が覆い被さってくるように見えます。もう頭の中で色々想像するわけです。1人で山歩けばよけいなことを想像しながら見えるから、それに迷わされたり判断が狂ったりするわけです。これは人間の心の弱さです。

夜の山道では、懐中電灯は絶対使わない。僕は棒だけは持ちます、何があるか分からないから、またいざと言う時に棒は身体を支えられますからね。

上運天：懐中電灯とか、松明は道を選ぶんだそうね。また道を選んで歩きやすい所を通るもんだから、最初の目的地から、全く離れた別の所に出してしまう恐れがあると言って、そう説明されていた。だから、星見て、方向やったら、あの時は、ともかく何があろうとそれ



ジャングルの中で調査に励む。手前はクロツグ後方はシロガジュマルの気根。（多和田真淳 1952）

を右手に見てから一直線に進めと言われて、非常にいいこと聞いた（笑）。

高良先生 陸生貝の新種 多和田先生 センカクツツジ 見つける

— 魚釣島はジャングルの島で、生物資源の宝庫と言われてますから、本領発揮の場だったわけですね。高良先生は陸生貝、多和田先生はセンカクツツジを発見されてますね。

上運天: 高良先生は、木の根っこやらを、あのアメリカナイフで掘り起こして、キセルガイだとか、小さいかたつむりとか、マイマイの殻とか、そういうものを色々探して集めていたね。あのアメリカナイフ（ホーボーナイフ？）と言うのは鋸にもなるし、根掘り器にもなるし、スプーンにもなるし、先生自慢のものだった。

それで木の周囲の根元の所を掘り起こしてキセルガイ見つけた時は、これ初めてだ、初めてだ、と喜んでた。こっちは興味がないもんだから、ああ、そうですかと言って、そういう塩梅（笑）



タカラノミキセル（新種）

多和田先生も、イリオモテランやリュウキュウセッコク、センカクツツジを発見されて大変喜んでた。でも、センカクツツジ発見した時は（注5）、私はこれ見ていない。

食事当番の日だったから、途中で山下りて、食事の準備に行っていたかも知れない。この時のことよく覚えてない。多和田先生が山登るから、ついて行った。かなりの山ではあるけど、険しい山だけど、先生はないな、ないなど言いながら、何かないのか分からんけど（笑）、どこまで行っても終わらない。とにかく天辺に向かってどんどん登っていくから、私は途中から宿営地に食事作りに戻ったような気がする。したら、夕方なって、先生は枝を持って来て、いいもの見つけた。いいもの見つけたと、すごく感動されていた。あれがセンカクツツジだったんじゃないか。その時、私は何がいいものか分からんから、感動しなかったけどね（笑）。ほんと、あの時は、何も知らない子供だったわけよ（笑）



センカクツツジ（新種）（新城和治 1979）

注5: 多和田氏は、センカクツツジを見つけ、欣喜雀躍、思わず「新種と叫んだ」と記している。

「・・・この辺が八合目位だと私は見た。昼食後、その平たん地を横切り木の間をすかして青空の見える所を避け、見えない所へ所へと進んだ。我々は今度はとても大きな断崖へぶつかってしまった。これじや和平山の頂上へ登れぬじやないか、突破口を発見することだ、というので左手へ廻つてみたが見込がない、今度は注意深く右手へ廻つた。日は大部傾いて日光も弱つてきたらし

い、まごまごすると今夜は野営だぞと話しながら足元を見てとび上った。赤紫色の小さな愛らしいツツジの一輪がこぼれ落ちている。私は反射的に上を仰いだ。あつたあつた、断崖を這う様にしてツツジの枝が岩間を流れ赤紫の花房がぎっしり付いて私を喜び迎えている。思わず新種だと叫んだ。松本君がびつくりして寄つて来た。

そこに岩の割目があつて、あゝ何と見事なツツジの群落であろう。私はこんな美しいツツジを琉球で見たことがない、全くキリシマツツジの群落そのままだ。私は世界一の大花を開く珍しいツツジ火山島(方言名ウスフィンガマー)を採集に来て別のもつと珍しいツツジを探つたのだ。やつと我に返つてあたりを観察した。ツツジの古木は根廻り一尺以上もあるが、面白い事に・・・枝が下垂して地につけば、たやすく発根して独立した個体を作り、次から次へと繁殖して行く。ツツジの蔭の土はオウタニワタリの根の様にふつくらとし、そこにはシマキクシノブやヒトツバが生えていた。」

(前出「尖閣列島採集記 多和田真淳」)



その時に撮った写真：断崖を這うように赤紫の花房をぎっしりつけて咲き誇っているセンカクツツジ。(多和田真淳 1952)

南斜面 登る 天辺付近 新種の宝庫 センカクオトギリ 全部ここ

新納：(南斜面の写真指して) 多和田先生が、センカクツツジ見つけたのは、この山の天辺付近ですよ。僕は、南斜面のここら付近にも行きたかったが行けなかった。この写真見ていると、もう登りたくてしょうがないね(笑)。今ここは全部、ヤギの食害で禿山になっているわ。南斜面で1回登った所はここか。一番最後の調査の時、78年の開発庁の時、ここ(B)の断崖から新城和治君と一緒に登って行った。西島さんなんかはボートを用意して来ていたから、ここまでボートを回してくれて、帰りは自分なんかでこちを横断して帰って来るからと下ろしてもらった。

南の斜面は絶壁だから、岩はもうこんなだよ。上から見たら、何か真下に落ちてゆくような感じ。この写真を見ると案外の斜面だけど、実際登ってみると急勾配ですごい、もう立っては登れない。

新城君とここ這って、周囲の石も脆くて滑るし、危険だから、ゆっくりゆっくり這って登って行った。



魚釣島南斜面、山頂付近は新種の宝庫。何があるか分からん。(新納義馬 1979)

上運天：ともかくすごい絶壁だね。その時2人だけで、おおすごい（笑）。

新納：ここで新しい植物見つけたよ（笑）。こちら辺は何があるか分らん、本当に行ってみなければ、この天辺はいつでも新種があるよ。センカクツツジ、センカクオトギリなんかも全部、ここに、天辺付近にある。で、こっちの、この岩ね、この付近には行ってない。ここにはまだ新種があるんじゃないか。もう1回、こっちも行きたくて、しょうがないわ（笑）。

上運天：だろうね。新種がいっぱいあるかも知れないからね。多和田先生はセンカクツツジをこの天辺で見つけたわけだ。いいもの見つけた、見つけたと、とても喜んでた。で、南斜面のこの山を登って、今度は北側にこう下りて来たわけか。

新納：新城君とこう下りて来てね、こう歩いてこの辺まで来たかな。そして戻ったんだけど。これかなりの距離だから、来るだけでいっぱいよ、帰ること考えたら。で、ここでね、タイワンハマサジを見つけたね。北斜面のこの岩場来て降りてね。



センカクオトギリ(新種) (新納義馬 1979)

そして、僕はこっちの海岸近く波打ち際近く歩くから、新城君は少し離れた場所を歩いて調査していたら見つけた、2人同じような行動していたら見つからなかった。

尖閣調査 天気次第 いつ迎えが来るか 放り出されるか 分らん

— 南斜面に2人降ろしてもらい思い切った行動したから、調査できたわけてすね。

新納：もう向こう行くと、島にいつまで居れるか分らない。とにかく調査は急ぐから。

それで頼み込んで、新城君と僕をここ（B）に降ろしてもらった。そうしたから南斜面から北斜面の海岸（A）までの横断調査ができたわけです。

尖閣列島は日程が組めない島です。とにかく天気次第で、いつ迎えが来るか分らない、いつまで放り出されるか分らない。計画ができない島です（笑）。

上運天：私たちも南小島1日、翌日北小島に渡って1日調査して、魚釣島に行く計画だったけど、天気が荒れてしまい、迎えの船もこないから、結局南小島に1週間位閉じ込められた。全く予定が立たなかったね。

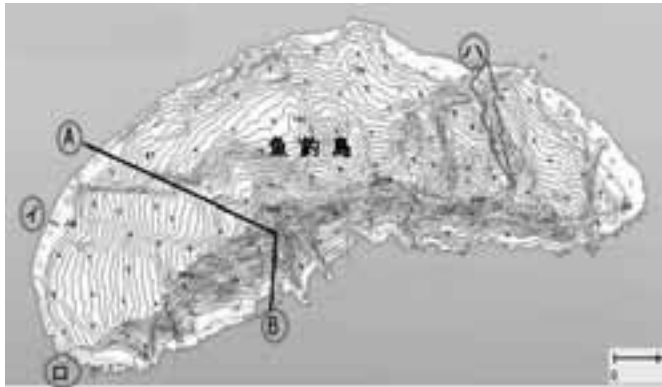
新納：翌年、高良先生の野外実習で行った時は、魚釣島は、この掘割からボートでここ（イ）に上陸したが、結局帰りは波が高いからと、こちら付近（ロ）ですよ。ボートが着れる所まで行って、ここから荷物担いでボートに飛び降りた（注6）。

行った状況によってしか、どこに船が着くか分らない。行ったからといって島に降ろされるかどうか分らない、そういう所。だから、尖閣列島に行く時にはいつでも帰れる準備して調査をしないと、そういう心積りをしないと、調査できない島ですよ。

注6: 当時のようすを瑞慶覧氏は次のように記している。「3日目に船が迎えに来て帰ることにな

ったが、台風接近で堀割近くに母船は停泊できず、反対側の東南側の断崖絶壁の真下にしかボートが入れないとの連絡が入り、大変な状況になった。断崖の上の木にロープをくり付け、そこから一人ずつ、数メートル下の大きな波がうねり狂っているボートに、必死の覚悟で乗りうつり母船にたどりついた。海上は台風接近で 10メートル近くの大波で、船は木の葉のように上下左右に大きく揺れ、そのままでは海中に投げ出されるので、柱に自分のお腹をくりつけて流されないようにして、とにかく生きた心地のしない状態で何とか沖縄まで無事帰ることができた。」

(「尖閣列島実習調査に参加して 瑞慶覧長方」 尖閣研究 2007)



- 1、1953年掘割①から上陸、②に移動して帰船する。
- 2、63年は北東海岸③に降り、山頂近くまで調査する。
- 3、1979年南斜面④に降り、山頂尾根越えて、北斜面⑤海岸一帯まで横断調査する。

魚釣島 北側斜面に 一人降ろしてもらい調査 イヌマキ林 見つける

— アホウドリ調査の時も、新納先生だけ、魚釣島に降ろしてもらって、一人で調査されてますね。高良先生は、「新納さんは魚釣島の村長さんだからね」と言っていました(笑)。

新納: あのアホウドリ調査(1963年高良第三次調査)の時、赤尾島で船が沈没しかけて水浸しになり予定が狂ってしまった。で、すぐ南小島と北小島に行かんとらんから、僕一人を魚釣島に降ろしてもらい、好き勝手に調査させてもらった(笑)。

そしたら、団長の高良先生から「魚釣島の村長さん」という綽名をもらったわけ(笑)。私が降りたのは、魚釣島の北斜面の東側寄りのこっち(ハ)です。

堀割の方からここまで行って調査するのはとてもできない。途中は絶壁になって崖崩れで落ちた岩がゴロゴロしているから。ほんと、いい場所に降ろしてもらい、嬉しかった。

ここからこう登ってこの山頂部一帯まで、もう無我夢中で調査しましたね(笑)。その時に、こっちの砂浜に慰霊碑のようなものが建ってました。ああ、何か建っていると思っただけで、関心もなかったの、近くを素通りしただけで、碑文も見えてません。高さ1.5メートル位で、真新しい板で建てられてあったのでは、これもうろ覚えですね。もう頭の中は、あそこも調査しよう、こっちもと、調査のことでいっぱいでしたから。

とにかく、あの時は、誰にも邪魔されないで、一人で思う存分に調査できてよかった。だけど、夜は蚊に悩まされて、大変でしたね(笑)。

上運天: 「魚釣島の村長さん」で思い出した。平成18年(2006年)かな、ほら、尖閣調

査に行った我々学生メンバーが高良先生を囲んで座談会した（注7）。

あの席で、先生が「あの時、翌日帰りの船で迎えに行ったら、天幕が海岸にポツンとあり、人が居る気配がないから、新納さんは死んだと思った。皆で、“ニイロさーん”“ニイロさーん”と大声で呼んでも出てこない。まもなくしたら、ジャングルの中から出てきたから、“ああ、生きている、生きている” あれ以来“魚釣島の村長さん”の綽名が付いた」と言っていたね、あれ傑作だ（笑）。

新納：高良先生から、大変な綽名を頂戴したけど（笑）。私は魚釣島のため何もやってこなかったから、村長失格だよ、だからとっくに村長はクビになっているわ（笑）。

— この時ですよ、高良先生が、「新納さんは、時間が惜しいということで、夜も寝ないで、懐中電灯を持って調査していたよ」と仰ってましたのは（笑）。

新納：（笑）山というか、頂上の方は、夜はできませんから、海岸周辺だったら懐中電灯持てば草は分かりますから、それで、夜調査したのは海岸周辺です。

ここの沢かな、これから登っていくと、急斜面になる。この山頂部の崖はイヌマキがいっぱい生えてました。林立していると表現できる位いっぱいだよ。これ見た時、えっ、これ何って、びっくりしたね。結局風が強いからそんなに大きくはないけど。

上運天：山頂部で、風が強いから、そんなに高さはないんでしょう。

新納：高さはない。で、太くもない。建築材としては最高だけど、あの場所はある急だから、わざわざ崖下まで登ってから伐るは大変だよ。伐っても下ろしきれない。だから、手つかずで残っていたはず。だから、魚釣島は、ほんと調査してみないと、何が出てくるかわらん。だから、1週間でも、10日でもいて、もっと調査したい。研究者にとって興味尽きない、魅力に富んだ島ですよ。

注7:2006年2月「高良先生を囲んで、尖閣調査の思い出を語る」座談会がもたれた。

1952年二次調査は上運天ら3名、翌53年三次野外実習調査に新納義馬ら11名計14名が参加している。52,3年ぶりに開かれた座談会には、療養中、連絡不能の3名を除いた11名全員が集った。恩師と教え子が一堂に揃って、当時の尖閣調査の思い出話に花を咲かせた。

いろいろなエピソードも飛び出し、調査の裏話も披露された。「魚釣島の村長さん」の一件もその時である。対談の末尾に、該座談会の写真と出席者メンバーを掲載した。

魚釣島のヤギ被害 ひどい 78年 ヤギ殺しておけば よかった

— 1978年にですか、魚釣島にヤギの番（つがい）が持ち込まれ、これが野生化し、ものすごく繁殖して、貴重な植物を食い荒らすだけでなく、片っ端から緑を食い尽くして、島を崩壊させるほど大変な被害を与えていますね。

新納：この尾根になっている部分がもう全部白くなっている。最初放した場所の植物を食い尽くす、海岸沿いを通してハチジョウススキ食べながら尾根伝いに風衝の低いところ

を食べて、南の方に来たのかな。南に来ているということは、ここを越えて来たってことだから、山頂のいわゆる固有種と言うのはもう本当にへばり付いている訳ですから、一番最初に被害を受けている。

地形の険しい風衝の部分には全部山羊が届くんですね。山羊は草よりも樹木を好んで食べますから、もうこの辺りはもう白くなってる。一番崩れやすい地形からやられている。禿になっている。前の写真と比較すると、被害の大きさがよく分る。



ヤギ被害で裸地、はげ山化している南斜面。(石垣市 2012)

上運天: これ見ると魚釣島のヤギの被害はひどいね。

新納: 禿になっているよ、全部。ヤギは何でも食べるんだよ。雑食性だから、これ政治団体が持って来た。与那国の人が、あそこは何もないからと、いざという時はこれを食べなさいといって持たしたわけよ、善意的に。古賀さんの時代にもヤギは山に放し飼いし、殖やしては時々ヤギ狩りして捕まえて食べていた。だからあんまり殖えず、ヤギの食害を抑えることができた。だけど国が上陸禁止にしたから、捕まえて食べる人いないから、殖えるに殖えたわ(笑)。島に人間がいたら、勿論、そこまでの繁殖は押さえられていたけど。

ヤギは繁殖サイクルが短いからどんどん殖えていった。

上運天: 栗国のヤギがそうだった。向こうも、終戦直後、各離島にタンパク質といって栗国にも7頭だか8頭だか、配られて農家で養われていたが、台風の際にヤギ小屋が潰れて、山に逃げて繁殖した。で、私たち3名が栗国に行った時に、どうぞ自分たちでヤギ捕まえて食べていいよと言われた。もう喜び勇んで捕まえようとしたが全然捕まえきれない(笑)。もう全部びよんびよん飛び跳ねて絶壁、崖に行くんだよ。こっちは崖降りるだけでも大変。四足というのは違うね、やっぱり(笑)。



1978年にヤギが2頭持ち込まれて翌79年に4頭に殖えて、宿营地付近で見られた。(白石哲・荒井秋晴 1979)

新納: ともかくヤギは大変、すぐ絶壁行って、もうこんな所までよく行くなと思う所に行くよ。ヤギは絶壁のような場所を好んでたむろする。見晴らしのいい場所に(笑)。

今考えたら、魚釣島のあのヤギは、あの時捕って食べればよかった。78年の開発庁の調査で行った時、あの時は4頭だった。持ち込んだ翌年だから、子ヤギが2頭殖えて4頭だ

け。親子連れでこの4頭がキャンプ場の近くに来ていた。それ捕まえようと思ったら、捕まえられたわけ。新城君と2人で叩き殺して食べようか、そんな話しましたよ(笑)。

だけど所有権があるから、勝手に捕えて食べたら、大変なことになるわとって諦めたけど、あの時、捕まえて食べていたらと、今でも後悔しています。

上運天:ほんとね、あの時ひっ捕まえて食べていたら、今のようなヤギ被害はなかったのに。ほんと、残念だ。

高良先生の調査 科学的に解明 産業と教育に活用 この3つが特徴

— 最後になりますが、戦後の尖閣諸島の調査は、高良鉄夫先生が先駆けとなり、しかも5次に亘る尖閣調査を主導された。高良先生の調査理念について、一言お話し下さい。

上運天:新納さんは、高良先生の調査に2回も行かれています。また尖閣列島には6回も行行って調査している。高良先生の研究を熟知されているから、新納さんお願いします。

新納:そうですね。一言でいうと、高良先生という人の人物像だと思います。

先生は鹿児島高農でいわゆる応用生物学と純正の理学、この両方を勉強してこられて、そこをバックグラウンドにしておられる。だから常に先生の調査には、1はいわゆる尖閣列島の自然を科学的に解明するという

こと、2は調査が産業面にどう活かされるかということ、そして3は、この成果をどのようにしたら教育に利用できるかということ、この3つのことが柱になって先生は5回の調査をやっておられます。これは調査メンバーの人選を見たら分かります。もうそういう点では非常に敬服しますね。先見の明がおりだったなあと思う。いわゆるリーダーシップですね。そう考えると先生は私たちの人間としての恩師になるんでしょうね。



昆虫標本整理に余念のない高良鉄夫先生 (1968年)

上運天:たしかに、高良先生のハブの研究をみても、産業面にどう役に立つかに根差した研究だった。人間的にも深いものがあり、いろいろ教わるが多かった。それにユーモアにも富んでましたね。

新納:僕は先生が書かれたもの読みましたら、とにかくもう楽しくてしょうがないわけ。もう先生の人間味が溢れているじゃないですか、あの子供なんかに向けて書いてあるのなんか見たら、読んだら、もう本当に先生の人間味が溢れていて。もう不思議でしょうがない、あんな厳しい顔からなんでこんな文章ができるのかね(笑)、羨ましいですね。

— とても楽しく、有益な対談になりました。長時間ありがとうございました。(了)

※参考 座談会、高良先生を囲んで53,4年前の思い出語る

■2007年2月14日 沖縄県公文書館裏「可否館」にて

出席者	高良鉄夫	元琉球大学学長 (93歳)
第二次	上運天賢盛	(生物科2年) 元沖縄女子短期大学付属高校長 (74歳)
第三次	新納義馬	(生物科4年) 元琉球大学教授 (81歳)
以下	瑞慶覧長方	(生物科4年) 元沖縄県会議員 (74歳)
同じ	新島義龍	(生物科4年) 元沖縄県立那覇高校教諭 (74歳)
	田中一郎	(生物科4年) 元沖縄県立開邦高校教頭 (75歳)
	森田忠義	(教育科4年) 元鹿児島県立鹿児島中央高校教諭 (74歳)
	大屋一弘	(農学科2年) 元琉球大学農学部長 (71歳)
	東屋清二	(農学科2年) 元琉球大学教授 (72歳)
	泉川寛	(畜産科4年) 元アジア畜産取締役種豚場長 (75歳)
	岡田潤治	(畜産科3年) 元(財)沖縄県農業開発公社技師 (73歳)
	比嘉清幸	(畜産科3年) 元琉球協同飼料株式会社常務 (74歳)



先生どうも、
長い間ごぶさたして、
お変わりございませんか



君たちは歳はとったが、
顔形は昔のままだ。



座談会始まる前に
先生を囲んで
記念写真をパチリ。



魚釣島では、
残波船の残骸と
クバの葉を被せて、
仮小屋建ててね、

あの時、北小島に、
アホウドリがいたんですよ
崖下を見たら、
白い大きな鳥が、海に。



座談会を終えて、
もう一度、
高良先生を囲んで、

53、4年ぶりの再会は実に感動的だった。
お互いの無事と健康を祝し、懐かしく喜悅した12の顔々。
当時の師と教え子が揃った感激の集いとなった。
師弟愛と学びの友の絆の固さには胸打つものがあった。
実に微笑ましく、感動的な光景は筆舌し難い。
尖閣調査の思い出話しに興じ、53、4年前にタイムスリップ。
いろいろなエピソードも飛び出し、爆笑と興奮に包まれた。
「尖閣研究 高良学術調査団資料集 2007年刊」には、座談会の
内容と高良先生はじめ出席者全員の回想記が掲載されている。



閑話休題 沖縄の2大巨人・岩崎翁の薫陶と黒岩校長の遺風を受ける 恒藤博士と正木氏の調査に鼓舞され、尖閣調査を成し遂げる

明治・大正年間に卓越した学問の2大巨人が沖縄に居た。

石垣島測候所第二代所長岩崎卓爾翁と国頭郡組合立農学校初代校長黒岩恒氏である。

岩崎翁は宮城県仙台の出で、台風最前線での気象観測の傍ら八重山の自然・生物や歴史・民俗の研究に半生を捧げた。生物研究については学会へ報告し新発見となったイワサキコノハチョウなど 10 数種も上っている。弟子ともいふべき地元研究者を多く育て、昭和 14 年、尖閣に昆虫調査を行った測候所員正木任氏はその一人である。(その正木氏も、高良博士の調査を鼓舞するのに役だった)

黒岩氏は沖縄の自然界の学問的開拓と称されている。高知県に生まれ、34 歳の時沖縄師範学校教諭で赴任、以後 28 年間沖縄に住んで、動植物、地学、農林学研究など多岐にわたり研究し、「地学雑誌」「動物学雑誌」「植物学雑誌」に 40 点余の研究論文を発表している。尖閣列島調査及び命名者としても知られている。

のち国頭郡組合立農学校(沖縄県立農林学校の前身)の創設に伴い初代校長として実学重視の校風に育て上げ、日本三大甲種農学校の一つとして全国に同校の名をとどろかした。

高良鉄夫博士は小2の頃、石垣島に移住、天空がかき曇るほどの乱舞する海鳥の島があるとの話を聞き、古賀の無人島に魅了された。その尖閣列島のことをいろいろと教えてくれたのは岩崎翁だった。

ヤギの草苴りや薪取りが日課だった少年の頃、山野へでかけテンモンヤージュウシューメー(天文屋の御主前)翁に出会うと、いろいろと教を乞うた。翁は高良少年に、尖閣の海鳥や八重山の自然のすばらしさを手ほどきしてくれたという。

長じて沖縄県立農林学校に進学した。そのときは黒岩氏は世になく直接の教を受けることはできなかったが、氏が育て上げた農林学校の実学重視の校風に薫育された。

奇しくも、黒岩校長の衣鉢を継いで戦後初の尖閣列島調査を敢行することになる。



岩崎 卓爾



黒岩 恒



恒藤 規隆



正木 任

高良博士は、調査の動機の一つに海鳥の雛の訓練が観たかったことを上げている。

窒素肥料研究学の泰斗恒藤規隆博士は、古賀辰四郎氏に乞われて、尖閣でグアノ調査を行った。その際に雛訓練を観て感嘆し「南日本の富源」に記したのを読んで強い衝撃をうけたという。

周知のように恒藤博士は日本の燐鉱石研究の嚆矢であり、ラサ工業の創設者、南シナ海新南群島(南沙諸島)の開拓者として、明治大正期の農業化学工業界に大きな足跡を残している。

高良博士は、少年時代と農林学校時代は、沖縄の学問の2大巨人岩崎翁の薫陶と黒岩校長の遺風を受け、青年時代には、日本燐鉱石研究の大御所恒藤博士そして岩崎の門弟正木氏の尖閣調査に鼓舞・刺激されて、尖閣列島調査を成し遂げたとも云えよう。

※本コラムは「尖閣研究 高良学術調査団資料集 2007 年刊」より転載しました。